

やる気多めのシンジ君、
エヴァに乗る

九段下

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

碓シンジは、世界移動者である。別の世界で巨大ロボットと共に戦ったシンジは、世界を救った後に元の世界に帰還した。

旧作準拠。2周目記憶持ちでもなく、オリ主でもないシンジ君に幸せを掴んで欲しかった。

特殊能力を持つ為にクロスオーバータグが入りましたが、そこも独自設定ですので説明が入ります。エヴァ知識だけで大丈夫です。

目次

特別編

クリスマス特集。涙のメリークリスマス！シンジ、深海に墜つ！

本編

やる気多めのシンジ君、エヴァに乗る

使徒襲来。

事の顛末。ネルフの大人たち。

見えない犠牲者。

殴る相手。

綾波レイという少女

レイ。心の向こうに。

決戦、第3新東京市（前）

決戦、第3新東京市（後）

戦友襲来／アスカストライク（前）

202

戦友襲来／アスカストライク（後）

218

晴天のガールフレンド／波乱の転校生

晴天のガールフレンド／友達になりた

い

晴天のガールフレンド／JAアタック

272

248

236

123

97

75

33

11

1

139

164

177

特別編

クリスマス特番。涙のメリークリスマス！シンジ、深海に墜つ！

♪ Jingle, bells, Jingle, bells, Jingle all the way ♪

雪の降る夜に、少女の歌声が響く。鈴のような愛らしい声が、ガランとした格納庫に響いた。

「天下の地球ロボット防衛軍も、ギガントガンナーとパンチャーを残して全機撃墜。修理は続いているけど、当日動けるのは私たちだけ、か」

惣流・アスカ・ラングレーの呟きが暗闇に落ちる。アスカの視線の先、赤く塗装されたキガントガンナーが中空を見ていた。

「わかっているわ、ガンナー。私達はこの星の希望になった。人類を守るために、負けることは許されない。ホント、最悪のクリスマスね」

アスカの口から白い息が漏れた。明日の決戦に向けて、ファウスト委員会は最低限の

人員を残して休息を取っている。何時もは誰かしらが騒いでいる格納庫も、今は誰もおらずに寒々としている。

その格納庫に、新しい声が響いた。

「でも、僕たちもいる。大丈夫。僕たちは負けないよ」

ギガントパンチャアのパイロット、碇シンジだった。彼は2人分の缶を持って、アスカに片方を渡した。

お疲れ抹殺ティーと書かれたラベルを見て、アスカは受け取る。基本的にジュースのセンスが悪いシンジにしては、マトモな選択だった。いつも自分が飲んでいいるから憶えたのだろうか。

「ハン、流石に1人で人類を守ってきたセンパイは気合いが違うわね。自分がいれば人類は大丈夫だって?」

アスカは皮肉げに笑った。アスカがギガントガンナーに認められ、戦いに参加するまで、唯一稼働するオリジナルギガントシリーズで人類を守り続けた勇者。その彼からすれば、今回のようにごく少数で人類を背負うことも慣れたものなのだろう。

「海神帝国か。まさか宇宙からの脅威を気にしてたら、地球にもトンデモ勢力がいたなんてね」

まいったよね、とシンジは笑った。戦場にいるシンジはともかく、一度ロボットを降

りた彼は一気に大人しい少年に戻る。

「僕さ、ここに来る前はちよつとした覚悟をして電車旅してたんだよ。10年も放っておかれた親に呼ばれて、怖かったけど行くことにした。今まで居たところでもいじめられててさ。そこから逃げ出したかったのもあった」

「それが突然こんな所に連れてこられて、しかも僕しか戦えないなんて無茶言われてさ。ふざけるな、っていうのが本音だった。だって突然来た僕みたいな中学生を戦わせようって言うんだよ、頭がおかしいんじゃないかって思った」

シンジは手元にある缶コーヒーを開けて飲んだ。鉄壁パンチコーヒーの香りが周囲に漂う。

「でも、ココのみんなはそうやって荒れる僕に寄り添ってくれた。戦場に立つのは僕だけだったけど、みんなが一緒にいてくれた。それに気付くまで結構かかったんだけど、本当にみんなが一緒に居たんだけだ」

アスカも気づいてるんじゃない？とシンジの問いかけにアスカも答えた。

「知らないわよそんなこと。私達しか戦えないから、そうやって都合よくおだててるだけでしょ」

「まあそれもそうだけど」

シンジは短く肯定した。

「でも、それだけじゃない。僕は、アスカにそれを知って欲しいんだ。だからアスカ、君は僕とギガントパンチャーが必ず守る。」

君が笑ってくれるまで、僕とパンチャーは絶対に倒れないで君を守るよ」

そう続けるシンジの顔をアスカが横目で見る。

(やつぱり勇者サマじゃない。何よ、アタシはそんなに信用ならないっての?)

シンジの言葉には力があつた。シンジなら、本当に倒れずに守り続けてくれるだろうと、強制的に安心させるような言葉。

それがアスカは気に食わなかつた。

「あーそーですか。じゃあ明日は頼むわよ。センパイが守ってくれるなら、私は確実にウルトラ粒子弾頭を当ててみせるわ。」

もしかしたら、センパイが守るヒマもないかもね」

アスカはそれだけ言い捨て、格納庫を去る。これ以上シンジと会話するつもりはなかつた。

海神帝国の再侵略まで、後8時間。



「ハハハハハ！良く恐れずに来たな地上の勇者よ！それでこそ地上侵略をする意義もあると言うもの！この星の真なる勇者を決める戦いを始めようではないか！」

海神皇帝と、皇帝を守る3体の深海騎士ロボットとの戦闘は熾烈を極めた。

海の上に浮かぶ巨大要塞には、四方を海に囲まれた闘技場が用意されてギガントシリーズを待ち受けていた。

そこにいたのは皇帝を守る3体の海神騎士ロボット。

剣、三叉槍、網と射程の違う武器を持つ各騎士ロボットは、見事な連携を取りパンチャーを追い詰めた。

対するギガントロボットは、精彩を欠く連携で突破口を開くことができない。

パンチャーはひたすらに防御を構え、ガンナーの射撃に攻撃の全てを任せていた。

「他愛ないぞ地上の勇者よ！幾度となく地上を救ったと言うのは、もしやまぐれか！」

三騎士の嘲りに、アスカが激する。

「ウルサイ！アンタ達なんて、私1人で十分よこのザコども！」

冷静さを欠いたアスカの射撃がパンチャーごと三騎士を打ち据える。

これに憤ったのは、三騎士だった。

「まさか味方ごと撃つとは！貴様には誇りがいいのか！」

網を持った騎士ロボットが目の中のパンチャーから視線を外し、ガンナーを狙う。

「させるかあー!」

しかし、それをシンジは許さなかった。

先の一撃、実は三騎士の攻撃に耐えるために「鉄壁」を使っていたパンチャーにはほぼダメージがなかった。パンチャーの装甲についた傷は前面からの物のみ。ガンナーの攻撃は、初めからパンチャーの超防御力を計算に入れていた。

後方にいるガンナーを狙ったために三騎士の連携にズレが生じる。

シンジは、その一瞬を見逃さなかった。

亀のように防御を固めていたパンチャーが鋼鉄の腕を構える。左足を大きく踏み出し、両足を強く踏みしめたパンチャーが遂にその拳を振り上げた。

「貴様……この為に今まで、この一瞬の為に亀になっていったのか!」

「ガンナーがきつと突破口を開くと信じていた!そして、それに応えることができるから彼女も地上の勇者なのさ!」

騎士ロボットが自らの失策に気付いてパンチャーに向き直ろうとする。

だが、それも悪手。他の2騎の牽制を手掛けていたアスカの射撃が、網を装備した騎士ロボットの体勢を崩した。

そして、ギガントパンチャーの肘から爆炎が上がり、腕に搭載されたジェットエンジンが唸りを上げる。

「くらえ、人類を背負う巨人の鉄拳！」

ギガント・パンチ——!!」

人型にしては大き過ぎる前腕部がジェットによって加速される。

腕を振る運動という意味を指す、パンチの概念を破壊するほどに高まったエネルギーが騎士ロボットの胸に炸裂する。

重く、腹に響く轟音が鳴った。超重量の兵器同士のみが鳴らす、勇気ある戦いを示す音が鳴る。

「打ち抜いてみせるー！」

ギガントパンチャーの拳は、騎士ロボットの胸を打つだけでは止まらない。その胸の装甲を貫き、ギガントパンチャーの大きな腕が、肘まで騎士ロボットに埋まった。

騎士ロボットの一角が遂に崩れる。

しかし、騎士ロボット達は唯では終わらなかつた。

ギガントパンチャーに胸を貫かれた騎士ロボットは、そのままギガントパンチャーの腕を掴んで叫ぶ。

「我が同胞よ！私がこの勇者を留めている間に、あの娘を！皇帝陛下のために勝利を！」
潰れたコクピットに胸を潰され、血を吐いてなお戦う騎士が、決死の表情で仲間を呼びかける。

「なんと、素晴らしき忠義!友よ、承知したぞ!」

騎士ロボットの一部にパンチャーが動きを封じられた隙を突き、剣の騎士と槍の騎士がガンナーを襲う。

「友の命を無駄にせんが為に!娘、貴様を討ち取る!」

しかし、ガンナーの前に立つ巨人は。

一度守ると決めたのならば、星すらも守る勇者は立ち止まらない。

「させないと言った——!!!」

右手を騎士ロボットに掴まれたパンチャーは、それでもガンナーの危機に駆けつける。重い足取りは力強く、不気味な稼動音を響かせて騎士ロボットへと足を向けた。

しかし、満身創痍のパンチャーに、アスカは叫ぶ。

「来るな!アンタはその死に損ないを仕留めてなさい!連携の切れたこいつらなんて怖くないわ!」

勿論、強がりだった。ガンナーはその運用上パンチャー程の装甲を持たず、一度接近戦に持ち込まれるだけでもピンチになる。

それでも、満身創痍のパンチャーにこれ以上無理をさせる訳にはいかなかった。

「僕は、君を守ると言っただんだ!」

シンジもそれは分かっているはずである。

海神皇帝を守るバリアを突破して、勝利を掴む為にはパンチャーとガンナーの連携が必須だと。

その為には、これ以上パンチャーにダメージを負わせる訳にはいかないと分かっているはずである。

しかし、シンジはそれでもアスカを守る事を選んだ。

「必殺・ギガントキック——！」

ギガントパンチャーの両足から紫電が走る。

元々、接近・徒手格闘用に建造されたギガントパンチャーの追加装備。ギガントパンチャーの足を覆うブースターが音を上げて稼働する。

シンジは、騎士ロボット分の追加重量を持つて移動する為に、一歩ずつギガントキックを地面に向かって放つ事で移動エネルギーを賄った。

当然、本来の使用用途からかけ離れた運用を強いられたパンチャーの脚部がひび割れていく。

だが、その決死の突撃は実を結んだ。

ガンナーまであと一步の所に来た騎士ロボット達の背後にギガントパンチャーが立つ。

「アスカ。すぐに戻って来るから、ちよつとだけ待っていてね」

シンジはそう言い残して操縦桿を握りしめる。

ギガントパンチャーが、そのまま騎士ロボット達に体当たりを仕掛け、自由な左腕を持つて騎士ロボットに抱きつく。

そしてそこまで来た勢いを持って、闘技場の外へ三騎士ごと身を投げ出した。

「シンジ——!!!」

アスカの悲鳴が海に響く。思わず、といった具合に腕を伸ばしたガンナーの先で、パンチャーが海に落ちていく。

シンジは、昨日の宣言通り、アスカとギガントガンナーを守り通したのだ。

「シンジ——!!!」

ただ、その地上の勇者をしても、少女の心は守れずにいた。

本編

やる気多めのシンジ君、エヴァに乗る

突然だが、碓シンジは世界移動者である。

彼が移動したのは2015年の春。

彼が父親に呼ばれて第3新東京市に向かう電車の中のことであった。

碓シンジは、移動した先の世界で巨大ロボット・ギガントパンチャーに出会い、彼とともに人類の為に戦う戦士となる。

彼の話をする前に、少しだけ説明させて頂こう。

まず、シンジが移動した別の宇宙での地球は、西暦にして約1990年前後。世紀末と呼ばれる時代だった。

そして終末思想に侵され始めた人類は、本当の脅威と出会う事になった。

宇宙からの使者、自らをズズーン星人と名乗った異星生命体が、地球の支配権を要求してきたのだ。

不当な要求を跳ね除けた大国を襲ったのは、ズズーン星人が差し向けたズズーン口

ボット軍団。

その1つ1つが50メートルを越す巨体のために、同じ人類を倒す事しか考えられ
いかなかった既存兵器は殆ど効果を発揮せず、人類は生きる場を奪われ続けた。

だがしかし、人類もただやられる訳ではなかった。各国で抵抗の結果、破壊した巨大
ロボットのパーツを研究・再利用し少数ながら巨大ロボットを作ったのだ。

その人類の希望を擁するのは、ファウスト委員会と呼ばれるレジスタンスが持つ基地
である。

ファウスト委員会は各国が協力する場として作られ、国連の支援を受けながらズブー
ン星人との戦いを始めた。

対するズブーン星人もファウスト委員会を地球攻略の最大の障害と認め、世界各国に
散っていたロボット軍団はファウスト委員会攻略の為に集結していった。

地球防衛戦争の幕開けである。

シンジが世界を渡ったのは、その地球防衛戦争が開始してから二ヶ月ほどが経過した
時期のことである。

ズブーン星人の卑劣な罠によってギガントパンチャーのパイロットは超空間に監禁
され、地球側は必死に救出作戦を実行した。そして、その時にパイロットと一緒になっ
て現れたのが碇シンジだった。

その後の紆余曲折によって、戦闘能力を失ってしまったパイロットの代わりにシンジがギガントパンチャーに搭乗し、その後一年を掛けてズブーン星人との闘いを収めた。

しかし、平和は長くは続かなかった。

つかの間の平和の後に地球を襲ったのが、ズブーン星人を超える巨大文明グワーン帝国のエリートロボット軍団80体。

グワーン帝国から逃げ出してきた少女、アスカを仲間に加えたシンジは地球の明日のために闘い続け、その最中にギガントパンチャーを一時的に強化出来るようになる。

それは、パイロットの心の力を現実には作用させる特殊なサイキック能力だった。

激しさを増す帝国の攻撃の前に、自分の新しい可能性を伸ばす訓練を行ったシンジとアスカは、サイキック能力「精神コマンド」を手に入れることに成功する。

遂に覚醒した2人の少女少女によって地球の平和は守られ、2人は惜しまれつつもその世界に別れを告げた。

2人はその一年間で少しばかりの成長し、強い心を持って元の世界に帰還する。

そして現在。戻ってきたと思えば覚えのある電車に手荷物が目の前にあつた。驚くべきことに、「こちら」の世界の時間はまるで過ぎていなかったようだ。

碓シンジは二度目の世界移動を終えた奇妙さに首を傾げつつ、父の待つ第3新東京市に向かう。

「文面はなんでも良いとして、父さんが変わってしまったから初めての手紙なんだ。家族のSOSかも知れない手紙を、無視するわけにはいかないよね」

電車に揺られ、シンジの心は子供の頃、母親がまだ生きていた頃の記憶を辿っていた。その当時は両親ともに元気で、精一杯の愛情を受けた事を覚えている。

（母さんが死んでからの父さんは別人みたいに変わってしまった。それだけショックだった、つて考えるのが普通なんだろうけど、今考えればどうも納得できないんだよね）
そのまま思考の海に潜ろうとした時、丁度電車が停車駅に止まった。その場から動くことなくなった電車のアナウンスを聞きつつ、思考を中断したシンジは軽い足取りで電車から降りていく。

「まあ、今考えても無駄かな。考えすぎるより動いた方がきつと良いことある」

熱血・必中・鉄壁・ド根性を心に抱く彼は、これから始まる新生活に臆することなく歩き出していった。



いくら新生活に臆することはなくても、脈絡もなく巨大生物が遠目に見えたらさすがに人は動揺する。

「なんだこの怪獣…まさか僕らの地球まで宇宙人に狙われているなんて思わなかったよ！」

シンジの叫びはミサイルの爆音に掻き消され、誰の耳に届くこともない。しかしシンジが止まることはない。別世界以上の理不尽な接敵に、とりあえず文句を言いたかった。

「ていうか、こんな大怪獣がいるなら何か対抗策はないの!?？まさか第2のギガントパンチャーが日本に居るとか？」

くそつ、と言い捨てる。いくら慣れていても流石に生身で巨大生物にエンカウントしてして焦らないはずもない。一先ず考えることをやめて、シンジは全力で駆け出すことにした。

息をあげながら何駅も先の駅を目指してひたすらに線路近くを走り続ける。ゼエゼエとうるさく言っているはずだが、生憎とミサイルの爆音はそれすらも打ち消した。

迎えが来ているのか、迎えも逃げ出したのかは分からないが、経験上同じところで立ち止まっているのも事態が好転することはないことをシンジは知っていた。避難場所すら分からないのに戦場で立ち止まるなぞ、自殺行為だとすら思っている。

パイロット時代に身の危険があつた時は、拠点に向かって走り続ければ何とかなるものだと相場が決まっていた。この場合は一刻も早く待ち合わせの場所に到着するべき

だろうと、シンジは必死に足を動かさせた。

あー、と声を荒げたシンジは、バックから一通の手紙を取り出した。正確には手紙ではなく、同封されていた写真の方に目やり、シンジは唖る。

写真には、妙齢の美人が笑いかけている姿が写っていた。その胸元はワザワザ矢印まで引かれて強調されている。

端的にいうと、豊かな胸はシンジの好みのもど真ん中であり、厄ネタとしか思えない誘いに乗ったのもこの写真の礼を言う為が半分くらいあった。

勿論、冷え切った親子関係に一石を投じるのが最大の理由ではあるのだが。

こちらに向かつて一直線に走り来る車を見て。この女性が迎えならいいのにな、とシンジはうつすら望み。

「すっごく綺麗な人なんだけど、アスカの例が後を引きすぎて喜ばないんだよなあ。致命的にめんどくさい性格の人じゃない事を祈るしかないか」

過去の苦すぎる記憶に苦しめられていた。



葛城ミサトのルノーが無人の市街を疾走する。

最低限の自己紹介をした少年、シンジをルノーに乗せたミサトは、写真と彼の姿が違ふことに疑問を持つていた。

（二回り、しつかりした体になってない？ そんなに古い写真じゃ無かつたはずなんだよねー）

車に乗せる時に見た程度だが、見間違えた訳ではない。写真では線の細い、それこそ髪さえ伸ばせば女性と見間違ふほどの少年だつたはずだ。

だが先ほど見た彼は、可愛らしい顔の造形こそ変わらないものの、その体は男性らしくなっている。

（少し気になるけど、本人であるのは間違いないし。男の子が体を作るのは良いことだわ。若いのにポイント高いわねー）

「ええと、葛城さん？」

ポイント高い子から指名がかかった。

「ミサトでいいわよ。碓シンジくん」

サングラスを外す時間がなかつたので、せめて朗らかに答えてみせる。サングラスをかけた女の車に乗るなんて、彼も気になるだろうが安全の確保が先だ。少し我慢してもらうしかない。

「じゃあミサトさんと。迎えに来てもらつてありがとうございます。新しい街じゃ避難

先も分からなくて、助かりました。ミサトさんも避難したかったでしょうに、僕のために遅れてしまつてすみません」

(あー、そういう反応になるかー)

まさか自分が使徒との戦いの為に訓練して来た人間で、自分がアレと戦う組織に向かっているとは思っていないのだろう。この車も、何処かの避難所に向かっていると考えるはずだ。

「いいのよ。コッチこそごめんね、遅くなつて。電車が止まつてから急いで来たんだけど、あなたの方からも来てくれて助かったわ。」

「ずいぶん走り慣れてるみたいだけど、部活で走つてたの？」

「その、部活とかじゃないんですけど。運動できないのが嫌で少し走つてみたんです。こんなふう役に立つなんて思いませんでした」

(本当にいい子なのね)

高速域で車体を走らせている為に、横目でシンジを見ることのなかったミサトは容易く騙された。

少しでもシンジの顔を見れたのなら、慣れない嘘をつく為に凄惨な顔になった彼が観察できただろう。

「それに、あんな怪物が出てくるなんて誰も思いませんよ」

「あいつはね、使徒って言うの。映画であるでしょ。人類の敵ってやつね」
「人類の敵、シトか。確かにあれじゃあ仲良くできないかな。」

…って名前までついてるんですね。あいつを知ってるんですか？」

言葉の端から、ミサトが使徒を知っていることまで理解してみせたシンジに驚嘆する。

そして、今は説明できない為になんとか誤魔化さないと思考を走らせる。

しかし、ミサトの考えは、上手い言い訳を思いつく前に携帯電話の着信音に中断させられた。

「ちよつとゴメンねシンジくん…」

リツコ？ええ、無事合流できたわ。そう時間はかかんないから受け入れ準備お願いね。

…本当に戦自はやるつもりなのね。ええ任せて。時間までにはしっかりと逃げ切つてやるわ」

電話は同僚の赤木リツコからのもので、シンジの安否の心配と、戦自によるN2の使用を予告するものだった。

ミサトは素早くルートと現在地を脳内で確認し、さらにアクセルを踏み込んだ。

「少し急ぐことになったの！しっかりと掴まっててね！」

ルノーのエンジンが震える。そして、それは気分良く走るための振動ではなく、負担を考えることなく速度を絞り出すための雄叫びとしてマフラーを鳴らした。

シンジもミサトの纏う空気が変わったことに気付き、しっかりと椅子に座りなおした。

「大丈夫です、ミサトさん。どうぞ！」

「さあ、行くわよ！」

戦自によるN2投下まで30分を切っている。

時間的余裕が全くないわけではないが、道を一つ間違えてトロトロしていれば間に合わなくなる。

1人のドライバーとして、ルノーのオーナーとして負けられない勝負を前に、ミサトの集中力は久しぶりに高まっていた。



「お疲れ様です。ナイスドライブでした」

「ありがとー。さて、やっと説明できるわね。あ、その前にシンジ君、お父さんからIDカード預かってないかしら。」

決死のドライブを越えてリラックスしたミサトの横顔に、一瞬シンジは見惚れていた。

カートレインに乗ったミサトは、キツく食いしばっていた口角を持ち上げ、サンングラスを取り外してリラックスする。

そこにはこちらに向かって優しく笑いかける、写真の笑顔よりも美しい顔の女性がいた。

（まさか綺麗で本当に良い人がいるとは思わなかったな。いやでも待つんだ。正に理想の女性、って感じの人でも好きな人にだけ滅茶苦茶厳しかったりするし、理想を上げるな碇シンジ。

顔とスタイルと人当たりが最高なだけの普通の人じゃないか。そうだ、僕の好みから外れているはずだし冷静に……)

「有りますよ。この封筒に入っていました」

冷静になれなかった。・

IDカードと一緒に父の手紙まで渡してしまった。大怪獣とのファーストエンカウトに続いての命がけのドライブの直後で、判断力というものが寝ているらしい。

手渡された手紙の内容に絶句するミサト。

彼女の中の父の像がどうなっているかは不明だが、「どうせこんな所だろうと思った」

という反応が返って来なかったことに安心する。まさかこれが素だとは思いたくなかった。

「いくらなんでもこれはないと思いませんか？事情があつても、これじゃあ本当に来て欲しいと思つているのかとちよつと疑つちやいますよね」

返事は、少し遅かった。

「そうね、これはちよつと……。あ、シンジ君、お父さんのお仕事が何か聞いたことある？」
「人類を守る仕事、つて聞いてます。正直、あまりにスケールが大きくてよく分かりませんけど」

露骨な話題逸らしにシンジは乗る事にした。この手紙の話は、早めに終わらせた方がシンジの心にも優しい。

そう考えたシンジの眉根が寄っていることに気づき、ミサトはシンジとゲンドウの関係を推し量った。

「お父さんの事、嫌い？」

「それも、わかりません。小さい頃の父さんは優しくて、僕にいろんなことを教えてくれました。父さんも僕も母さんが好きで。それが楽しくて。」

でも、今まで会ってなかつた父さんの事をどう思つてるかなんて、会つてみないと分かりません」

資料に目を落としながら、シンジは答える。ミサトの目が此方を向いている事を感じていたが、目を合わせられなかった。

「そうよね。そんなに、自分のことなんて分からないわよね…」

それきり会話は途絶え、車内は静かになる。

車は静かに、ネルフ本部であるピラミッドに降りて行った。



車から降りて移動し始めて10分、少しばかり迷ったミサトを出迎えたのは、金髪で白衣を着た女性だった。

「何やってたの葛城一尉。人手も無ければ時間も無いのよ」

「ゴメン!!」

ミサトを軽く叱責すると、女性はシンジに気がついたように振り返る。

「この子が例の子供ね?」

「そうよ。マルドゥック機関から報告のあったサードチルドレン!」

ミサトの声を聞きながらシンジの目は女性に釘付けとなった。何を考えているのか、女性は白衣の下に、まだ湿気っている水着を着込んでいた。

（うわあこれはちよつと、見ちゃいけないような。え、でも見ていいのかな。ミサトさんの写真もだけど、こんなに綺麗な人達連れて僕に何をさせようっていうんだよ父さんは！）

現状を受け止めきれずに混乱するシンジを余所に、女性は至極冷静に語りかける。

「初めまして碓シンジ君、E計画開発責任者の赤木リツコです」

「初めまして赤木さん、碓シンジです。あの、すみませんけど白衣の前、閉めてもらえませんか…ちよつとその、あの…」

赤く染まったシンジの表情を見て、首を傾げるリツコだったが、特に拒否する理由もないので白衣のボタンを閉じる。

そこで、何やらピンときたミサトが場をませつ返した。

「ははーん、シンジ君も気になっちゃうわよね。リツコ、アンタのエロいカツコが目中毒だつて言ってくれてんのよシンジ君は」

「ああ、そういう事。ごめんなさいね、作業を切り上げてきたから変な格好になっちゃつて」

少し顔を赤らめてリツコが謝る。その表情を見て、シンジは更に頭に血が上つて行った。

（ミサトさんその通りなんですけど、暴露しなくてもいいじゃないですか、つていうか顔

を赤くしないで！なんかエロいですよこれー！）

2人に付いて行きながら、シンジはひたすらに混乱する。命タマのやり取りには慣れとも、思春期の少年に年上の女性の扱いに慣れるというのは無理な話である。

「で、初号機はどうなの？」

「B型装備のまま現在冷却中」

「それ、ほんとに動くのおく？まだ一度も動いた事無いんでしよう？」

「起動確率は0.0000000001%。0.9システムとはよく言ったものだわ」

一方、一度シンジを放置した方が再起動すると判断した2人はもう一度情報の見直しを行っていた。

「それって動かないって事？」

「あら失礼ね。0ではなくってよ」

「数字の上ではね。ま、どのみち動きませんでした。じゃもうすまされないわ」

専門用語の羅列にしか聞こえない会話だったが、混乱から帰ったシンジが聞くには少し、聞き覚えのある内容にシンジは事態を予想する。

（殆ど動く見込みのない何かがあつて、それが必要って事？じゃあ僕が呼ばれたのはそれを動かすために何かある、ってやつかな。

ギガントパンチャーは僕の心に応えてくれたけど、さすがに今回もそれとは思いにく

いし。

なんか持つて来いとか言われてないけど大丈夫だよね僕！いつも身につけてる母さんの形見とかないよ！！？)

真つ暗な空間をゴムボートが進む。やがて目的地に到着したのか、リツコはゴムボートを止めてシンジを陸地に促した。

「ここに、何があるんですか？かなり臭いキツイんですけど、危なくないんですよね？」
「少し待つてね。今照明をつけるから」

シンジの問いに答えず、リツコは壁に向かって何かしらの操作をする。すると突然周囲が明るくなり、シンジは目の前の常識外を見て絶句した。

(巨大ロボット！じゃあ僕がギガントパンチャーに呼ばれた因果つて、『世界のために戦う』じゃなくて『巨大ロボットの関係者』だったんだ！)

まさかまたもや巨大ロボットと出会うことになるとは思いたくなかったが、現実は無情だった。

しかし、シンジの冷静な心は今の状況を悪いものではないと判断していた。

シンジがかつての愛機と共に戦った記憶は、これからのようにロボットと関わることになってもシンジを助けてくれるはずだ。

「人の造り出した究極の汎用人型決戦兵器、人造人間エヴァンゲリオン。我々人類の最後の切り札よ」

驚きで固まったシンジに対してリツコの説明が入る。

「これが、父さんの仕事ですか」

「そうだ」

呻くように出たシンジの質問に答えたのは、遥か上からの声だった。

聞き覚えのある声にシンジは顔を上げる。

もう10年も聞いていない、たった一人の家族の声だった。

「久しぶりだな。シンジ」

「うん、久しぶり。瘦せたね、父さん」

ガラス越しに親子の視線が交わる。数秒しかない時間だが、シンジは父親の表情から追い詰められた人間の危うさのようなものを感じた。

命に代えても目的に向かう大人を、シンジは多く見た。地獄の一年間で、誰もが顔に貼り付けていた表情だった。

「出撃」

先に視線を外したのはゲンドウだった。短い一言だったがその場にいた人間には通じたらしく、場がにわかに慌ただしくなる。

「出撃!!? 零号機は凍結中でしょ。まさか、初号機を使うつもりなの!」

「他に方法はないの」

「レイはまだ動かせないわ!パイロットがいないのよ!!?」

「さつき届いたわ」

「マジなの?」

「碓シンジ君。あなたが乗るのよ」

ミサトとリツコの2人が言い争う。いきなりの事態に慌てるミサトの疑問に、リツコが片端から答えていった。

シンジは黙って目の前の巨人を見つめる。

周りの喧騒が聞こえないほどに、シンジは集中していた。

「待ってください司令、レイでさえエヴァとシンクロするのに7ヶ月もかかったんです、今来たばかりのこの子にはとてもムリです!!」

「座ってればいい。それ以上は望まん」

「しかし、それでは…ッ!」

「葛城一尉!」

食い下がるミサトを止めたのは、やはりリツコだった。一際大きく響いた声が残響に

なるまで間を取り、リツコが言葉を連ねる。

「今は使徒の撃退が最優先事項です。その為には誰であれ、EVAとわずかでもシンク口可能と思われる人間を乗せるしか方法は無い。あなたも、わかっているはずよ」

リツコも無茶を言っている自覚はある。第3の子供がいるなど、リツコすら寝耳に水だったのだ。実際の戦闘に関わらない技術部よりも、ミサトの方が多くの責任を感じるのも理解している。

だが、人類に余裕がないのは本当なのだ。怪我人であるレイに頼るよりも、たとえ素人でも健康な彼に期待した方が可能性はあると司令が判断した。ならば従うしかない。

「……そうね」

俯き、数瞬の時間を置いてミサトが答える。

「シンジ、お前が乗るんだ」

ゲンドウの言葉に、シンジはやっと顔を上げてゲンドウを見つめる。

「これが、僕を呼んだ理由。いいよ。やってみる」

「シンジ君！ そんなに簡単に決めて大丈夫なの!? ? あなたも見たあいつが相手なの。命がかかっているのよ！」

軽く返事を返したシンジに、ミサトが問いかける。

「ミサトさん。あの手紙、ひどかったですよね。ただ一言、来いだなんて手紙ですらない

ですよ。でも、僕はあれが父さんの悲鳴に見えたんです。何か父さんが困ってて、僕の助けが必要だって」

シンジの視線はゲンドウから離れなかった。

「だから、僕、やるよ。でもどうすればいいかなんて分かりませんから、助けてください
ミサトさん」

シンジの目がゲンドウを離れ、ミサトに向く。

「お願いします。僕に、父さんを助けさせて下さい」

頭を下げたシンジに、一番に返したのはやはりミサトだった。

「任せなさい！シンジくん、ありがとう。絶対に私にできる限りのことをする。一緒に頑張りましょう」

「時間がないからエヴァの説明を始めさせてもらうわ。少しでも多く、分かりやすくレクチャーします。シンジ君、よろしくね」

ミサトの言葉にリツコが続き、他のエヴァに関わるメンバーが動き出す。

その時、大きくケージが揺れた。揺れは二度、三度と続き、遂には天井の一部が破損する。

「シンジ君！」

誰かが叫んだ。運悪く、シンジの頭上の天井が破損したらしい。簡単に人を殺し得る

重量がシンジを襲った。

だが、超重量の鉄板はシンジの命を取ることはなかった。

シンジは、いつの間にか巨大な手に覆われていた。

「動いた」

「彼を守ったの？」

リツコとミサトが呆然と呟く。パイロットを乗せても動くことのなかった機体が、『彼のために』動いた事実を信じられなかった。

「助けてくれたの？ありがとう、エヴァンゲリオン」

シンジの手がエヴァに触れる。余りにもサイズが違うが、彼は握手をしたつもりだった。

「いける！エヴァが動いてくれるのなら、私たちは戦えるわ！」

リツコの快哉が響いた。エヴァが動くかどうか恐れていたが、間違いなくエヴァは動く。1つ肩の荷が降りて明るくなったリツコに、周りの整備班も感化されていく。突然来た正体不明のパイロットが、謎の存在などではなく、家族のために来た少年だと分かったことも大きかった。

活気付く眼下を見て、ゲンドウの横にいた冬月が口を開く。

「立派なお子さんだな。お前よりも人付き合いが上手そうだ」

冬月の椰揄が飛んだ。言葉だけを見れば性格が悪いとしか言えない言葉だったが、その言葉は暖かい。まるでシンジの成長を喜んでいるかのようだった。

ゲンドウは答えずにハンガーに背を向け、発令所へと歩いて行く。

(ユイと同じ目をしていた。シンジ、お前はなぜそんな強い目をできる)

恵まれない思春期を過ごしているはずの息子の眼に、ゲンドウは少し恐れを抱いた。

使徒襲来。

『ケージ内、ドッキング準備完了』

『エントリープラグ、挿入します』

『エントリープラグ固定完了』

『一次接続、開始します』

エヴァの起動が始まった。

発令所には次々とアナウンスが流れる。

起動実験自体は幾度となく行われている為、滞ることなく発進準備が進んでいた。

「シンジ君、今からLCLが流れ込むわ。さっきの説明の通り、溺れることになるけど許して下さい」

『僕の命を守ってくれるんですよね。少し怖いですけど、頑張ります』

一時アナウンスを止めてリッコがもう一度説明する。あれからシンジは必死に説明を受け、リッコの心象も良くなっていった。

（頭を下げて教えて下さいって言われたのよ。この私が中途半端で終わらせるものですか）

「ありがとう。エヴァとシンクロしたあなたは、自分が動こうとするだけでエヴァを動かせます。私たちの作ったエヴァを信じて。きつと、あなたを守るわ」

『LCL注水開始』

モニタの中のシンジが溺れる。やはり生理的な嫌悪があるのか、青い顔でLCLに沈んでいった。

『主電源接続します！』

『回路接続完了』

『第2次コンタクト！』

祈る。技術主任としては情けないことだったが、リツコは祈ることしかできなかつた。

エヴァの整備は手ずから行い、完璧だと自負している。MAGIの診断でもエヴァの起動確率はレイを超える数値を出した。

（計画がどうなっているかもわからないけどね。私にだってエヴァに関わってきたプライドがあるのよ。子供に縋る無様を見せた以上、どんなトラブルだって対応してみせる）

その覚悟があつたからか。モニタの映像が途切れ、エヴァの咆哮が鳴り響いた瞬間に冷静に対応することができた。

「回路とシンクロの確認急いで！ 報告はまとめなくていいから、情報が来たらすぐに伝えなさい！」

吼え続けるエヴァ初号機を外部モニター越しに睨み付け、リツコは全ての可能性を吟味し始めた。



「うおおおお……！」

エントリープラグの中をシンジの氣勢が満ちた。

シンクロについての説明を受けたシンジは、まず初号機に対して自分を知ってもらったことから始めた。

『ロボットと心を通わせる』

ロボットが鋼鉄の塊である以上、心など存在せず。自然、この言葉は妄言となる。

車やバイクの心が分かるだろうか。電子レンジの心が分かるだろうか。大体において答えは否。

この答えにYesと答えられる人間は変人扱いされて当然である。

「応えて、エヴァンゲリオン！」

だが、碇シンジはその質問に胸を張ってYesと答える人間であり。

「君が、人類のことを思ってくれるのなら。」

誰かが傷つくことを恐れてくれるのなら！」

巨人と対等に向き合える気合いの持ち主であり。

「僕と共に戦ってほしい！」

彼は、エヴァンゲリオンに愛されていた。

「僕の命を預けるから、僕に応えろエヴァンゲリオン!!」

シンジの叫びに合わせて、初号機の目に光が灯った。

——オオオオオ——!

エヴァが吼えた。視界が赤く染まり、頭に暴力衝動が流し込まれる。

——オオオオオ!

赤く染まった瞳を光らせ、エヴァ初号機が慟哭する。

(コレがエヴァンゲリオンの心?押し流される…!)

エヴァの心は荒れ狂っていた。破壊衝動が収まることはなく、目の前の全てが自分を押さえつける悪意に見えた。

「違う!話を聞いてくれエヴァンゲリオン!」

(何かがおかしい。君は、何を怖がっている?)

エヴァの咆哮は止まらず、拘束された両腕に再度自由を取り戻そうとする。

「—————!!!」

「僕は、君の味方だ!」

シンジの叫びが響く。

本心だった。余裕を無くしたシンジは、渾身の力でエヴァ初号機の心に体当たりした。

今までの、手を貸してもらったための礼儀もない、自分の思いを渾身の力でエヴァに伝える。

シンジまでエヴァの破壊衝動に同調しそうになり、さらにエヴァの慟哭は大きくなる。

だが、そこでエヴァの動きは止まった。

シンジは、エヴァ以外の誰かの気配を感じる。

懐かしさを感じさせる気配だった。

「君は……う？」

その気配は大きく広がり、シンジとエヴァ初号機を薄く包んだ。その気配に寄り添い、シンジはエヴァに近づいて行く。

そこでシンジは、エヴァの心が小さく震えていることに気づいた。

「エヴァ。君は、僕が怖かったの？」

肯定する意識が返ってきた。

「大丈夫。僕は君の味方で、君の友達だよ。だから怖くないんだ」

エヴァが少しだけ近づいてくる感覚があった。

今のシンジに視界は必要なく、知らずにシンジは目を瞑っていた。

「ここは君ともう一人の場所だったんだね。突然入ってきてゴメン。でも、僕は君にお願いしなくちゃいけない」

シンジはエヴァの心が幼いことに気づいた。

「僕の知ってる人たちが危ないんだ。だからエヴァ、君の力を貸してほしい。僕と、一緒に頑張ってくれないかな」

少しの時間、エヴァは無言だった。だが、その後にエヴァがはつきりと頷いた感覚をシンジは得た。

2人の和解を知ったのか、心地よい気配が薄れ、遠ざかっていく。

最後に、名残惜しげにシンジを撫でたその気配は、シンジが礼を言う前に去ってしまった。

エヴァとの邂逅を終え、目を開けたシンジは大量のエラーメッセージと、リツコの必死の呼びかけに目を回す。

『シンジ君！ 応えて、シンジ君！ 通信が届いていない可能性があるわ。ケージ内のスピーカーも動かしなさい！』

『映像通信回復しました！』

『救護班配置完了です。いつでも動けますよ！』

（凄い騒ぎになってる！ 何か言わないとマズイぞこれ。えーと、エヴァは動いてくれるって言ったからソレを話せば）

『エントリープラグの強制排出シグナル準備』

『受け入れネット到着まで1分下さい！』

「話をつけてきました！」

シンジの声が響いた。

一瞬にしてネルフ全体の動きが止まり、シンジが無事なのかと自己報告を聞く態勢になる。

「エヴァも力を貸してくれるそうです。ミサトさん、僕達を地上へ出して下さい！」

『シンジ君、大丈夫なの？ それにエヴァと話したって、本当に？』

ミサトの顔がプラグ内のモニターに浮かび上がる。心底こちらを心配している顔だった。

「大丈夫です。話したって言っても、力を貸してくれる感じがあるだけですけど。でも

そのお陰で、どうすれば動いてくれるのか教えてくれました」

リツコの頬が引きつった。シンジは理解していないが、エヴァはハード面はともかく、操作や制御に関するソフト面は未だ研究段階にある。

それなのにエヴァ本人の解説を受けたとなれば、シンジはその分野では世界の最先端に躍り出た事を意味した。

『シンクロ率は？』

『65%で安定しています。他、システムチェックも全てグリーンです！』

一方、シンジの言葉の意味を理解できていないミサトは出撃処理を進めていく。

起動すら怪しい機体が65%ものシンクロ率で安定した事には驚いたが、作戦指揮官としては都合がいい。細かい事を気にして居られなかった。

ミサトの号令が飛んだ。

「拘束解除。 出撃準備後、エヴァを5B射出口へ移動して！」

『了解。第一ロックボルト外せ』

『解除確認』

『ブリッジ移動開始』

『ロックボルト外せ』

『第1拘束具を除去』

『同じく第二拘束具を除去』

『全安全装置の解除を確認』

初号機の固定が外れていく。アスリートの様に研ぎ澄まされた姿が顕になった。

『内部電源充電完了を確認』

『内部用コンセント異常なし』

『進路クリア。オールグリーンです！』

長髪のおペレーターが叫んだ。

『使徒、5B出口正面に移動。このままでは目の前に出してしまいます』

『5C射出口へ変更！ シンジ君、使徒からビルを挟んで隣の通り。斜め後ろに初号機を到着させます。操作はリツコから聞いたわね。肩パーツにナイフが入ってるから、それを装備したらまずは走って』

「分かりました。思いつきり体当たりすればいいんですね？」

使徒が射撃武器を持っているのは渡された資料で見た。それに対してこちらの武器はナイフのみ。

ならば特攻あるのみだった。

『さすが男の子、思い切りいいわね。ヤツが初号機に反応したらこちらで煙幕を張ります。相手が生き物に近いのならば狙い目は顔か胸の2択。顔が増えた所を見るに私は

胸が怪しいと見るけどね』

(流石ミサトさん。車の時も思ったけど、此処一番の判断力が凄いな)

多くのロボット戦を越えた、歴戦の戦士としてのシンジも同意見だった。

武装で負けている以上、奇襲で決着を付けるのが最もシンジの負担が少ない。

『使徒にはA. T. フィールドと呼ばれる特殊な防壁が備わっています。でも、それはエヴァも持っているはずなの。理論上、物理的な力でも防御を突破出来る可能性はあるけど』

「なんとなく分かります。こう、自然とできる気がするというか。僕はできないけどエヴァは出来そうなの」

『本当に凄いわ。ごめんね、私達で教えて上げられればよかったんだけど』

「信じてます。リツコさんが作ったエヴァと、ミサトさんが導いてくれる道を」

『ありがとう。……エヴァ初号機、発進！』

射出音と共に初号機がレールを駆け上がる。

逸る心を抑えきれずに、シンジは降りかかる重力の中で虚空を睨みつけた。



「見つけたあ！」

地上へ飛び出たシンジは、すぐさまエヴァを走らせる。

エヴァは素直にシンジのイメージをトレースしてくれていた。

「行くよ、エヴァンゲリオン！」

足を上げ、力強く大地を踏み込む。陸戦は足腰がモノを言う。接近戦型なら尚更だ。

『歩いた！』

そしてエヴァの能力を知らないシンジは、躊躇わずに全力でエヴァを走らせた。

爆音を轟かせて巨人が夜の街を疾走する。

『凄い。エヴァと話せるって、こんなにも凄い事なの』

使徒がこちらに気付いた。巨体を感じさせない素早さで振り向き、こちらに腕を向け

てくる。

『させるもんですか！煙幕発射、動くビル全部動かして！』

ミサトの声と共に使徒の横から煙幕と機銃が放たれた。

煙幕はともかく、機銃は対人間兵器用と思われる物で、常識外の大きさを誇る使徒に

通用するとは思えないほど心細い火力だ。

案の定、目の前の使徒は機銃を無視してエヴァに振り向く。

だが、ほんの一瞬だけ使徒が機銃や煙幕に反応した時間が、シンジを使徒のいる場所

まで運んだ。

「いつけえ！」

思い切りぶち当たった。

狙うのは使徒の腰あたり。細かく狙う余裕などないので、ただ中腰のまま体当たりする。

細いなりをしている癖に使徒の反応は重かった。全力で体当たりをしているにも関わらず、エヴァは使徒を吹き飛ばせず、よろめかせるだけにとどまる。

「プログ・ナイフ！」

シンジのトリガー操作に合わせて肩のパーツが開く。初号機はナイフを取り出すと、真っ直ぐに持ち上げて、使徒めがけて振り下ろした。

甲高い破裂音が響き渡る。今まで耳にしたことの無い、キンとした音が耳を打った。

『A. T. フィールド！これがある限り、使徒に攻撃が通じない！』

ミサトの説明が入る。ナイフの先を見ると、8角形の波紋のようなものが広がっていた。

「超えろ、超えろ、超えろ、超えろ！」

A Tフィールドが何なのかシンジは知らない。説明を聞いても、そういうものがあるという事しか理解できなかつた。

だが、それは破り方を知らない事にはならない。別宇宙で、ギガントパンチャーと共に戦ったシンジは、殊更に硬い防御を抜く方法を知っていた。

「つらぬけえ！」

ナイフが使徒のフィールドに潜り込む。勝利は心で掴むもの。気合いの入れ方で、力というものは大きく上下するとシンジは宇宙戦争で学んだ。

「あと、すこ……ツツ!!??!!??！」

しかし、使徒もやられるばかりでは無い。初号機がフィールドを破ることに必死になった時間を以て、体勢を立て直しエヴァの頭を殴りつける。

「くそ、離せー！」

激しい痛みに襲われるシンジ。シンジとエヴァの神経をリンクさせている以上、エヴァの痛みはシンジの痛みでもあった。

「離せえー！」

傷つけられた事でタガが外れたか、シンジは渾身の力でナイフを振り抜いた。

使徒の腰の辺りを傷つけることには成功したが、浅い。胸の赤い玉には当たらなかった。

「もう一回だー！」

再度、ナイフを振り上げるシンジ。

だが、ナイフを持つ右手にシンジは激痛を感じた。

(掴まれた！)

使徒の右手が発光した。



『ぐああああ！』

発令所にシンジの絶叫が響く。

「機体とパイロットのシンクロ率を落として！ 早く！」

隣でリツコが指示を出す声を聞きつつ、ミサトは使える手を模索していた。

(今ある装備を動かしても間に合わない！今動かせるものはそれこそエヴァ自身に関係するものぐらい。考えなさい葛城ミサト！)

掴まれている今、煙幕を張ったところで意味がない。火力にならない兵装だつてそう
だ。むしろ、ATフィールドを展開できないエヴァの不利にすらなりかねなかった。

モニターの中でまた使徒の腕が光る。少しでも使徒の体勢を崩さないと、シンジの心

の方が先にやられてしまいかねなかった。

モニターの中、初号機の前にまたフィールドが張られる。

先ほどとは違い、今度は弱々しい光だった。

「B5射出口を解放！ エヴァ発射台、発進！」

使徒の足元が唐突に開く。使徒が居るために断念した射出口が、使徒の足を取る。

直後に鉄骨がばら撒かれるような破碎音が響く。何も載せずに高速で発射された射出機が、使徒の股間を突き上げた。

「父さんの仇。あたしらナメてんじやないわよ」

ミサトは凶悪に笑っていた。

流石にこの奇襲は耐えられなかったか、使徒は手を離して後ろに倒れた。

腕を離されたエヴァはそのまま膝から崩れ落ちる。

「リッコ！ さっきの攻撃と攻撃を食らった時のフィールド見た？？アレどっちのか教え

て」

「マヤ！波形データを零号機のと照会！」

「…照会でできました！零号機のデータに近似反応あり、初号機です！」

女性オペレーター、伊吹マヤが答える。

先ほどの弱々しい光は初号機のモノと判明。ミサトのCANは当たった。

「シンジ君！ さつきあなたもフィールドを作っていたわ！ 掴まれた時よ。思い出して！」

モニターの中でシンジが頷く。必死に痛みを耐え、返事をしないシンジだったが、こちらに視線を寄越した。

「さつき思った事をもう一度考えて。離せ、って言った後のことよ」

崩れ落ちたエヴァが立ち上がる。先ほどの痛みを思い返すのか、前に出ることができずにいた。後ろに下がる事だけはせず、エヴァがその場で立ち尽くす。

『逃げちゃ、ダメだ』

シンジが小声で呟いた。残念ながら、なんと言ったのかはマイクでは拾えなかったが、シンジにしっかりと意識があることは分かった。

「ATフィールドはATフィールドで突破できる。シンジ君、想像して。あなたの一番強い攻撃を。あの使徒をやつつける最高の攻撃を。フィールドに乗せてその想いを叩きつけて！」

カメラが初号機の右手を捉えた。拳を中心に、オレンジ色の光が薄っすらと輝き始める。

『エヴァ。フィールドだ！』

「もう一回煙幕！ 発射台ももう一台出して、初号機の壁にして！」

オペレーターの指が高速でパネルを弾く。

一瞬でも早くミサトの命令を実現するために、3人のオペレーターは必死になってパ
ネルと戦った。

『逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ！』

使徒が立ち上がる。物理法則を無視した立ち上がり方で、使徒はエヴァに向き直る。

『エヴァ。痛かったよね。でも、もう一度力を貸して！』

シンジの目が、真っ直ぐに正面を向く。

『僕は、逃げない！』

——【熱血】——

その時、遂にシンジのサイキックがエヴァンゲリオンに届いた。

シンジのサイキックは心を通わせたロボットに力を与える。

シンジが発揮したサイキックの内容は、1度だけ攻撃の威力をハネあげるもの。シン
ジが初めて壁を超えた時に手に入れた、最もシンジが信頼する能力。

そのシンジのサイキックがエヴァに届いたということは、エヴァとシンジが、遂に正
しい意味でのシンクロに成功した事を意味した。

シンジの望みを聞き、シンジのイメージを必死にトレースしていた初号機が、自分の意思で使徒に向き合う。

初号機に明確な意識というのは、厳密には存在していない。だが、それでも初号機は自分に語りかけてきた新しい意識に懐き始めていた。

その意識は初号機を見た。そして初号機と共に歩き、走り、一緒に痛い思いをした。叫びたい程の痛みすら彼は初号機と共有したのだ。

だから初号機は目の前の使徒を見る。

目の前の敵を倒さないと、昔から自分の相手をした意識と、突然自分に語りかけてきた意識が消えてしまう事を本能的に初号機は悟っていた。

初号機の目が赤く光り、顎門が開く。真つ赤に染まった歯を見せつけるように初号機は吼えた。

この意識のために、エヴァは目の前の敵を倒したかった。目の前の脅威から逃げ出さなかった。

自分の中にある意識が自分と同じであるように感じる。

シンジの力が、一度だけ自分の拳を強くしてくれる事をエヴァは理解した。

初号機／シンジが真つ赤な目で使徒を見据える。

拳は固く、腰は低く。足裏で大地を踏みしめて蹴る。

エヴァの足で、飛び込めば8歩の所に使徒はいた。

7歩。使徒の仮面が光る。映像で見た光線が来る。初号機／シンジは顔の前にフィールドを展開させて耐えた。

6歩、5歩のところで2、3発目が来たが突っ込んだ。2発目でフィールドに穴が開き、3発目は首を捻りながら頭の装甲を信じた。

4歩、やっと意識してフィールドを作ることになった。右手を更に握りしめて、フィールドで固めた。

3歩。使徒が腕を振り上げる。

2歩。使徒がまたこちらを掴もうとして来た。

1歩。間抜けめ、好きなどころを掴むといい。自慢の攻撃をする前に、こちらの拳が届く。

「いつけえええええ！」

腰だめに構えた右腕を一気に振り抜く。

ありつたけのフィールドを乗せた拳が使徒のフィールドを越えようとする。

ナイフで刺した時にはあれ程強固だった使徒のフィールドは、あっさりと2人の拳の前に降伏した。

そして、使徒のフィールドと共に殆どのフィールドを失った拳が、使徒の胸に届く。赤い玉にめり込んだ拳は、しかし勢いを失うことなく使徒の胸部をぶち抜いた。

「僕たちの、勝ちだ！」

シンジが叫ぶ。喜びも安心もない、ただ必死な声だった。

使徒の体が膨れ上がる。不気味な痙攣をした使徒は、不規則に揺れる腕で自分を貫いた初号機に抱きつく。

そしてシンジの意識は、特大の爆音と衝撃に吹き飛ばされた。

事の顛末。ネルフの大人たち。

『昨日の、特別非常警戒宣言について、政府の発表がありました…』

『今回の事件について、在日国連軍は…』

「発表はB―22? 事実は闇の中ってやつね」

ネルフ最初の使徒戦は、第三新東京市に恐ろしい被害を齎した。元々金のかかる要塞として作られた都市を、吹き飛ばしかけた大災害。

一国が傾くほどの被害の書類を始末する為、ミサトは寝る間を惜しんでパソコンに向かい続ける。

「広報は喜んでたわよ? やつと仕事が出来たって」

「ウチもお気楽なものね」

隣にいるリツコが、気の無い返事を返す。彼女の瞳は、ノートパソコンから離れることはなかった。

「そうかしら。本当はみんな、怖いんじゃない?」

リツコは、昨日の戦闘のデータを何度も確認し続ける。人類初のATフィールドの発生データだ。

世界中の研究職員が、同じデータを調べ尽くしている。一番近くで見た人間として、ネルフ本部の技術部長としてのプライドか、鬼気迫る勢いでデータを追っている。

今日初めてエヴァを知った少年が、人類初のATフィールドの展開に成功する。リツコは本当の天才を知った気がした。

「……あたりまえでしょ」

だからリツコはミサトの表情を見逃した。

憂いを含んだ表情。ミサトはシンジと直接触れ合った為にシンジを恐れることはない。

ただ、ネルフ職員の殆どは違う。彼らにとつてのシンジは、『あの』司令の息子にしてエヴァを自在に操った麒麟児に見えている。

ミサトは初号機ではなく、職員による初号機とシンジへの隔意を怖れていた。

リツコのノート端末から着信音が鳴る。

「そのシンジ君、起きたみたいよ？ 本人に外傷はなし。少し、記憶の混乱が見られるみたいだけど」

記憶の混乱と言われると、空恐ろしい単語が頭をよぎる。

「精神汚染？ 彼、エヴァと話したとも言ってたわよね」

「さあね。でも無理もないと思わない？ 脳神経にかかる負担は、相当なもの」

ミスアトはため息を吐いた。

（疑った私も悪いけど、せめて否定してもいいんじゃないかしら）

「脳じゃないわ。戦争は心に傷を負うものよ。私達、大人失格ね」

リツコがようやくミスアトの顔を見て話した。

「仕方ないわ。私達にはエヴァしかない。生き残るためよ」

ミスアトの顔は、少しだけ笑みを取り戻した。子供を前に立たせる罪は、心で背負えばいい。戦闘を預かるものとして、親友にも弱っている姿を見せるわけにはいかなかった。

戦闘時にだけ見せる威圧的な笑顔を浮かべてミスアトは宣言した。

「エヴァとこの街が完全に機能すれば、私達はいけるかもしれない。結局、やることをやるしかないのよね。シンジ君を死なせないように全力で守ることが、世界を救うことになる」



シンジは目を覚ました後、父親の待つ部屋へ案内された。特殊なインテリアに目を奪われるが、今回の目的はそれで無いと目を逸らす。

（趣味悪いなー。これ宗教とかだったらどうしよう。久しぶりに会った父親がカルトとか、殴つても止めないといけないんじゃないかな）

「シンジ君、病み上がりですまないね」

「あ、いえ。大丈夫です」

父親の隣にいる、初老の男性は冬月コウゾウと名乗った。

「さて、今回の使徒殲滅ご苦労だった。だが使徒はこれで終わりではない。そして恥を晒すようだが、我々で用意していたパイロットの怪我が重くてね」

そこで冬月は一旦言葉を置いた。

「君には、エヴァンゲリオン初号機のパイロットとしてネルフで働いてもらいたい」

（命令してこない？）

シンジは冬月を見た。表情が見えない産みの親よりも、優しい目でこちらを見ている。

（いい人なのかな）

異世界での戦いで、権力を持つ人間からの高圧的な命令に慣れていたため、シンジは冬月の柔らかな物言いに驚く。

冬月の言葉にゲンドウが続いた。

「住居は用意してある。葛城君から受け取れ」

（サングラス掛けてるんだから、こっちは見れば良いのに。僕何かしたっけ？）

視線を合わせようとしないういげんどウにシンジは首をかしげた。

ミサトとリッコのお陰で勝てたと思っっているシンジは、自分が何をしたかの自覚に乏しかった。世界を救う戦いに慣れてしまった弊害だろうか。

「うん。で、父さんに聞きたいことがあるんだけど」

「何だ」

ゲンドウは、まだこちらを見なかった。

「突然僕を呼んだのは分かった。先輩が怪我しちやったのは突然だから、仕方ないとも思う」

（それに、立場もあるみたいだから父さんも言えない事がありそうだし）

「でもこれだけは聞かせて欲しい。父さんさ、母さんが泣くようなことしてないよね？」

こちらを見ない眼を、しっかりと見据える。

パイロットとしての話が終わったのなら、今度は家族として聞かなければならないことがある。これに関して嘘を許すつもりはなかった。

ゲンドウが揺れた。

「当然だ。ネルフの目的は人類を守る事のみ。あのユイが反対するはずがない」

シンジは心で嘆息する。多分、嘘だ。

何かある事は想像がついたが、それが限界だった。分からないことが多すぎる。
(父さんと仲直りするのには、大変そうだな……)

最近では頭の出来を気にしたこともないシンジに、腹の探り合いが出来るはずもなかった。

「信じるよ」

「給料は戦闘班と同額だ。不便があれば葛城君に言え」

家族として答えたシンジに、ゲンドウは司令官として答える。話は終わったとばかりに、ゲンドウは押し黙った。



「1人でですか!？」

ミサトの声が廊下に響く。連絡役に渡された資料には、中学生の子供に一人暮らしを強いる内容が記されていた。

「ええ。この先の第6ブロックに部屋を用意しました。機能面は最高です」

(司令の仕事が早いのは知ってたけど、ちよつと動きが早すぎるわよ)

いつもは頼もしい自分の司令官の仕事ぶりに苦言を呈したくなる。

自分の息子を真つ先に腫れ物扱いするゲンドウの仕事を見て、ミサトはこれから始めようとしていた根回しを早々に諦める事にした。

（シンジ君のメンタルケアに関する作戦部としての対応と、ネルフ職員への協力要請。無駄になっっちゃったわね）

文字通り寝る間を惜しんで書き上げたものだったが、間に合わなかったのならば仕方がない。ミサトは、最善が無理ならと即断した。

「シンジ君はそれでいいの？」

「大丈夫ですよ、前も似た感じでしたから。パイロットは基地にいたくちやいけない気がしますし」

シンジは納得しているようだった。だが、それがミサトの気に障る。資料では丁寧に養育されていたとあるが、彼のメンタルに関わることは一切の記載がなかった。

まるで体だけ健全なら良いと言わんばかりの報告をミサトは今でも詳細に思い出せる。

ここでシンジを一人にしてはならない。ミサトは、自身の勘を信じた。

「シンジ君。ウチの子にならない？」

につこりと笑いながらミサトは今日の予定を組み替える。最初に見せなければならぬものができたので、夜のスケジュールは遅れさせる必要があるがそうだった。



赤木リツコは、第3新東京市の一角で営業している、個人経営のレストランに居た。

(ゲンドウさん、ご子息は報告通りの子ではありません。あの子は、本当にゲンドウさんの事を……)

リツコから見てもシンジは母親に似ている。

ユイに顔向けができないと自覚しているゲンドウが、シンジを遠ざけるのも理解できた。

リツコのカンは、シンジがただの中学生ではないと告げている。突如選出され、天文学的な数字の向こうでエヴァを動かした少年。

しかも彼は、必死だったとはいえリツコの説明に食らいつき、エヴァへの理解を深めてみせた。そして極め付けがATフィールドの展開である。昨日までただの中学生と言われて、信じられるはずがなかった。

シンジの出自を疑い始めたリツコの端末に、着信が入った。

表示は『葛城ミサト』

使徒を倒した英雄であり、リツコの疑念のマトの案内をしているはずの友人だった。

「どうかした？　今、シンジ君の案内してるんじゃないなかったの？」

『あ、リツコ？　シンジ君ね、あたしの所に引き取ることになったから！』

(……は？)

一瞬、リツコの思考が停止する。

「ちよつと待ちなさいよ！　何を勝手な事をして」

『大丈夫よお上の許可は取ったし』

(そういう問題じゃないでしょう！)

後ろでシンジの声も聞こえてくる。明らかに狼狽した声で抵抗していた。しかし、ミサトは一切取り合わずに言葉を続ける。

『心配しないでも、子供に手を出したりしないわよ』

「当たり前じゃないの！　何考えてるのよ！」

思わず叫んだ。

店内の視線が集中するのを感じて、リツコは自分の顔が赤くなるのを感じる。

手でこちらに視線を投げってくる部下を追い払い、リツコは昼間の会話を思い返していた。

(お互いにいない生活が当たり前か。お父さんを気にしてるシンジ君に、あのお節介焼きが付いた。ゲンドウさんが押し切られる所、見てみたい気がするわね)

もしそうなった時、自分はどう身を振るんだろうか。電話一本でこちらを振り回す友人に、リツコは少し頭痛を覚えた。

その後、ミサトは少し遅れるとだけ伝えて通話を切った。

「主役は遅れてくるそうよ。焦らなくて良いから、しっかりと準備して」

正直、少し作業が遅れていたのも後半の連絡は朗報だった。

ミサトが来るまで45分。それだけあれば、全員揃うだろうとリツコは計算していた。



ルノーの車内は、微妙な沈黙が漂っている。

まあ原因は僕なんだけれど、とシンジの冷静な部分は理解していた。

しかし、それでも納得できないものはある。

（ミサトさんから見れば子供ですけど！ 最初から同居はハードル高くない？ 僕だって男なんだけど！）

シンジはミサトの『子供に手を出さない』の言葉がどうにも引つかかっていた。

（手を出さない、って、僕から来られるとか考えないんですか？ いや、行かないですけ

どー！)

シンジとて男だ。人として信頼されているのは嬉しくても、「手を出さない」扱いは堪えるものがある。

シンジに関する第一印象が資料のミサト達は無意識的に先入観を持っていたが、シンジは他人に対する興味を人並みに持っているのだ。

無言のシンジを連れて、ミサトのルノーが街を走る。気づけば街を見下ろす場所に作られた公園に到着していた。

「……ピクニックには、少し寂しい所ですね」

抑えようとしても、言葉に不機嫌さが滲んでしまった。

「まあ、ね。でもちよつと見ててくれない？ 面白いものが見れるわよ」

だが、ミサトはそれに気付かないフリをしてくれた。シンジも少し反省して、ミサトの人付き合いの上手さに甘える事にした。

「面白いもの？」

シンジの問いにミサトは答えず、時計の針を読んだ。

「時間よ」

ミサトの言葉と同時、ビル街が生えてきた。

全体的に平たい街を、多種多様な建造物が埋め尽くしてゆく。

「凄い！ ビルが生えてくる！」

先ほどまでの言葉は、もう気にならなくなっていた。巨大都市が目の前で生えてくるという光景に、シンジは凄いと歓声を上げることしかできない。

「これが、使徒迎撃専用要塞都市・第3新東京市。私たちの街で、あなたが守った街よ」隣でミサトが語りかけてくる。

シンジは、その中でも守るといふ言葉に反応した。

「僕とエヴァが守った街。その、僕はミサトさん達を守れましたか？」

自分が守ったと言われても、シンジには実感がなかった。シンジの記憶は使徒を思い切りぶん殴った所で途切れており、使徒を倒したという実感が無かった。

だからか、シンジはついミサトに聞いていた。

自分は守れていたのか、一緒に戦ってくれた仲間の言葉が欲しかった。

「もつちろん。あなたのおかげで生き残れたわ。あなたは、この街の命の恩人よ」

ミサトは明るい笑顔で答えてくれた。写真で見た笑顔とは違う、優しい笑み。

母が死んでからは異世界でしか見せてもらえず、この世界に戻って来てからは二度と見れないと思っていた笑顔だった。

（写真で釣られた過去の僕、ナイス。ミサトさん、写真よりも綺麗だとは思わなかったな）

自分がチョロい部類だというのは分かっている。それでも異性の笑顔はシンジには眩しかった。自分には特別な女性がいらないから、特にそう感じているのかもしれない。(笑顔ってというと、アスカの笑った顔とか、ほとんど見たことなかったな)

シンジの意識が、一瞬だけ過去に飛んだ。異世界で自分と同じく迷子になった女の子。

それなのにしつかりと自分を表現し続け、よく喧嘩し、しかしロボット軍団との戦いでは近寄って殴ることしかできない自分の背中を守り続けてくれた強い女の子だった。

(どうせ殴られるだろうけど、もう一回アスカと会いたいな)

しかし、シンジの回想は続かない。現実の方からのお呼びがかかった。

「ところでね、シンジ君。お腹すいてない？ 夕飯、良いところに案内するわ」



(さっきまでとは全然違う。凄いや！)

公園からルノーが次の目的地へと走る。シンジは、先ほどとはまるで違う市街の様子を目を輝かせながら見ていた。

つい30分前までとはまるで違う町並み。先ほどまでとは違い、人の営みを感じさせ

る都市をルノーが流れていく。

大通りを抜け、少し灯りの減った道にルノーが停車したのは、こじんまりとした洋食店の前だった。

「さあ、(ハハ)よシンジ君。入って入って」

どんな店か気になって入口のメニューを見ようとしたシンジは、ミサトに肩を掴まれた。

そしてそのまま押されて、半ば無理矢理に入店させられる。

そして店のドアをくぐった瞬間、あまり耳慣れない音に包まれる。

『!!!』

シンジを迎えたのは、よくある店員の「いらつしやいませ」の声ではなく、拍手だった。

店の客は、残らずにこちらを向いて拍手を送ってくる。10人ほどだろうか。それほど大きくない店内にばらけていた客は、1人残らずシンジに視線を向けている。

(え? 何?)

意味がわからず、硬直するシンジにミサトが後ろから語りかける。

「(ハハ)のみんなも、あなたが助けた人よ」

ミサトは、そのままシンジを追い越し、客の前に立つ。そしてミサトがシンジに振り

向いたタイミングで拍手がやんだ。

客の1人が前に出てくる。エヴァの説明をしてくれたリツコだった。

「ようこそネルフへ。碇シンジ君、あなたを歓迎します」

リツコの言葉を、ミサトが引き継ぐ。

「そして使徒撃退、おめでどう。ネルフを代表して感謝します」

そこでまた拍手が鳴った。

「凄かったぞ!」「お疲れさん!」

「これからよろしくな!」

拍手と共に歓声も飛んだ。皆、温かい声だった。

突然のことに驚くシンジを、店内のネルフ職員が囲み始める。若い人が多いんだな、という感想が呆とした頭に浮かんだ。

「よろしく、シンジ君。俺は日向マコト。作戦課のオペレーターをしてるよ。ジュースでいい?」

「ありがとうございます、日向さん。よろしくお願いします」

最初に話しかけてきたのは、髪を短く切り、眼鏡をかけた男性だった。日向はオレンジュースを手渡して挨拶すると下がっていった。

「青葉シゲルだ。同じくオペレーターをしてる。シンジ君、これからよろしく。ほら、今

日は君が主役なんだ。こっちのテーブルに来てくれ」

「あ、はい。碇シンジです。よろしくお願いします」

次に来たのは長髪の男性。タレ目気味の彼に勧められるまま、シンジは店の奥の席に座った。

「シンジ君は食べられないものある？ 私は伊吹マヤ。技術課です。よろしくね」

「いえ、大丈夫です。よろしくお願いします」

席に座ったシンジに、料理を取り分けた皿を取ってくれたのは小柄な女性だった。今まで出会った中でも年若く見える彼女に、シンジは少しだけ親近感を覚える。

その後も見知らぬ大人達が入れ替わり、立ち替わりに挨拶をしていく。

「俺とコイツは技術課の整備とか建設とかしてる。シンジ君の初号機はバッチリ直しくから安心してくれ。そのうちエヴァ用の武器も作るから、欲しいもん言ってくれよな」

「僕は戦術課のメンバーです。日向君と一緒に葛城さんのサポートをします。今回は何も手伝えずにいて、ごめんね。でもこれからしっかりサポートさせてもらうよ」

「やったな！ すげえ戦いぶりだったぜ！」

「怪我はないと聞いたけど、気分が悪かったりしたら言ってね。今日は救護課多いから、すぐに対応できるよ」

名を名乗らずに、所属だけ伝えていく彼らにシンジは目を回し始める。一瞬にして増えた情報量を処理しきれずに、シンジは機械的に「よろしくお願いします」を繰り返した。

一通りの挨拶が済んだ所で、ミサトの号令がかかった。

「挨拶は終わったわね！じゃあ後は適当に飲み食いしちやつて。みんなシンジ君に興味津々だろうけど、これ以上はシンジ君が疲れちゃうから後は日を改めてにしましょう」

ミサトがグラスを掲げる。

「みんな、よく頑張ったわ。私はみんなと共に戦えて、感謝してる。でも今回のMVPは間違いなく彼ね」

ミサトがこちらに視線を寄越した。

「立派に戦ってくれたシンジ君に感謝を。そして、みんなの奮闘に乾杯！」

『乾杯！』

祝いの席ではあるが、使徒はまたいつかやって来る。

今回は急遽開催された為に人数もそれほど多くなく、みな明日の仕事もある。

それでも和やかに、少しだけ騒がしく。

シンジ歓迎・祝勝会は慎ましやかに進行していった。



「寝ちやったわね」

騒がしくなった歓迎会も1人、2人と脱落していくうちに静かになり、半分ほどが寝静まった頃。

ミサトはリツコと2人でまだ酒を飲んでいた。

2人の視線の先にいるシンジはこくり、こくりと頭を揺らし、隣にいる日向に傾いていつている。

「仕方ないわ。昨日は異常すぎる環境で命のやり取り。それで今日は久しぶりのお父さんとの再会よ？ 疲れるに決まってるわよ」

「で、なんでそんな子供の歓迎会を？ 彼が元気になってからでも良かったでしょうに」

どこからか青葉がブランケットを持って来た。日向と作戦課のメンバーがゆつくりとシンジを横にする。

「今日じゃなきや、ダメだったのよ。シンジ君ね、大人を見る目、相当あるわよ。」

意外と明るい子で驚いたけれど、報告書も本当ね。最初に大人との距離を測って、次からはこの線を越えないタイプ」

「誰かさんに似てるわね。だから分かったの？」

視線の先、日向を含めた作戦課がするするとシンジのそばを離れていく。ついでに近くでシンジを撫でようとしていたマヤを確保して離れていった。

「まあ、勘だけどね。それにもうちよつとしないうとき、戦いの後って、神経が尖りすぎてまともに寝れないのよ。中学生だからお酒も飲ませられないしねー」

はあ、とため息が聞こえた。リツコが組んだ手の上に形のいい顎を乗せている。

どこかでよく見たポーズだった。

「ミサトがシンジ君を引き取るって聞いたとき、本当に心配したのよ。また面倒ごとが始まるんだな、って」

リツコは自分のグラスを眺める。気だるげなポーズが、妙にサマになっていた。

「でもまあ、やってみればいいんじゃない？ あなた、そういう才能ありそうな気がして来たわ」

「正直、自分でもやっちゃったなーとは思ったんだけどね。後には引けないし、女は度胸、ってヤツよ」

「じゃあシンジ君の養育計画書、ちゃんと書いときなさい。食事の栄養バランスとか、マヤに手伝うように言っておくから」

計画？ と、ミサトは頭を捻った。ミサトの考えでは、家事と部屋の分担くらいしか新生活についての計画がなかった。

「体のホルモンバランスが崩れて、この頃の子供はけっこうナイーブになるの。だから体調管理をこつちでやる、っていう名目にすればね。予算付くわよ、多分」

「ちよつと、お金のためにやるわけじゃないわよ?」

リツコの突然の提案に憤る。酒のせいで、ミサトの沸点が下がっていた。

「分かつてるわよそんな事。でもあつた方がいいわ。シンジ君の分、食費も増えるし、色々買うものも増えるわよきつと」

「分かつたわよ。リツコは口うるさいんだからもー」

「うるさいとは何よ。あなた、保護者になるのよ? 学生の頃とは違うって、分かつてる?」

今度はシンジの周りに救護課が集まって来た。そうつとシンジの顔色をみて、周りにOKのジェスチャーをしている。心配になって、様子を見に来たらしい。

「大丈夫。腑抜けたマネはしないわ。見てみなさいよアレ。私がシンジ君に風邪引かせたら救護課が襲つて来るんじゃないの?」

その救護課は、今度はマヤをひっくり返していた。寝ているマヤの服を緩めようとして、作戦部の女性陣と一緒に男どもを追い払っている。

「その時はきつと技術部も一緒ね。あの2人、シンジ君の戦いぶりに感動してたもの。これが男の戦いだ、つて。ちよつと泣いてたわよ?」

と、話していたところで作戦部が近づいて来た。

「葛城さん、そろそろシンジ君をベッドで寝かせてあげませんか？　今、日向が代行呼んでますから。後、酒飲んでないのが1人いるんで、シンジ君の運び込みにウチの女性陣使ってください」

「シンジ君、人気者ね？」

ミサトは、無理矢理に歓迎会を強行して良かったと感じた。少なくとも、シンジの周りは彼を怖がらない人間で固められそうだった。

見えない犠牲者。

『目標を、センサーに入れてスイッチ。

目標をセンサーに入れてスイッチ。

目標をセンサーに。入らない』

エントリープラグの中でシンジがうわ言のように繰り返す。

メンタルが不安になるシンジをモニター越しに眺めて、マヤは呟いた。

「シンジ君の射撃、全然当たりませんね」

シミュレーションの中で浮き出てくる使徒に、パレットライフルを浴びせかけるシンジ。

しかし、コンピューターで制御されたハズのライフル弾は、シミュレーターのを引き裂くばかりだった。

(来たばかりの時は、すごい子だなあと思ったけど)

シンジがこの街に来てから、3週間の時が過ぎていた。

その間、数日間の検査入院とネルフの説明、エヴァについての座学など、シンジは忙しい毎日を送っている。その中でそれなりに付き合ったから分かったのだが。

(結構抜けてる所があるから可愛いよね)

歓迎会で見せた寝顔は、初号機を見事に操る戦士だとは思えないほどにあどけないので驚いた事をマヤは覚えてる。

日常生活でも、シンジはパイロットとしての運動能力や、エヴァとのシンクロ訓練は見事なものだった。

だが、そんなシンジには妙な趣味というか、趣向があった。

(意外と力技でいくというか。使っても減らない武器だつてATフィールドに喜んで、廃材で殴りたがったり)

男の子ってこんな感じなんだあ、とマヤの中の男子中学生像が組み上がっていく。

そういえば日向が読んでた漫画では、学校でバットや木材を使って喧嘩してたし、青葉の演奏を見に行った時は他のバンドがギターを振り回して壊していた。

ネルフにいる自分よりも学生の方が戦いに慣れてることに、マヤは複雑な気分になる。

(何となく鉄砲も好きなんだと思ってたけど、シンジ君は自分の体でやりたい派の子なんだね)

マヤの視線の先、シンジは豪快に的を外し続けていた。

「静止状態のターゲットに対する命中率が65%です。初号機自身が動き回ることを考

えると、実戦での命中率は」

「ほぼ当たらないもの、って考えた方が良さそうね。いいわ、エヴァを動かせるだけでもとんでもない才能なんだから、射撃に関してはこちらでフォローしましょう」

マヤの言葉は、ミサトが継いだ。

シンジの戦闘訓練を、ミサト、リツコ、マヤを含める技術課が眺めていた。

その技術課が口を開く。

「赤木部長、この前の戦闘を見る感じじゃあアイツはバリバリのインファイターだ。そりゃあ銃は強いと思うが、盾と槍ってのも良いんじゃないか？」

「最新の技術で蘇る巨人の古代ローマ兵？」

否定できないのが辛いわね」

マヤの視線の先、リツコは頭が痛そうな素振りをした。最先端の技術を使ったエヴァに盾と槍など、マヤの敬愛する先輩のセンスに合うはずもない。

(シンジ君は喜びそうだけど)

素直な感想が口を出そうになったが、マヤは無理矢理に押し留めた。こんな事を聞かれたら、先輩の機嫌が急降下するに違いない。

この前は素手だったから石器時代だな、と技術課は笑った。最初に最先端のナイフを用意した事を、彼らはもう忘れてるらしい。

ミサトはため息をついて、シンジに練習の終了を告げた。

「シンジ君？もう上がっていいわ。お疲れ様」

「目標に………わかりました」

シンジの声と共にエントリープラグが開く。タラップを伝ってプラグスーツのまま上がってきたシンジにマヤは手元に置いてあったジャケットを手渡した。

「ありがとうございます。伊吹さん」

「うん、お疲れさま、シンジ君」

こちらのやり取りを見たミサトは、さて、と一息の溜めを作つてをまとめにかかると。

「残念だけどシンジ君の射撃じゃ、ちよつと使徒に使うのは危険ね。狙つてる間に反撃食らつちゃうわ。」

だからシンジ君には使徒のフィールドの中和をしてもらつて、こちらの操作する砲台で撃つことにします」

横目でシンジを見ると、分かりやすいほどに落ち込んでいた。最近分かったが、シンジはどちらかと言うと落ち込みやすいタイプだった。

あまりにもタフなせいで気づかなかつたが、彼も傷つくし、実は落ち込むことも多い。そんな所に、マヤは親近感を覚えた。

「だからまずエヴァを使徒に近づけなさいけないんだけど、その為の装備は次の操縦

訓練で見ることにするわ。一応、盾と槍、って意見は出てるけど」

「どうする？」とミサトが問いかける。

少し俯いたシンジは、間をとってから答えた。

「エヴァに乗って分かったんですけど、それで戦うには僕が盾と槍の戦い方に慣れないとダメだと思います」

確かにそうだ。シンクロは、エヴァを自分の体のように動かすと聞いている。なら、特殊な武器を使うならばまず、シンジが訓練する必要がある。

「それなら、装甲が欲しいなあ。使徒がどういのかわからないんですけど、フィールドを破るにはまず、近づかなきゃですし」

シンジの答えは分かりやすいものだった。マヤも、シンジが安全になることはいいことだと無意識に頷く。

リツコとミサトも、この案には賛成のようだ。すぐに納得の態度を返す。

「確かに、シンジ君もまだ素人だものね。守りが厚いに越したことは無いわ」

「最後のパンチの映像見ると、一瞬忘れちゃうけどね。あれが一般に出せれば、人類の守護神とか言つてすごい広報できそうよね」

そこで一同が苦笑した。あの戦いぶりは、今ではネルフの語り草だ。自分たちが関わっているもの大きさを、あの夜の決戦は教えてくれた。

「シンジ君が最後に見せたあの戦い方がシンジ君の戦い方なら、運動性を犠牲にするくらい装甲を増やしちゃってもいいのかも」

ミサトの意見をキーボードに入力しながら、マヤはあの夜を思い出す。

あの夜以来、あの戦いの映像は何度も見返した。

昼間の使徒を見て、本当に人類は滅ぶのだと思ってしまった恐怖を忘れることはできない。けれど、人類は戦える事をシンジと初号機は示してくれた。それ以来、マヤは使徒への恐怖を少しずつ減らしていくことが出来た。

それでも、未だに使徒の夢を見て眠れなくなる時がある。そんな時には必ずその映像を再生している。

「追加装甲ならそんなに時間は貰わねえよ。来週使徒が来るっていうならともかく、そうでないなら間に合うはずだ」

結局、初号機改修案はリツコの技術部に上げられ、小さな初号機改造計画は終了した。



パレットライフルによる射撃訓練からさらに数日。シンジが初めて登校する日になった。

「ついに今日から学校かあ」

新しい制服に袖を通し、シンジは呟く。

正直、エヴァの訓練をした方が良いような気がしたのだが、ミサトは譲らなかつた。「エヴァに乗るのも大切だけどね、誰かと繋がっていくのも大切なことよ。将来のためにも、行つてきなさい」

というのがミサトの談。将来の為はわかるのだが、その将来も生き延びてこそじゃないのかとシンジはため息を漏らす。

最初は学校生活にもやる気があつたが、エヴァの事があれば話は別だ。学校の勉強など、理由さえあれば一切やりたくないのがシンジの本音だつた。

（家の中だからって、あの薄着で話しかけるのは卑怯だよ。何もお風呂あがりに話して来なくてもいいじゃないか）

ミサトの家で世話になり始めて2週間と少し。

最初期こそ部屋掃除やら料理やらで慌ただしかつた生活も、作業の分担とネルフ経由で頼んでいる家政婦さんのお陰で余裕が出来て来た。

それもこれも、ミサトに一切家事をやらせずに信頼できる家政婦を雇う事をゴリ押ししてきたリツコのお陰だとシンジは思う。

はじめは大袈裟だと思つたが、今では慧眼だと尊敬していた。そんなにミサトの私生

活は有名なのだろうか。

だが、余裕が出来てきたからこそ困ったこともある。今一番困っているのはミサトのガードの薄さだ。意識に余裕が出来たからこそ、気になって仕方がない。

(ノースリーブのシャツ一枚に短パンとか何考えてるんだよ。すごい気になるから話をされても意識がそつちに行っちゃうんだ)

しかもシンジからすればミサトは家事以外に弱点のない大人の女性だ。尊敬もして、最初の手紙に入ってた写真は机の中にしまつてある。

そんな女性が、家の中でだけ薄着でガード緩そうに生活している。横にいるシンジとしては、気恥ずかしさと少しばかりの嬉しさで話しかけられても集中していられないのだ。

学校の話だって、ろくに抵抗もできずに言いくるめられてしまった。プライベートでシンジがミサトに勝つには、かなりの努力が必要になりそうだ。

(このままじゃマズい。どうにか抵抗できるようにならないと……)

考え事をしている間に着替えと準備が終わっていた。もう諦めることもできないな、とシンジは玄関を開け、外に出る。

ミサトは早くから出勤している。鍵がちやんとかかったか、二回確認してシンジは学校に向かう。

空を見上げると、そこは雲ひとつない綺麗な空だった。



新しい学校生活も、一度クラスに入ってしまったえば興味が湧くもの。

友達ができるか、クラスに受け入れられるかの命運をかけたシンジの自己紹介もつづがなく終わり、示された席についたシンジは学校用の端末を開いて、呆としていた。

時間は昼前。この授業が終われば昼休みなのでクラスもソワソワしているように感じる。先生の話がセカンドインパクトについて言及し始めたが、聞いている生徒はほとんどいなかった。

大災害だとはよく聞くが、シンジにとっては教科書の中の出来事だ。特に興味もなくメモだけ取って、視線が教卓から外れる。

(綾波さんともまだ話した事ないんだよね…)

シンジの視線の先、青い髪をショートに切った少女が端末を操作している。

ミサトから聞いた、先輩パイロット。なんでも、重い傷を負っていたにも関わらず、シンジがエヴァに乗る事を拒否した時に備えて待機していたらしいのだ。重傷を押ししてまで戦おうとした先輩に、シンジはまず挨拶をしたかった。

どれだけ高潔な戦士なのかと、尊敬したのだ。

生憎とその時の傷が重く、面会謝絶の為に今までは挨拶ができなかったが、今は違う。怪我を覆う包帯に身を包んでいたが、先輩は歩いて学校に来ていた。

学校に来れるくらいなら、もう挨拶しても良いだろうとシンジは自分にゴーサインを出す。

とりあえず、昼休みにジュースを差し入れすれば大丈夫かな、とシンジは差し入れるジュースの選定に入った。

(第3新東京市名物、黒たまごジュースって何味なんだろう…?)

そこまで考えたところで、シンジの端末に着信が入った。

(差出人不明?)

グループ型のネットワークだろうか。

とりあえずメールを開封して読んでみる。

黒たまごジュースの味を聞いてみようかと考えながら開いたメールは、シンジを驚愕させた。

《碓君があのロボットのパイロットって、本当?》

息を呑んだ。いくらなんでもバレるのが早すぎる。

《No》

《嘘。本当なんですよ。》

返信は、ほとんど間を置かずにやってきた。

断られると分かっていたのか、恐ろしくキータツチが速いのか判別はつかないが、単に諦めるつもりはないようだ。

(というか、隠しきれないよね)

隠した方が良いのかシンジは迷うが、シンジは素早く決断した。どうせ使徒が来るたびに消える転校生など、すぐに追及されるに決まっている。

《Yes》

エンターを押す。端末に自分の回答が表示された。

反応は、劇的だった。

「「ええー!?」」

クラス中から合唱が上がった。

「ちよつと!まだ授業中!」

「いいじゃんいいじゃん!」

「よくないわよ!」

最初に話しかけて来た少女の注意が飛ぶ。確か洞木さんといったか。真面目そうな人だった。

「ねえねえ、どうやって選ばれたの？」

「怖くなかった？」

「どうやってあんなの動かしてるの？」

矢継ぎ早に質問が飛んで来る。

とりあえず答えられるものだけ答えることにした。

「なんで選ばれたのかは僕もわからないよ。あと、すごい怖かった」

うわあ！と過剰な反応が返って来た。楽しそうなクラスメイトに、シンジは知らずと笑顔になる。平和な人を見ると、頑張つてよかったという気になる。

「あのロボット！名前なんていうの？」

「武器で戦うんだよね？」

「すごいー！」

感想まで飛んで来る。盛り上がりすぎて、収拾が付いていなかった。

シンジが答えようとしても、どうして良いのか分からないほどに大きな騒ぎになって来た。

だが、その隙間を縫って現れた少年がシンジの目の前に立った。黒いジャージを着込んでいる。

「転校生。すまんがちょっと顔貸してくれんか」

随分と思いつめた表情で言われた頼みに、シンジは素直に頷いた。黒い姿はシンジの反応を見ると、クラスメイトの影に去っていった。

(この騒ぎを散らしてくれてもよかったのに！)

シンジの内心は誰にも知られること無く、シンジは授業が終ってから屋上に向かうまでに、それなりの時間を必要とした。



屋上は日差しが強く、床からの照り返しもあつてひどい暑さだった。

その真ん中で、黒いジャージの姿が仁王立ちしている。

「来たか、転校生」

「呼ばれたからね。それに、君の空気が気になった。軽い用事じゃ、無さそうだったから」

そうか、と黒いジャージ姿の相槌が聞こえた。

「ワシは鈴原トウジじゃ。すまんな転校生、ワシはお前を殴らなあかん。お前をどうしても許せんのや」

黒いジャージが歩いてくる。冗談を言っている顔ではなかった。

トウジ腕を振り上げて殴りかかってくる。突然の事に驚いたシンジだったが、体が対応した。

大振りの一撃の軌道を読み、間に腕を差し込んだ。

重い一撃。シンジは腰に力を入れて耐える。

「突然言われたって分からないよ！何があったのさ！」

「妹が瓦礫の下敷きになったんじゃ！シエルターにおったんだけどな、揺れで落ちて来た天井の破片で怪我した！」

「…ッ！」

シンジの詰問は、更に大きな叫びに塗りつぶされた。

「命は助かったけど、もうずっと入院しててな。お前のせいじゃろう！」

激昂するジャージ姿を前に、シンジは腕を下ろす。

「あの夜に戦ったのは僕だ」

即座に殴られた。先ほどと同じ、大振りの右。渾身の力が入っていたのだろう。倒れないように耐えるのが限界だった。

左の頬が熱い。殴られた時に切ったのか、口の中に血の味が広がった。

「ごめん。君の家族を傷つけた。できるなら、妹さんにも謝りたい」

言い訳が頭を占める。仕方がなかった、僕も知らない。僕だって必死だった。

だが、言うことはできなかった。今にも辛そうにしている人の家族を傷つけたのなら、殴られる必要がある。シンジの、パイロットとしてのプライドが殴られることを選んだ。

「なんやとお前！」

「待てよトウジ！」

さらに激昂する少年、トウジをメガネの少年が押さえつける。

「離せケンスケ！こいつはな！こいつは！」

「もう一発殴つたら！それにあいつの顔を見てみる！碇だつて、辛いんだよ！」

トウジと呼ばれたジャージがこちらを向く。

トウジの振り上げた拳は、ゆっくりと下がった。

「話せや転校生。ヒドいツラしよつて。殴つたぶん聞いてやる」

(そんなひどい顔してるのかな)

自分の顔がどうなっているのか、まるで分からない。怒った顔なのか、泣きそうなのか。まるで顔に力が入らなかった。

「ごめん、話せない……」

シンジの答えに、トウジがさらに激昂する。

「話せ！なんか言ってみい、何があつた！」

「碇。俺が言えた話じゃないんだけどさ。マジで話してみろよ。死んじやいそうな顔してるぞ」

メガネの方が覗き込んでくる。こちらは心配そうな顔をしていた。

我慢しないと。とシンジは腹に力を入れる。転校初日から何をやっているのかと涙が出ないように目に力を入れた。

ただ、被害者のトウジは聞く権利があると思い、シンジは使徒と戦った夜を回想する。「敵とエヴァの事を知ったのは、当日の昼だよ。僕はパイロットの補欠だったみたいだ。

この街に呼ばれた僕は、そこでエヴァって言うロボットがあると知らされて、僕はそれに乗った」

「なんだよソレ……」

ケンスケが呟く。

「そんなの、無茶苦茶だ！それで碇は戦ったのか！」

憤るケンスケに、反応を返さずにシンジは続けた。感情を吐き出すのは、被害者の権利だ。加害者が出すわけにはいかない。

「妹さんが怪我するほど揺れたのは、多分2回。自衛隊が大きな爆弾を使った時と、敵の攻撃で街ごと吹き飛ばされた時で、昼と夜に一回ずつ」

(最低だ、僕)

話していい範囲がわからない為、シンジの説明は要領を得ないものになった。妹を傷つけられたトウジに対する説明としては、足りないにもほどがある。

「ごめん。僕に言えるのはココまでだ。本当に…」

「昼や」

もう一度謝ろうと思ったシンジに、トウジが割り込んだ。

「妹が下敷きになったのが昼で、それから必死に瓦礫をのけた。夜になって、ギリギリ応急処置はできたんじゃないけどな。避難がいつ解除されるから分らんから、遅かったら覚悟してくれとまで言われた」

トウジが頭を下げる。

「すまん。アンタは、妹の命の恩人だったんじゃない。殴って、すまんかった」

そのままトウジは頭を下げ続ける。

怒った側と、謝る側が同時に頭を下げる奇妙な空間が出来上がった。

シンジはネルフに厄介になってる立場として謝り、トウジも筋違いで殴った事を謝る。

そんな奇妙な空間に、特徴的な少女が現れる。

青い髪に赤い瞳の美しい少女。シンジが昼に挨拶に行こうとしていた先輩だった。

綾波が、その場の空気を無視して口を開く。

「非常召集。先、行くから」

綾波の赤い瞳がシンジを見る。一言だけ伝えた綾波は、踵を返して屋上を去った。『ただいま、東海地方を中心とした関東、中部の全域に特別非常事態宣言が発令されました…』

彼女の言葉を肯定するように、放送が鳴り響く。音は学校だけではなく、近隣全てに聞かせる音量での放送だった。

「ごめん。僕、行くよ」

敵が来たのならばモタモタしていられなかった。トウジのことは気がかりだが、パイロットとしての判断が勝った。自分が遅れた分だけまた誰かが傷つくことになる。

走り出し、屋上を去ろうとするシンジに後ろから声がかかった。

「頑張れよー！」

「…転校生エー！気張れ！」

元気なメガネの声と、後ろめたそうなジャージの声。

2人のエールを受けてシンジは全力で走った。



「目標を光学で捕捉。領海内に侵入しました」

「総員！第1種戦闘配置！」

ミサトの声が司令部に響き渡る。

『了解。第3新東京市、戦闘形態に移行します』

アナウンスが流れ、オペレーターの下に情報が集積する。

「中央ブロック、収容開始します」

「目標は依然進行中。対空迎撃システムの稼働率は45%です」

（チヨツチ低いわね）

ミサトは内心で舌打ちしたが、嘆いても仕方がない。それよりも部下を安心させる為に、それくらい気にもならないという風を装った。

「陸戦型だと思つてエヴァの修理と改修に予算回したからね。そのぶんは私達でフォローしましょう。民間人の避難状況は！」

「すでに退避完了との報告が入っています」

手元のモニターを眺めながら青葉が答える。青葉の専門は対人関係の情報の処理だった。

流れるように対内閣、対戦自、対民間の処理を終えていく。

「じゃあ隠すもんはないわね。初号機の発進準備進めて！警戒射撃で牽制しながら、初号機の発進を援護するわよ」

一通りの指示を出したミサトは、つい愚痴を吐いた。

「碇司令が居ない間に第四の使徒襲来。意外と早かったわね」

「前は15年のブランク、今回はたったの3週間ですからね。こんなの、誰も予想できま
せんよ」

小さい声だったはずだが、近くの日向には聞こえて居たらしい。

「こちらの都合はお構いなしか。そういう人、嫌われちゃうわよ?」

おどけた声を出すミサトは、モニターから目を離さない。自衛隊の総攻撃を食らいつ、悠々と進む使徒が映っていた。

上からため息が聞こえる。冬月副司令だろう。

「税金の無駄遣いだな」

全く同感だった。自衛隊としての意地もわかるが、それよりもエヴァの装備に金をかけたかったのが本音だ。

「委員会より、エヴァンゲリオンの出動要請が届きました!」

「待ってたわ。エヴァンゲリオン、発進!」

人類を背負う、最終兵器の瞳が光った。



避難シエルターの中は多くの人でごった返していた。このシエルターの中には中学

生が多く避難している。騒がしいのも当然だった。

その騒がしい避難シエルターの中で、トウジはシンジの事を考えていた。

(あの転校生。とんでもなく切羽詰まった顔してよった。どんな修羅場だったんじや)

転校生の見せた生気のない顔。それを思い出すトウジの横で、ケンスケが必死に携帯端末を操作している。

『本日正午に、東海地方を中心とした関東、中部全域に非常事態宣言が…』

「クソ、まただ!」

手持ちサイズの端末でテレビ電波を拾っていたケンスケが呻く。頭をかきむしるケンスケが気になり、トウジは一旦思考を止めてケンスケの端末を覗いた。

「また文字だけなんか?」

「報道規制ってやつだよ。僕ら民間人には見せるつもりがないんだ。クソ、なんで隠すんだよ!」

そう言ったきり、俯いてブツブツと文句を垂れ流しにしたケンスケは、トウジに振り向く。

「なあトウジ俺と一緒に…」

「行かんぞ」

トウジはケンスケが何か言う前に切り捨てた。

妹はシエルターにいても怪我した。シエルターを出たら、本当に死ぬ事になるとトウジは考えていた。

「そんなこと言わずにさ。トウジだつて気になるんじゃないのか？何も知らないでぶん殴つちやつてさ」

「…だからじゃ」

トウジは言葉少なく返す。昼の一件、相手をよく知りもしないでぶん殴つたトウジが全面的に悪かつた。転校生に対して、トウジは借りがある。

（転校生。無事でおれよ。お前にはわしを殴つてもらわにやいかん）

これ以上転校生の負担を増やすわけには行かない。トウジは、この悪友が面倒事を起こさないように必死になつて見張り続けた。

騒がしいシエルターの中で、どんな戦いがあつたのか想像するしかないトウジは右の拳を見る。

「人を殴るつて、しんどいのお」

殴る相手。

『エントリースタート』

『LCL電荷します』

『発着ロック解除だ！お前ら所定の位置に退避しろ！』

初号機の発進準備が進む中、シンジはプラグの中で出撃の時を待った。

ミサトの指示に従い、シンクロ準備が整ったプラグ内で、シンジはエヴァに語りかける。

「エヴァ、行くよ。もう誰にも傷ついて欲しくないんだ」

シンジの呼びかけを合図として、シンジとエヴァがシンクロを始めた。エヴァの体がシンジの体になり、シンジの心がエヴァの魂となる。

シンジの言葉の意味までは読み取れなかった初号機も、シンジがやる気なのは感覚で掴んでいた。前の使徒を殴りつけた時の感覚を思い返して、初号機がシンジを受け入れる。

3週間の訓練で、シンジは初号機とのシンクロの回数を重ねていった。その中で初号機や、もう1つの薄い意識とコンタクトを取り続けたシンジ。そのおかげで、今では気

負う事なくシンクロすることが出来た。

『シンクロ率、70%で安定！ シンジ君、頑張つてね』

マヤからの通信が入った。シンジは軽く頷く事で返答にする。

マヤの顔のモニターが、厳しい顔のミサトに変化する。

『初号機の出撃位置にシールドを出します。でも相手の火力は未知数よ、注意して』

初号機にシールドのデータが転送されてくる。

シンジは、今まで完成したとは聞かなかった新装備のデータに目を通す。

『技術部の男衆がね、突貫で作ってたものよ。見栄えは悪いけど、前の使徒の火力ならそれなりに耐えられるように出来てるわ』

データを確認すると、エヴァの装甲と同じ材質で作られた多重装甲らしい。

計算では、エヴァの火力と合わせれば一国の軍隊とすら殴り合える代物だと、注意書きに書いてある。

喧しい技術部の面々のドヤ顔を想像しながら、手早くデータを確認したシンジは、準備完了の意思を放った。

「わかりました。お願いします！」

ミサトが頷く。その後ろで、作戦部のメンバーが小さく手を振ってくれた。

『エヴァ初号機、発進！』

発射音と共に初号機がレールを駆け上がる。途中で2度進路変更した初号機は、第3新東京市の南に轟音と共に出現した。

初号機の紫色の装甲が太陽光を弾いて輝く。

『シンジ君！　まずは使徒のフィールドに干渉してみて。干渉が確認できたら、砲台型ビルからミサイルを撃ちます！』

「了解！」

前回の使徒とは違い、今回の使徒は通常兵器の全てを無視している。

その為に使徒の性能は一切不明。まずは小手調べが必要だった。

そこでミサトの出した作戦は、敵フィールドに干渉し、無効化した上での囮作戦だった。

ATフィールドに関する訓練を行えなかったネルフは、フィールドに関する一切をシンジに頼っている。今回の作戦も、「中距離からならばフィールドに干渉できる」というシンジの言葉を信じたものだった。

「ATフィールド、展開。いっけえ！」

相手を離そうとする気合。その不思議な感覚を手に入れる為に、シンジはネルフの協力のもとにシンクロ訓練を続けた。

その結果、エヴァがシンジの気合いに応えてATフィールドを張る事を覚えた。

シンジは結局、フィールドを展開する感覚を完璧には理解できなかったが、それで構わない。シンジが叫びと共に考えた事を、エヴァは忠実に再現してくれた。

今回は久しぶりになる本当のエントリーだったが、訓練の時と感覚は変わらない。

初号機が自分の目の前にATフィールドを展開する。

(これなら作戦通りやれそうだ)

甲高い音を上げて八角形の波紋が空中に浮かぶ。それを確認したシンジは、兵装支援ビルから取り出した盾を構えた。大型の兵装支援ビルを経由して届けられた鉄塊は、中腰のエヴァを丸々覆えるだけの大きさを備えていた。

「さて大怪獣。ネルフの決戦兵器の威力、思い知ってもらおうよ！」

今回はパイロットのシンジも訓練をしつかり積んでいる。前回の様に、簡単に攻撃を食らうつもりは無い。

紫の巨体が市街を行く。爆音が鳴り響き、舗装された道をシンジは一直線に走った。

赤い使徒はまだこちらに向き直らない。だが、体の先端をそのままに後端を地面に下ろし始めた。

段々と形態を変える使徒に対してエヴァが踏み込み、盾を振りかぶって跳躍する。

「ATフィールド、中和ア！」

使徒が変形して地上に下ろした部分に、初号機は自身のフィールドごと盾を叩きつけ

た。

エヴァを覆えるサイズの鋼鉄が使徒にめり込む。

「まずは、小手調べだ！」

そのまま初号機は使徒を吹き飛ばした。



「……………」

ネルフ発令所は沈黙していた。

シンジと発令所の意識の違いに、言葉を失っていたのだ。砲撃支援を基本にしていた発令所メンバーは、突然走り出す初号機に対応できず、突撃した初号機を見守っていた。作戦は進行している。初号機は盾を構え、守りを固めて小手調べをする。

その多くは間違っていないが、初号機がフィールドを中和出来る距離と、シンジの性格が考慮されていなかった。

最初にそこへ思い至ったミサトは、発令所の誰よりも早く正気を取り戻し、指示を投げる。

「倒れた使徒に対してミサイル発射！直接砲撃は発射準備して待機！」

弾かれた様にオペレーターが動き出す。モニターの中、倒れた使徒に向かってミサイルが発射された。

その映像を睨みながらミサトはシンジをコールする。

「シンジ君、初号機のフィールド中和距離ってどんぐらいなの？格闘距離？」

エントリープラグから送られてくる映像の中で、シンジは頷いた。

今までシンジとフィールドの実戦運用について話さなかったツケが回ってきた。

シンジの感覚的な言葉で「中和距離」からフィールドを中和出来ると聞いていたミサトだったが、認識を改める。

（中和距離は中和距離でも、戦争の中和距離じゃなくて格闘戦としての中和距離だったの!?）

軍に身を置き戦争を学んだミサトと、格闘戦しか知らないシンジの感覚の差が、悪い形で表面化した。シンジには、初めから頭に射撃戦というものが入っていなかったのだ。

「使徒、起き上がります！」

ミサイルが着弾した瞬間に立ち上った煙の中から、赤い使徒がゆっくりと起き上がる。イカの頭だけがこちらを向いた、妙な立ち姿が露わになった。使徒の両端から光の帯が地面に向かって伸びる。

「砲撃用意！撃てえ！」

発射準備を整えた兵装ビルから、徹甲弾が発射される。自動給弾されたオートキャノン砲が鳴り響き、連射された弾が使徒に殺到する。

フィールドに守られるだろうが、そこで一手分の時間をロスしてくれば御の字とミサトは考えていたが、ATフィールドは展開されずに使徒に直撃する。

日向の声が発令所に響く。

「着弾確認！」

砲撃の効果を調べようと、拡大される画面の中を紫色の光が横切った。

新しく入った情報を日向が報告する。

「砲撃型兵装ビル二基、沈黙しました！モニターに出します！」

拡大された使徒の両端から光の鞭が垂れ下がっている。先ほどの砲撃が効いたのか、滑らかだった使徒の表面に、いくらかの凹みが見られた。

使徒の映像の右下に、鋭利な刃物で切り裂かれた様に破壊された砲台の映像が挿入される。

ミサトは、この使徒が鞭による戦闘を考えた物だと考えた。

「この前は殴られたから、今度は近寄せせないってワケ？」

使徒が何者で、個体同士の関係も分からない。

しかし、殴り合いで負けた前回の使徒を意識しているようにミサトは感じた。

「シンジくん！今の見えた？」

『見えました！鞭ですよねアレ！！？』

シンジも理解できているようだった。油断なく使徒を睨む横顔に、ミサトは声を投げかける。

「兵装ビルも切り刻んだシロモノよ。フィールドでしつかり守らないと、エヴァの装甲でも無事では済まないわ！」

先ほどの一撃が効いたのか、使徒はATフィールドを出そうとしない。

どうすればあの光る鞭を攻略できるのか、ミサトは作戦を立て始めた。



赤い使徒と紫の初号機が対峙する。

静かに佇む使徒に対し、初号機は攻めあぐねていた。

（あの鞭の射程じゃ、絶対に何発か食らうことになる。一撃の重さがわからない以上は迂闊に飛び込めないな）

使徒とエヴァの距離は、エヴァの足で20歩はある。使徒の鞭の射程外なのか、使徒は一向に動こうとしないが、手がないのはシンジも同じだった。

(射撃武器が無い以上、何にしろ飛び込まないと攻撃すらできない。腹をくくるしか無いか)

「ミサトさん、もう装甲を信じて突っ込むしか無いと思うんですけど。ミサトさんはどうです?」

返事が返ってこない。全神経で使徒に注意している以上、ミサトを伺うこともできないシンジはミサトの答えを待った。

『特攻は最後の手段にしましょう。シンジ君、ミサイル砲台が無事で、キャノン砲台が狙われたのが気になるわ。』

別の砲台から撃ってみるから、合図したら盾を構えてもう一回アタックして。使徒の攻撃を誘い出せそうな所までいいから』

ミサトに策がありそうだった。戦闘で脳みそが沸騰している身としてはありがたい。最後は気合いで勝負を決めるシンジでも、よく知らない敵の相手をするのは神経が削れるような負担を強いられる。

冷静な指揮官がいてくれるのはありがたかった。

「了解です、ミサトさん」

初号機が深く腰を落とし、盾を掲げる。

「いつでも行けます!」

『砲台の準備もできたわ。合図とともに使徒の左右から砲撃が行きます』
すう、と息を吸う音が聞こえる。

『アタック!』

「—ATフィールドオオ—!」

前方の左右から聞こえる発砲音と共に駆け出す。気合いを入れたシンジは、オレンジの光を纏う盾を押し出すようにして走る。

使徒の射程に近づく。

盾を構えたままなので前方は見えないが、気を利かせてくれた作戦課が横からの映像を回してくれた。ネルフ謹製の通信技術にタイムラグはほとんど存在しない。シンジは映像を信じて使徒の間合いに走りこむ。

初号機の前に砲撃が届いた。

甲高い音と共に、使徒がATフィールドを展開する。使徒の目の前で砲弾がひしゃげた。

そこでシンジは、自分の読みが外れていることに気付いた。

「鞭が飛んでこない?」

疑問に思った瞬間、シンジの背筋を冷たいものが走った。

急な悪寒に促されるまま、シンジはエヴァを横に倒す。倒れるようにしてエヴァが横

方向に飛び去った。

視界の端で盾が削り取られたのが見えた。エヴァと同じ材質の装甲が簡単に抉られるという、想像を超える使徒の火力にシンジは身震いする。

バックステップを繰り返し、シンジはまた元の距離まで戻る。

使徒も追いつがってくるが、その動きは遅い。

人間に照らし合わせると、超人的な動きを可能とするエヴァの動きに、鞭以外は鈍重な使徒はついてこれていなかった。

「ミサトさん！」

『想像通り、とんでもない威力ね。でも大丈夫よシンジ君』

ミサトの声は、強大な使徒を前に力強く響いた。

『タネは割れたわ』



発令所に浮かぶ巨大スクリーンでは、先程の使徒の動きがスロー再生されていた。

映像の中、使徒のフィールドが消えるタイミングを見てミサトは確信を得る。

「あの鞭の攻撃には、使徒のATフィールドが転用されると見て間違いないわ」

スロー再生された使徒は、ATフィールドで砲弾を受け止め終わるまで光の鞭を仕舞っていた。

再展開されたのはフィールドを消してからだ。

「そのせいであの使徒が出来るのは攻撃か防御のどちらか。懸念されてた射撃武器も無し。

オマケに、綺麗に食らった砲撃が意外と効いたのか、一回叩いてきた初号機と同じくらいには怖がっている。つけ狙いたい放題よ」

ミサトは口元を吊り上げて笑った。この第3新東京市は、使徒を殺すために作られた要塞都市。まだその機能の全てを發揮しているわけではないが、使徒を抹殺する場所を作るのはお手の物だ。

好きな所から、好きな分だけ撃てる。

「さあ、反撃の時間よ」



(やっぱリネルフは凄いや。色んな武器と防衛施設があつて、戦いやすい)

シンジが内心で感心していると、ミサトから指示が飛んだ。

『そこから、もうちよつと東に移動してくれるともう一台からも砲撃できるんだけどね。次の接敵で余裕があったらそっちに動かしみてくれないかしら？ シンジ君から見て、左のほうね』

ミサトの声に合わせてマップが表示され、エヴァ、使徒、砲台の位置関係が表示された。

『30秒後にもう一回やるわ。いける？』

ミサトの声の裏で、青葉や日向の声が聞こえる。2人の声と共にプラグ内にカウントダウンのフレームが浮いた。

「行けますーこれでトドメにしてやりますよ」

強気に発言する。自分を奮い立たせるためには、これくらいがちょうど良かった。

『オツケー。あの魚介系みたいなヤツには、さっさとお帰り頂きましょう。』

お代は置いていって貰うけどね』

物騒な言い方、とリツコの眩きが聞こえた。それには同感するが、戦っているとどうしても変なテンションになる。目を瞑ってもらうしかなかった。

『じゃあいくわよ。カウント、スタート！』

プラグ内のカウントが減っていく。使徒の頭にある、顔のような模様を見据えて初号機が腰を落とす。

残りカウントが5を数えた時、ミサトの号令がかかった。

『砲撃！ありつたけ撃ち続けなさい！』

『1発だつて外しませんよ！シンジ君の道は、僕らで付けます！』

ミサトの声に作戦課の雄叫びが聞こえる。

作戦を考える人達だと思つたら、まさか戦闘までこなすのかとシンジは軽く驚いた。

二台の砲台が交互に火を吹き、発砲音が鳴り響く。リズミカルに鳴り響く砲撃を聞きながらシンジは腰を浮かせた。

アラートが鳴った。

「行きます！」

フィールドを全開にして初号機が走った。盾を肩に担ぎ、シンジは最高速度で突撃することだけを考える。相手の武器は鞭しかないとわかつた今、敵の懐に潜り込むまでに盾が保てばいい。もはや恐れることはなかった。

ATフィールドで砲撃を受け止め続ける使徒が後退する。

「逃すかア！」

もつと、もつとだ。更に速く走ろうと、シンジは地面を足の裏で蹴飛ばし続ける。

シンジの視線の先、赤い使徒がついにフィールドを解除する。ひしゃげ、地面を汚すだけだった砲弾が使徒の体に喰らい付いた。

砲撃に晒された使徒は、少し体を傾けつつも生成した光鞭を振ってくる。兵装ビルを切り裂いた一撃が迫る。

しかしシンジは、恐れずに突っ込んだ。

「エヴァのフィールドと、この盾があれば！」

上から打ち下ろされた光鞭に対し、初号機は盾を下から搦り上げるようにして持ち上げる。

フィールドを纏った盾を、使徒の光鞭に叩きつけた。

（意外と重いぞー！）

フィールドが発生した時特有の、甲高い音が鳴り響く。振り下ろされた光鞭の重さに驚きつつ、シンジは地面を踏みしめて盾を横に振り抜いた。

盾に流され、使徒の光鞭が初号機を捉えることなく地面を弾く。

『よっしやあー！』

ミサトの歓声が聞こえる。盾を投げ捨て、初号機が跳躍する。初号機の背後で役目を果たした鉄塊が、着地の衝撃で真つ二つに割れた。

跳躍した先、赤い使徒に向かって初号機が両膝を揃えて突き出す。

「まずは一撃！」

シンジは、使徒の平べったい頭に全体重をかけた両膝を叩き込んだ。

初号機がそのまま使徒を押し倒す。

『シンジ君、ナイフを使って。赤い玉を狙うのよ!』

ミサトのフォローが入る。そのまま使徒を右手で殴りつけたシンジは、ナイフの存在を思い出して左手に装備した。

逆手に持ったプログナイフを使徒のコアに叩きつけようと、腕を振り上げた時に初号機は体勢を崩した。

『使徒、光鞭を再展開しました!』

『何ですって?!?!』

使徒のコアにナイフが浅く刺さる。それが限界だった。光鞭を再展開した使徒は、器用に鞭を使って初号機の胴を縛り上げ、軽々と投げ飛ばした。

「うわッ!!」

驚き、悲鳴を上げるシンジだったが、そのまま倒れるわけには行かない。必死にバランスを整えた初号機が、投げられた勢いを殺しつつ後ろに転がる。

「器用な真似をして…!」

やっと膝立ちになり、投げ飛ばされた場所を確認する。山の入り口まで投げ飛ばされた初号機の視界は、シンジに見覚えのある景色を伝えた。

(……)、学校の近くじゃないか! って事はシエルターも近い!)

シンジの脳裏に、今日初めて会ったクラスメイトが浮かぶ。シエルターが壊れたせいで家族を傷つけられたクラスメイトの顔が頭によぎった。

そしてシンジの意識が逸れた隙を使徒は見逃さなかった。

シンジの目の前が暗くなり、使徒が上からのしかかる様に落下してくる。

避ければ後ろのシエルターが無事では済まない。そう直感したシンジは、ATフィールドで使徒を受け止めた。

(こんな時、鉄壁が使えれば……)

シンジの保有するサイキックの1つに、一定時間、敵の攻撃からの被害を軽減するという能力があった。一時的に機体の防衛行動を細やかにし、攻撃を受け流し、うまく受け止める事でその場に立ち続けるギガントパンチャーを支えたシンジのサイキック。

シンジの十八番とも言えるそのサイキックは、初号機が未だに「守る」という概念を理解していないために発動することが出来なかった。

「い、の、重いんだよー」

使徒の下半身に右手を叩き込む。先ほどの攻撃で手を離してしまい、ナイフを失った左手も握り込んで叩きつける。

しかし、体勢が悪いために殆ど効いていない。

上から押さえつけられているせいで、初号機はまだ立ち上がれていなかった。

紫の光が振り上げられた。鞭の様にはなく、今度は剣のように鋭く突き刺してくる。

「それくらいだったから見える！」

初号機が光鞭を握りしめて受け止めた。

今までは鞭のスタイルをとっていたから視認することすらできなかったが、今は違う。自慢の光鞭は、近距離ではシンジの瞳を振り切れなかった。

肉を焼く音が響き、シンジの掌が焼ける。実際に焼けたのは初号機の掌だったが、シンクロ率が高まったシンジにも初号機とほぼ同じ痛みが来た。

久しぶりにリツコの声が通信に乗る。

『シンクロ率下げて！これでは初号機よりもシンジ君が先にやられるわよ！』

「下げないでください！」

リツコのフォローを、シンジは切り捨てた。この痛みから逃げては、初号機からの歩み寄りがなくなるとシンジは感じていた。

まだ初号機の意識は成熟していない。寄り添い続けないと、初号機はまた自分の心を閉ざす予感があった。

（あと少しなのに！）

シエルターを背にしたシンジの目が、使徒のコアを見据える。投げ飛ばされた時に手

を離れた為に、使徒のコアには未だにナイフが突き刺さっていた。

手の届くところにある使徒のコア。しかも傷さえ付いているソレを前に、後ろのシエルターが傷つく事を恐れたシンジは手を出せない。

だが、使徒と睨み合うシンジに接触する意識があつた。初号機の意識がシンジに一撃を重くするサイキック【熱血】をくれと催促する。

シンジは素早く問い返した。初めてエヴァが提案してきた作戦に興味があつた。

エヴァの希望した場所は頭。両手が埋まっているならば、残っている手段はこれしかない。

(……痛いよ?…ずく)

シンジの問いかけに初号機は即答した。あと少しくらい、我慢して倒してやるという意識がシンジに流れてきた。

「うん。君が行けるっていうなら。君と僕を止められる奴なんていないよ。行くよ、初号機!」

初号機の頭部、前に突き出た角にフィールドが展開される。角の根元から順に、何枚ものフィールドが積層される。遂に先端まで初号機の角を覆ったフィールドは、更に高く積み上がり、また根元に降りてフィールドの密度を上げた。

光る。光る。光る。

オレンジに光っていたフィールドはやがて黄色くなり、更に重なる。

異変を感じた使徒が大きく動く。光鞭をしならせ、初号機を振り払おうと身を振らせる。

しかし、シンジは自分から光鞭に手を巻きつけて使徒の逃亡を防いだ。掌だけでなく、手の甲まで焼けるような痛みが広がる。だが、その痛みですら脳がアドレナリンで満たされたシンジの動きを止めることはできなかつた。

もつと、もつと大きく輝けとばかりに、初号機はフィールドを重ね続けた。

初号機の角が巨大になり、輝く。

遂には、初号機の頭にはプログレッシブナイフを超えるほどの光の角が出来上がっていった。

真つ白に輝く初号機の角に、シンジのサイキックが宿る。

——熱血——

初号機の顎門が開く。

【オオオオオオオオオオオオ……!!!】

「うわああああああ……!!!」

初号機／シンジの叫びが鳴り響いた。

初号機は使徒の鞭を握りしめ、大きく仰け反る。

「食らいなよ神のお使いさん。この一撃が止められるのなら、止めてみせろ……！」
目指すはコア一点。夕暮れの空を切り裂き、白い輝きが弧を描く。

赤い玉を睨みつけたシンジは、そのまま頭を叩き込んだ。

元々亀裂が入っていたコアは、ろくな抵抗もできずに初号機に貫かれる。

使徒の悲鳴が上がった。光鞭が脈打ち、必死に初号機から離れようとする。しかし、

ここで終わらせる覚悟のシンジは渾身の力で使徒の光鞭を引き絞った。

「もう自爆なんてさせない……ッ」

使徒のコアに角を突き刺したまま、初号機が使徒を持ち上げる。

「僕の、勝ちだー！」

初号機の角に宿ったフィールドが解放された。

圧縮された光が解け、重なり続けたフィールドが解放されることに使徒のコアを穿

つ。

初号機の光が使徒を貫いた。コアから、背中まで切り抜かれたように抉られた使徒は、耳をつんざく様な悲鳴をあげた。

コアを吹き飛ばす攻撃の余波で、使徒が吹き飛んだ。

第3新東京市の道路に身を横たえた使徒は大きく痙攣し、やがて動きを止める。

『パターン青、消失しました！』

遠くに青葉の通信が聞こえる。その声で、本当に使徒が倒れたと確信したシンジは、眠るように意識を手放した。



数日後、ネルフで簡単な健康診断を済ませたシンジは、学校の屋上に居た。

目の前には先日と変わらない黒いジャージのトウジが立っている。隣にケンスケを連れたトウジを見て、何となく、シンジはトウジが何をしたいのか予想できる気がした。

そして、その予想は見事に的中する。

「転校生、頼みがある！ワシを殴ってくれ！」

そう言い、殴られる体勢になるトウジ。足を肩幅に開き、両手を後ろに回した彼に、シンジは内心で溜息を吐いた。

（やっぱり、あの話終わってなかったか！）

シンジからすればもう終わった話であり、また掘り返されても面倒という意識が先に立つ。だが、トウジの真っ直ぐさはシンジも嫌いではなかった。彼となら仲良くなれそうだな、と感想を抱いてシンジは先日の会話を続けることにした。

「あの話は終わりにしようよ。もし君を殴っても、今度は僕が気に病むんだけど？」

「そいつあ悪いと思う。でも、それじゃあワシの気が収まらないのや!」

トウジは、一切姿勢を変えなかった。意地でも殴られるまでは立っているつもりだよだ。

あまりにも一本気なトウジの意思に、シンジは薄く笑って答えた。

「じゃあ一発、ぶん殴るよ。でもそれじゃ僕の気が収まらない。一発食らって、立つてられたら殴り返してきて。それくらい、できるでしょ?」

シンジは拳を握り、トウジの前に立った。トウジは一瞬呆気にとられた表情をしたが、すぐにその表情が笑みに染まる。

「ワシの根性を試そうってゆうんか? ええぞ、ワシの根性、試してくれ!」

「じゃあ、行くよ!」

右の拳を引き、腰だめにトウジの腹を殴る。コンパクトにまとまった拳が、トウジの腹を貫いた。

シンジの、割と本気の一撃がトウジの体をくの字に折り曲げる。

「さすがに、いい拳持つとるやないか!」

だが、トウジが崩れ落ちることはなかった。膝が笑い、手を腹に当てているトウジだが、その表情は笑っている。

「今度はそっちの番だよ。それとも、もう立てなくなつた?」

シンジも少し笑った。

トウジならこの一撃を耐えきるといふ期待があり、トウジはそれに応えた。

「まだ全然じゃ！行くぞ転校生！」

トウジが拳を振りかぶる。目線はシンジの腹を捉えて居た。馬鹿正直にやり返して来るらしい。

トウジの拳が唸り、シンジの腹を打つ。掬い上げる一撃に、シンジは自分が少しだけ浮き上がった感覚を得た。

「シンジだよ」

「ン？」

「僕の名前。転校生じゃなくて、碓シンジだ」

シンジの自己紹介に、トウジは笑って返した。

「もう一度自己紹介させてもらうで。ワシは鈴原トウジ。よろしくな碓」

そこでトウジは手招きをする。

「所で、歩けるか碓？ワシはまだ余裕なんやけどな？」

「言ったね？」

シンジが腕を引く。一発ずつで終わりにするつもりだったが、誘いがかかつては仕方がなかった。

「これで立ててたら、凄いや鈴原！」

今度は左だ。フック気味に放った拳がトウジの腹を狙う。唸り声を上げながら、トウジの膝が落ちかけた。

だが、トウジは氣勢を吐いて持ちこたえる。

「トウジでええぞ！これで終わりか碇！」

「シンジだよ！ホラ、来なよトウジ。次は君の番だ！」

トウジが殴る。シンジが食らう。

シンジが殴り、トウジが受ける。

殴り合う理由も忘れ、何も考えずに殴り合う。

7回ほど攻守を交代した辺りで、飽きた顔をしたケンスケから声がかかった。

「お前らが仲いいのはわかったけどさ。そろそろ昼休みも終わるぜ？メシ、早く食っちゃいなよ」

シンジは、そういえばまだ昼を食べていなかった事を思い出す。

だが、腹は減つていても今食べたら吐くことになる。シンジは、自分の弁当を見てため息を吐いた。今は諦めるしかない。

何となく、横を見る。ちょうどトウジが焼きそばパンを見てため息を吐いている所だった。

その動きが余りにも自分に似ていて、シンジは笑った。笑った刺激が空腹に響く。痛い痛い、お腹減ったとシンジが笑う。

つられて、トウジも笑った。なんやそれ、と。

結局、2人は昼飯にありつくことはなく、午後の授業をずっと空腹のまま過ごした。

綾波レイという少女

綾波レイ。14歳の女性で、エヴァンゲリオンパイロット。見目麗しいが、口数は少なく、表情にも乏しい。パイロットとしての戦績無し。好きな食べ物不明。趣味不明。胸は大きく、現在クラス最大の霊峰の持ち主。

これが、シンジが第壱中学校に転向してから綾波レイについて調べた結果だ。

見事に見た目しか分からなかった。クラスメイト全ての胸を比較したケンスケは勲章ものだとは思うが。

「何考えとるのか全く分からん。可愛い顔しとるとは思うけど、愛想のないやつじゃ」

というのが最近つるむことになったトウジの談。話しかけたことはあっても、殆ど返された事はないとの補足まで入った。

「めっちゃ可愛いよね。っていうか碓も見てみろよ、綾波の胸凄いやから。近くでガン見しても怒らないからマジ天使」

とはケンスケの談。だから女子はケンスケの事をゴミ扱いしているのかと、シンジは妙に納得した。

その2人の意見を聞き、シンジは綾波にアタックしてみた。その様子を見たケンス

ケには会話に成功した事を褒められたが、あんまり反応良くなかったなあというのが正直な感想だった。

シンジは綾波とのファーストコンタクトを思い出した。



学校の授業終わり、シンジは真つ先に綾波の所へ向かった。

「こんにちは、先輩」

椅子に座ったままの綾波に、ジューズを差し出しながら話しかける。

突然の声かけに驚いたのか、それとも黒たまごジューズは外したのか。

綾波が少しだけ瞳を見開いた表情でこちらを見上げた。

「先輩？私はあなたの同級生よ」

「でも、パイロットとしては先輩でしょ？」

親しみを込めて笑いかける。

（あんまり笑顔作るのってやったことないんだけど。大丈夫かなあ）

「ちよつと先輩と話してみたくてさ。先輩、時間ある？」

シンジの言葉に、綾波は一瞬の躊躇もなく答えた。

「それが命令なら、そうするわ」

あんまりな反応に、シンジの笑顔が引きつった。因みに、受け取って貰えないせいでシンジは未だに黒たまごジュースを差し出したままである。

(これはまた、始めて相手するタイプだ……)

さすがロボットのパイロット、マトモなはずもなかったかー)

「命令じゃないよ。というか、先輩に命令なんて出来ないしね？もし良ければ、つていう提案」

一瞬の反省を入れた後、シンジはなおも食いつく。塩味の効きすぎた対応に折れないシンジに、周囲から声援が飛んだ。

「提案……」

シンジの言葉を繰り返す綾波に、手元のジュースを回しながらシンジは言葉をつなげた。

「そ。先輩の事なんにも知らないからさ。好きなものとか、嫌いなものとか。いつも何してるのか。は、まあプライベートすぎるかな。でもまあ、そんなところ」

「何故？」

「ん？」

「何故、そんな事気にするの」

綾波が、相変わらずの無表情で問いを投げってくる。本当に疑問に思っているのかすら分からない鉄面皮が、威圧感まで伴ってシンジを見据えた。

だが、生憎と鉄壁具合で負けるシンジではなかった。その場に踏みとどまることに關して、シンジを超える地球人は居ないとすら言われた城壁少年に後退はない。

「もちろん、仲良くなりたいたいから、だよ。これから運命を共にするわけだし、こういう積み重ねがエヴァでも大事だと思っただよね」

若干苦しい言い訳を並べる。まだ学校ではエヴァの名前は知られていない。ネルフのことを隠しながら会話するには、共通点であるエヴァが最後の頼みだった。シンジは、食いついてくれと笑顔の裏で祈った。

「エヴァに關係があるの？」

（食いついた——！）

シンジは心の中でガッツポーズを決める。

「あると思うよ。——ほら、これから一緒に動くわけだし、お互いが何考えてるかわかった方がいいと思うんだ。だから、」

「いいわ。今度話しましょう」

シンジが意気込んだ瞬間、帰り支度を済ませた綾波が席を立つ。

そのまま綾波はシンジに背を向けて歩いた。

「じゃあ、さよなら」

突然の展開に動きを止めたシンジに、別れの挨拶が投げられた。

「あ、うん。またね」

おかしい。どこで会話に失敗したのかとシンジは自省する。明らかにこのまま場所を変えて雑談でも出来そうな勢いだったはずだ。

頭が疑問符で埋め尽くされたシンジにできたのは、少し格好のつかない挨拶だけだった。



（いやでも約束取り付けられたのは良いことなような。というか胸ガン見とかなんでケンスケはできるんだ？）

放課後の教室で、シンジは思い思いに羽を伸ばすクラスメイトを眺めながら考えた。

正直、先輩とうまく話す自信が全く持てない。

シンジの前に、2人分の影が落ちた。トウジとケンスケだ。

「シンジ、お前さんやつぱり凄いやつじやな。あの綾波にあんだけ喋らせるなんて、このクラスで初めての事じゃぞ」

トウジを見上げる。女子相手に悪口を言わない、トウジの言葉にシンジは驚いた。陰口のような内容のそれは、余りにもトウジに似合わない言葉だ。しかし、この素直な友人は感情を隠すタイプではないとシンジは知っている。本気で言ったのだろうか。

「それって、綾波さんに友達いないみたいに聞こえるよ。流星に失礼なんじゃない？」
「阿呆。そう言つとるんじや。ワシも悪口みたいな事、言いたくないけどな。本当の事ばかりは仕方ないじやろ」

シンジは答えない。トウジにここまで言わせる綾波の遍歴に、興味が出てきた。

「ワシの知つとる限りじやあ、話す相手なんてイインチヨくらいのもんじや。初めは色んなのが話しかけたけどな、誰とも話が合わずにこの有様よ」

トウジの述懐に、ケンスケが補足を入れた。

「ま、ミステリアスで良いって、男子の人気はかなり高いけどな。でも突然どうしたんだよ。ナンパ、手慣れてたな」

「ナンパ？」

ケンスケの言葉に、シンジは聞き返す。いつナンパをしたのか記憶になかった。

「さっきのだよ。黒たまごジュースなんて地元のやつじや誰も買わないレアものまで探してきて、運命を共にする？なんて言っちゃってさ」

おまえ自分の人気自覚しろよな、とケンスケが続けた。

確かに、ネルフのことを隠して話した内容だと、そう聞こえないこともないかもしれない。
ない。

「あ、アレはそんなんじゃないよ！」

突然恥ずかしくなったシンジに対し、トウジが手を振りながら答える。

「まあ違うのはわかっとなるわ。手口がエゲツないくらい上手いのも本当じゃけどな。

で、なんで綾波んトコ行つたんじゃ。あの関係か？」

小声でロボットか、とトウジが呟く。シンジは頷いて答えた。

それを見て、ケンスケの目が光りだす。

「マジかよ。それは知らなかったな。実は学校のマドンナが巨大ロボットのパイロットとかマジ燃える展開だな！」

トウジとシンジがうるせえ、とケンスケの足を蹴り飛ばす。誰かに聞かれていたら、

小声で話しているのが無駄になる所だ。

「痛っ！ちよつと2人ともやめろつてマジで痛いから痛いから！」

シンジが無心でケンスケを蹴り続ける。

トウジから聞いた話だと、エヴァを見るためにシエルターから抜け出そうとまでしたらしい。

馬鹿な事をしないように、シンジとトウジは念入りにケンスケの足を蹴っておく。

シエルターの分も含めて、しっかりとケンスケを蹴り飛ばしたトウジが口を開く。「なるほどのう。しかしあの綾波と仲良くなるとは難儀な事を。そりやあナンパクくらいせんと話にならない」

だからナンパクじゃないって、とシンジは抵抗するが、トウジは相手にせずに言葉を続ける。

「あー、でもあれじゃ。あいつ何時も教室で飯食ってるんじゃないが、肉食つてるところ見た事ないの。嫌いなんか？」

久しぶりに有力な情報がきた。流星はトウジだ。仲良くなってから知ったのだが、この黒ジャージはクラス全域に顔を繋ぐ事のできる人間だった。

なぜこの男がまるで女子に人気が無いのか、シンジからすれば学校の七不思議に並ぶ疑問である。

突然の有力情報に対抗心が起きたか、ケンスケが慌てた様子でカバンから写真を出した。

そのまま、小声で叫ぶという妙な技術で熱弁を始める。

「それなら、俺は綾波の家知ってるぜ！」

見ろよこのポロアパート。他の人間が住んでる様子もない所に住んでるっぽい。前に見たときはスーパリーの袋持ってたから、もしかしたら一人暮らしかも！」

力強い言葉が、シンジとトウジの頭にゆっくりと浸透する。なぜ知ってるんだ、連絡網か。気になるからって本気で行ったのか、と思考がゆっくりと巡り、

『犯罪じゃねえ（ない）か！』

シンジとトウジは、今度こそ手加減なくケンスケを蹴り飛ばした。



ネルフ本部の一画、技術部に与えられた区画にレイはいた。

明るい廊下に面したドアには、技術部長の部屋を示すプレートが掛かっている。

「赤木博士。これ、報告書です」

扉を開け、レポートを差し出す。

週末の金曜日である今日は、自分の養育者となっているリツコに、生活の報告を提出する日だった。

「ご苦勞様。今週は何かあった？」

「いえ」

こちらを見ずにレポートを受け取るリツコが問いかけてくる。

それに対し、いつも通りに何も無い、と答えようとしてレイは止まった。

「碓君と話しました」

「碓君と？何を？」

「話をしたいと。私を知りたいようでした。エヴァに関わるから私が何を考えているのか興味があると」

ああなるほどね、と納得するリツコに、レイは問いかける。

「赤木博士。碓君は何を望んでいたか、わかりますか」

「碓君、こういうの上手いのね。話してきなさい。碓君と仲良くなると、司令もお喜びになるわ」

リツコから出た司令という言葉に、体が小さく反応した。

「なるべく早く、出来るだけ多く話をしておきなさい。ああ、シンジ君に関してもレポートを出しておいて。司令が気にしてらしたから」

レイの反応を見て、リツコがまた司令、と口に出す。

「わかりました」

そこで会話が途切れる。

レイは失礼します、と一言だけ残して部屋を去った。

「碓シンジ君。ゲンドウさんの為には、彼と仲良くしたほうがいいのかしら」

部屋を出る前、リツコの悩む声が聞こえた気がした。



葛城宅の夜は、今日もシンジとミサトが向かい合って食事をしている。

シンジが食事を作る日は手作りの事もあるが、ミサトが作ることはない。

大体が家政婦さんが作りおいてくれたおかずを温めなおして食べる生活だった。

「レイがどんな子か？」

ミサトは、シンジが改めて切り出した話題について考える。

（私も、そんなに知ってるわけじゃないんだけど）

ミサトは、手元のビールを傾けながら答えた。

「大人しい子よね。自己主張が薄いというか。私が知ってることは、多分シンジ君と変わらないと思うわ」

「そう、ですか」

視線の先、シンジは少し落ち込んだ様子を見せる。

「綾波さんの事、クラスメイトに聞いても全然わからないんですよ。大体みんな、見た目の事しか知りませんでした。本当は僕と同じように転校してきたと思っただくらいです」

「それは違うわ。レイがこの街に来たのはもつと昔。私より、全然先輩よ。ちゃんと入学式からあの学校にいたわ」

シンジの意外な行動力に驚きつつ、ミサトはレイの略歴を思い出した。中学に入ってからと、エヴァに関係することのみの情報だったが、少なくとも、中学に入学した時点でエヴァと関わっていた筈だ。

「ねえ、レイの事、気になるの?」

頬がニヤついている自覚はあるが、少し酔ったミサトはそれを抑えられなかった。

「ヘンな顔になってますよ。そりゃ、気になりますって。エヴァに関しては先輩だし、綾波さんのエヴァもあるんでしょ? なら、一緒に戦う事になると思うし…」

「そうね。じゃあ、女の子としては?」

「は?」

虚を突かれた顔でシンジが間の抜けた声を出す。表情豊かなシンジを見つつ、ミサトは言葉が続けた。

「レイは可愛いし、スタイルいいじゃない? 気になったりしないの?」

はあ、とシンジはため息を吐いて答えた。

「ミサトさんまでそんなこと言うんですか。僕にそんなこと言われても分かりませんよ。なんでみんな、ソツチに向かわせようとするんですか」

ガードが固いな、とミサトは感じる。

しかし、シンジと同居を始めてもう一ヶ月近くなるミサトは、そのガードを下げる方法を知っていた。

少し前かがみになり、シンジから胸元が見えるようにする。すぐに視線を感じた。

「そりゃあシンジ君の好みの子とか気になるもの。まあ女の子には興味あるみたいだし？心配はしてないけどねん」

「そうやってすぐからかうの、やめて下さい！」

「なーんでよ。いいじゃない一緒に住んでるんだから。——ああ、ごめん、ごめんって。私が悪かったから向こう行かないで。一人でご飯食べるの、嫌いなのも私」

頭を振って部屋に戻ろうとするシンジを引き留める。少しやりすぎたな、とミサトは酔った頭で反省する。

最初に送った写真を返してこないところを見ると、シンジがミサトの事を嫌ってはいないの分かる。

指揮官とパイロットとしてもいい関係を築いている感覚があるが、ミサトはそれでは少し物足りなく感じていた。一方的に共感を感じている身だからか、シンジの一線引いた態度が寂しく感じる。

「ああそうそう。あの子ね、リツコが保護者なんだけど、それより司令の方に懐いてる感

じがあるわよ。司令も悪く思っていないみたいで、声くらいはかけてるみたいよ」

本当はもっと親しげだったが、ミサトはその程度の表現に留めた。

シンジと司令の親子関係は相当重い。心情的にはシンジ寄りのミサトは、父親とのコミュニケーションが上手くいっていないシンジに、本当のことは言えなかった。

「父さんが、ですか」

やはり、シンジは俯いてしまった。内面に向かおうとするシンジを呼び止める意味で、ミサトはシンジに声をかける。

「それも聞いてみればいいじゃない。私からもレイに声をかけてみるわ。ホラ、美味しそうなお飯だもの、まずは美味しく頂いちゃいませよ？」

ウインクをしつつ、戯けた調子で話す。腹が減っては考え事も悪い方に進みやすい。シンジの気を紛らわせようと、ミサトは明るい調子で今日のニュースについて語り始めた。

暦も夏になってくる。もともと暑かった気温が更に高くなり、学校の授業にプールが追加される時期だ。シンジも気を取り直したのか、ミサトとの雑談混じりの会話に興じる。今度の週末はドライブにでも行こうかと、2人は行き先について語り合った。



ドイツにて、アスカは送られてきた映像を見返す。モニターの中、使徒と戦う紫色の機体が拳を固めていた。

「碇シンジ、か。汎用人型決戦兵器の名前にケンカを売るこのインファイターっぷり。本物っぽいわよね」

最初に襲ってきた使徒戦にて、慣れない様子で戦う初号機を眺める。汎用の言葉を忘れたかのように、ただ拳で戦い続ける姿があった。

「それに結局、一步も引かないで立ち続けるこの戦い方。こんなの、街の喧嘩でもないわ。」

巨大ロボットで守り続けたクセ、まだ残ってる。次の戦いだと治ってるみたいだけど」

第二の使徒との戦いでは、囿に合わせて攻撃、そこから回避に後退と、一戦目に比べて余裕が見える。あの都市自体を、少しは信用した結果だろう。

「でも、私達ってまだ会った事無いはずなのよね。どうやって挨拶すればいいんだろう？」

昔世話になったことのある格闘バカを思い出してアスカは考える。こちらでどう誘導しても、どこかでポカをやらかすシンジの姿しか想像できない。真っ直ぐすぎるアスカの戦友は、徹底して人を騙す事を苦手としていた。

「ま、今から考えてもしようがないつか。どうせ会うとしたら私の力が必要になる時。上から目線で高い貸しにしてやるんだから」

アスカは、またシンジと共に戦う事を確信していた。あの男が戦いに巻き込まれたなら、中心はきつとそこになる。「シンジと共に戦った記憶」を持つアスカは、これから始まる戦いの日々を躍らせた。

「エヴァに関しては、私が一番なんだから。そこん所をちゃんと教えてあげないとね！」
初号機の映像を流しながら、アスカはエヴァに搭載できる射撃武器のデータをチエックする。射程、威力、弾速と、細かいデータを頭に入れて次の実験の為の予習とする。

セカンドチルドレン、惣流・アスカ・ラングレーは、エヴァ用射撃兵器の実機訓練の準備を続けた。

レイ。心の向こうに。

「シンちゃん、ちょっと理科の観察してみない？」

葛城宅。明るいリビングで出前のラーメンをすするシンジに、ミサトの問いが投げかけられた。

「なんですか？また変な思いつきじゃないですよね」

味噌ラーメンにバターを乗せつつ、シンジが問い返す。長い付き合いではないが、同居相手のにこやかな笑みに嫌な予感がした。綺麗な笑顔の裏を感じ取れるくらいに相手を知る事が出来たのは、良い事なのだろうかと自問する。この笑顔に引つかかってこの街に来た身としては、複雑な気分だった。

「明日ね、リツコが言うには司令が前の使徒の研究現場に来るらしいのよ。学校の授業も大事だけど、コッチも大事じゃない？」

「父さんが来るんですか！行きます、行きます！」

唐突に出された父親のネタに食いつくシンジ。

笑顔の裏で何か企んでいる事は読めるようにはなった。だが、まだ敵わないな、と感想を得たシンジは、ラー油取って来ます、と席を立った。

今、自分はかなり嬉しそうに笑っているのだろう。それを正面からミサトに見られるのは、正直気恥ずかしかった。

ミサトからの提案を聞き、シンジは父との再会を期待しながら寝ることになる。



シンジがミサトと会話し、再会を期待した相手であるその父親は、ネルフ本部で冬月と会話していた。

薄暗がりの部屋、ゲンドウの執務室に初号機の戦闘記録が流れる。

「初号機の活躍に、老人達は恐れている。エヴァならば可能な戦果とはいえ、シンジは余りにも簡単にその性能を引き出した。制御された暴力としてのエヴァではなく、今やシンジにその注意が向いている」

「シンジ君の戦いは見事なものだよ。だが、我々のシナリオとも離れてしまっている。未だユイ君は目覚めてはおるまい」

冬月の指摘に、ゲンドウは笑った。少し、的外れな事を話す恩師が可笑しかったからだ。

「いや、ユイは目覚めてる。でなければ、初号機があれ程に戦うことはできない。初号機

とパイロットは、厳密な意味では意思疎通が行えず、必ず仲介が必要になる」「シンジ君が初号機と意思を伝わせたとの報告は見た。ならば、もうユイ君は起きているのか」

「間違いなく。シンジは、我々のシナリオを強力に後押ししている。これならば、さらなる前倒しも可能だ。シンジが初号機とユイを刺激し続ける限り、我々に負けはない」

「まあそれも、シンジ君次第だね。彼の精神は我々の想定から逸脱している。碓、父親として、少し話してきたらどうだ」

冬月の提案に、ゲンドウは少し黙った。

目を瞑り、考えをまとめる。数秒程考え込んだゲンドウは、ゆっくりと息を吐いて答えた。

「次に会った時、時間を取りましょう。我々に失敗は許されない。何があるかと、ユイと再会しなければならぬ。この星の未来の為に」



ネルフ、ジオフロント内部。

ミサトの車に送られたシンジは、地上からジオフロント内に収容された使徒の遺骸の

下まで来ていた。

「いらつしやいシンジ君。司令が来るまで、少し待つてて頂戴」

出迎えたリツコが、柔らかくシンジを歓迎する。シンジは機嫌良さそうに笑うリツコを見て、先日の記憶を引つ張り出した。

（前のデブリーフィング―（軍でいう戦闘後の報告の事）―の時も褒められたけど、まだ楽しそうにしてる。そんなに喜んでもらえると、ちよつと嬉しいな）

前回の戦闘の後、リツコは飛び上がりかねない程に喜んだ。何から何まで不明だった使徒の肉体を、原型を留めたほぼ完全な形で手に入れたのだ。

その時の、抱きつかんばかりに感謝を伝えてきたリツコの喜びようは初めて見るものだった。

（テンション高めのリツコさんをマヤさんが必死に抑えてる姿、ちよつと面白かったな）
そして、その流れでリツコ、マヤ、日向にミサトと夕食を食べに行つた夜の事をシンジは回想する。ご馳走してもらつたハンバーグは、料理ができるシンジをしても真似できると思えないほどに美味しかった。

「シンジ君のおかげで毎日が充実してるわ。まさかこんな年になつて自分を抑えられないなんて思わなかつた程よ」

「いえ、自爆させないようにするので必死でしたから。カンでしたけど、当たつて良かった

たです」

「本当に良かったわ。それで、前回の戦闘で壊れたものが少なかったから技術部に予算が少し降りてきたの。技術課、ええと、私たちがそう呼んでる彼らが初号機の装備について話したがっていたから、話を聞いてあげて」

連絡するべきことを語ったりツコは、またね、と手を振ってミサトを連れてテントの中へと姿を消した。

あまり睡眠を取っていないのか、眼の下には薄っすらと隈が透けたように見え、シンジはリツコの体調を心配する。仕事が終わればしっかりと寝てくれるのだろうか、その仕事がいっ終わるのか見当もつかなかった。

残ったシンジを手ぐすね引いて待っていたのは、エヴァや武装の整備・開発に携わる大柄の男性の2人だ。片方はサングラスをかけ、もう1人は禿げた頭を光らせていた。

彼らは軽い調子でシンジに声をかける。

「よおシンジ。学校はうまく行ってるか?」

「はい。友達もできましたよ。いくら殴っても倒れない、使徒より手強い友達が」

そりゃあ良い、最高じゃないかと、技術課とリツコに呼ばれた2人が笑う。

「よし、んじゃあ付いて来てくれ。俺らの方で開発案を何個か作ってな、シンジがビビっと来たものを教えてほしいのさ」

「了解ですっ」

シンジは2人について行きながら、先ほどのリツコのセリフで気になった疑問を解消することにする。

「そういえば、なんでお二人は技術課、って呼ばれてるんですか？技術部の技術課、って言うのはなんとなく分かるんですけど、リツコさんが不思議な言い方してましたよね？」

シンジの質問に対してサングラスをかけた方が答える。

「ああそれが。何とかなあ、俺らは整備課だったり資材課だったりと転々としたんだけどよ。どーにも一個の事だけするのが苦手でなあ」

「色々な案件に関わったり、手助けしたりしてうちに便利屋みたいになっちゃってよ。エヴァ自体に関わるような専門性が高い奴までやれるようになったあたりで赤木博士にそれなりの裁量を貰えたのさ」

サングラスの言葉が秃頭が継いだ。

悪戯小僧のような笑顔を浮かべた彼は、それは楽しそうに話す。

「それからは資材課の部署に籍置かせてもらいながら、やれる仕事を色々やらせてもらってるのよ。技術部で困った事、人手が足りない時はいつでも参上の便利屋だから、技術部のどこにでも出てくる技術課って呼ばれてるのさ」

ゴキブリみてえな自己紹介すんじゃないやねえ、とサングラスが禿頭を小突く。
「俺もこのハゲも、ロボットつてのが大好きでな。楽しくて仕方がねえよ。」

……さあさあ着いたぜ日本の誇るパイロットさんよ！こつち来てくれよ、お前の気に入りそうな装備が無いか夜も寝ねえで考えたんだぜ！」

そういつて案内されたテントの中には、大量の書類が置かれた机が鎮座していた。

気になって机の上に目を向けると、50メートルと書かれた日本刀やら、杭打ち機のような凶案、果てにはエヴァの原型がないほどにマッチョに改造された人型の凶案まで存在している。

「凄い——！」

シンジがいつか見た情熱。人類を守る為の死力の1つが机上に溢れていた。

寝る暇もない、という言葉は本当だったのだろう。乱雑に置かれた書類に書き込まれた文字は荒れ、読み取れないものも多かった。

だが、研ぎ澄まされた凶案が、まるでそこに実物を置いてあるかの様なリアリティで描かれている姿に揺らぎは無く。シンジに自らを使えと訴えているかの様だった。

「シンジの戦い方を研究させてもらつてな。防御力の増加は真つ先に考えた。だがどうにも使徒の火力が分からねえのさ。エヴァを基準にしても、パレットライフルとこの前のフィールド頭突きじゃあ火力の桁が違うな」

「そこでだ。防御の方向性を変えちまおうと思つてな。ヤバそうなものは出来るだけ避けて、動きの邪魔にならない程度に装甲を増やす。

それがコイツだ」

そう言つてサンガラスが見せたのは、エヴァ用の手甲だった。拳を守るナツクルガードを追加したそれは、エヴァの前腕部を一回り大きくしたものになっている。

「元々あつた企画案でな。射撃武器の取り回しが悪くなつて、他国のエヴァとの規格が合わないつてんでお蔵入りになつた物だ。でもまあ、シンジは撃つたところで当たらないからな！格闘重視で復活よ」

「他にも色々あるんだけどな。突撃しやすいように肩のマウントにブースター取っ付ける計画なんてのもある。ただまあ、大掛かりなのは赤城博士待ちだな」

「リッコさんの？」

不意に出たリッコの名前に、シンジが問い返す。

答えたのは禿頭の方だった。

「ATフィールドさ。二体目の使徒の時、お前さんの突撃の速度がコツチの予想を超えててな。どうもフィールドが絡んでるんじゃないかって意見が出てる」

そこで禿頭が手元の端末に映像を出した。意味のわからないグラフが並んで動いている。

これがATフィールドのデータだとサングラスが補足した。

「ただ、このフィールドを理解できているのが赤木博士と、その弟子の伊吹ちゃんだけなんだよ。エヴァがほぼ一品モノの所以なのかもな。で、だから今は元に戻しやすい小改造が手一杯なんだ。でもまあ、縛りがあつてもやれる事は多いんだ。ちよつくら見てつてくれよ」

大きく口を開けて笑う2人に、シンジも笑って返した。

乗っているロボットの改造計画に、心が惹かれない筈もない。シンジもパイロットとして少しはリーチも欲しいなどの意見を出し、男三人の会議は短いながらも白熱していった。



1時間ほど経つただろうか。シンジと技術課の3人は、熱した頭を休めている所で、外のざわめきに気がついた。

「そろそろ時間かね。シンジ、司令が来たんじゃないのか？」

禿頭の言葉に、シンジは明後日の方向を向いていた目を通路側に向けなおした。

「遂に、父さんが」

「司令によろしくな。いくら偉くたって父ちゃんなら、話してるうちに何とかなるさ」
「はー！」

禿とサングラスの2人に見送られ、シンジはぎわめきの中心に足を進める。

少し歩けば、黒一色の父親の背中はずぐに見つかった。

そう大きくはないゲンドウの背中が使徒の前で揺れている。

使徒の紅玉。初号機の頭突きがその殆どを吹き飛ばしたが、一部はまだ残っていた。

人の背にも満たない高さ程の紅玉のかけらに手を触れ、冬月と共に技術部であろう男性から説明を受けている。

「父さん」

つい、口から言葉が出た。ゲンドウを呼びたかったわけではなく、何かを言いたかったわけでもない。形にできない感情が心から溢れてシンジの口を動かした。

この街に来たのが随分前に感じるほど、密度の濃い時間を過ごしたが、その全ての時間はそのままと会えない時間だった。

子供の頃に捨てられ、呼ばれたにも関わらず話したのは初号機に乗り込んだ時と、その後と呼ばれた時のみ。

どう話しかければ良いのかすら思いつかない。

先程、技術部に力強く背中を押された言葉を思い出すが、それでもシンジの足は止

まっってしまった。

だが、シンジの声に応えるように黒い背中が振り返る。

「シンジか」

ゲンドウは一言だけ発し、隣の冬月に後は頼みます、と声をかける。

「時間はあるか」

断定するような声で聞いてくる声に、シンジは必死に答えた。

「う、うん！大丈夫」

「そうか。ならばついて来い。昼食を用意してある」

ゲンドウの瞳がシンジをまっすぐに捉えた。

サングラス越しに投げられた視線に温かみは無かったが、シンジはそれでも構わないと腹をくくる。

やり直すのだ。子供の頃は、泣いてばかりだったから僕は捨てられた。何もしなかったから捨てられたのだと後悔するシンジは、もう二度と同じ間違いを繰り返したくなかった。

「わかった。行こう、父さん」



ネルフ本部。浅い層に用意された来客用の部屋に通されたシンジは、軽く部屋を見回した。

柔らかい絨毯と暖かい色の照明に包まれた部屋は、物は少ないがネルフの中では温かみのある部屋だった。

白いテーブルクロスが敷かれた長いテーブルの端に案内されたシンジは、目の前の銀食器の見事な装飾に目を奪われる。

(高そうな食器。予想外に格調高いというか、食べ方知らないんだけど、どうしよう)
「楽にしろ。この部屋はよく使うために手続きが簡単でな。他意はない」

「うん。わかった」

テーブルの反対側の席に着いたゲンドウが言葉少なに話しかけてくる。

連れ立って移動するうちに落ち着いたシンジは多少リラックスして返した。

「さて」

次にゲンドウが口を開いたのは、テーブルに料理やコーヒーが並んだ頃だった。

格調高い部屋に合わず、親しみやすい料理が並んだテーブルの向こうでゲンドウが口を開く。

「まずは、ご苦労だった、シンジ。二体の使徒との戦闘、訓練量に対して良い結果だった」

まるで褒めていられるように感じられない冷めた声で、ゲンドウは淡々と語る。

「初号機の操作にも慣れたか。シンジ」

「うん。初号機は素直なんだ。だから、僕の考えた事を悩まないで聞いてくれる。これから初号機がどうなっていくかは分からないけど、パイロットとして、精一杯頑張るよ」

「そうか。初号機と意思疎通が出来ると言っていたな」

ゲンドウは数秒程俯き、険しい目でシンジを見た。

「その際、他の意識を感じたことはあるか」

「あるよ。エヴァに比べて薄い気配だけれど、優しい意識があつたのは覚えてる」

「そうか」
息を吐き、ゲンドウは目を瞑った。数秒間そうしていると、目の前の料理に手をつける。

「僕からも聞きたいことがあるんだけど、良い？」

「何だ」

「父さんが何をしたいのか、教えて欲しい」

サングラスの奥から強い眼光が飛んで来る。気圧されそうになりながらも、シンジはその眼光を受け止めた。

「人類の存続だ。その為に課題も多いが、今お前に言っても信じないだろう。エヴァに

関わるならばお前もいつか知る。その時になり、お前が事実を受けとめられると判断した時、話す」

「わかった」

「シンジ、お前も食べる。この味は、知っておいて損はない」

「父さん、フレンチ好きなんだ」

「母さんが気に入っていた」

短く返された返事の内容に、シンジは軽く目を見開いた。

(母さんの事、聞けるとは思わなかったな)

「そうなんだ」

「ああ」

最早、記憶に無い母親の事が気になる。だが、シンジは一度途切れた会話を無理矢理に繋げる事に執着しなかった。

自分とどこか似ているところがあると、ある種の共感を得たシンジは、これ以上踏み込む事を恐れた。

静かな部屋に、食器同士がぶつかる微かな音が響く。

父親に美味だと推された食事は、あまり味がしなかった。



第3新東京市の中心から外れた集合住宅区画。

遠く、工事の作業音が響く一面にシンジは来ていた。

「ごめんくださいーいー！」

団地型の施設の中層階の端に、綾波と書かれた表札が貼られている。

「ごめんくださいーいー！先輩？綾波さん？届け物あるんだけどー？」

（リツコさんに頼まれたIDカード。綾波の事は気になっていたけど、まさかこんな形で綾波の家に来ることになるなんてね）

綾波宅に来て5分ほど呼んでいるが、まるで反応が無い。まさか留守か、と心配もしたがドアノブは開いているので、来るのが遅かったというわけでも無い。

「しょうがない、か」

意を決して、ドアノブに手をかけた。

今日は零号機の機動実験がある。もしかしたら、大きなストレスで体調を崩したのかもしれないと、シンジはドアをくぐった。

「勝手に上がってごめん、綾波さん、居ないの？」

綾波の部屋は殺風景だった。いや、殺風景というよりも、病院のセットと言われた方

がしつくり来る様子だ。日常生活ではまず使わないだろうビーカーが、コップのように使われた形跡が残っていた。

（眼鏡？）

スチール製の机の上に、男性用の眼鏡が置いてある。

フレームは歪み、レンズは割れてしまったものだ。実用に耐えるものではなく、何かの記念なのかとシンジは少し悩んだ。少し、その眼鏡に見覚えがあったからだ。

（誰のものだろう。いつか、見た事がある気がする）

眼鏡を手に取り、遠い記憶を掘り返そうとする。暖かい記憶の気配がしたのだ。だが、後ろに生じた人の気配が思考を中断させる。

シンジは振り返りつつなんて説明しようかな、と考え、そこで思考が止まった。

この家の家主が糸纏ぬ姿でそこに立っていた。

体を拭くためにか、大きめのボディタオルを手にしたレイは、恥じらう事もなく、シンジを注視していた。

「その、勝手に入ってごめん！届け物しに来ただけで、鍵空いてたからー！」

シンジの言い訳を聞いているのか、聞いていないのか。まるで反応せずに無表情のままレイはシンジに詰め寄る。

病的な程に白い肌がシンジの目を引いて離さない。シンジはどうすれば良いのか分

からずにとだ狼狽した。

「綾波先輩？本当にごめん！でもお願いだから隠して！」

シンジの必死な願いも無言のまま捨てられる。シンジの目の前に立ったレイは、シンジの持つ眼鏡を取り上げようと手を伸ばした。

勢いよく迫る手に、シンジの防衛反応が動く。一歩分、横に避けたシンジはそのままレイの横をすり抜けるように動きかけた。

「——！」

だが、そこでレイが体勢を崩す。目標が急に動いた事で狙う目がシンジの方を向き、急に方向を見失った体幹がバランスを崩して倒れかかる。

「危ない——！」

レイの横をすり抜けようとしたシンジはそこで足を止めた。踏み出した足に力を入れないおし、動きを止めると、よろめいたレイを支えるようにして腕を伸ばす。

結果、シンジの悪あがきは功を奏し、レイを抱きとめることに成功した。

（柔らかっ——!!?）

レイの素肌に触れ、一瞬だけ感動するシンジ。だが、それ以上はマズイと意識的に思考を止める。そのせいでシンジは固まったように動きを止めてしまった。

「眼鏡。返して」

シンジの動きに一切の興味を示さなかったレイは、抱きとめられ、動けなくなつたために要求を口にした。

「眼鏡?——ああ、ごめん。大事なものなんだね」

どうぞぞ、とレイを抱きとめた手とは逆の手に持つていた眼鏡を差し出す。

そこで今の自分を思い返して思考が煮えた。

(やばいやばいやばいやばい。家に勝手に入つて裸見て抱きしめてつて、最悪だ僕! 謝らないと! まずは謝らないと!)

「その、ごめ——」

「ありがとう」

謝罪を口にしようとしたシンジは、レイの言葉に動きを止められた。

平手打ちの一つ二つを覚悟していたシンジは、予想外な言葉の意味を反芻する。

(裸見られたのにありがとう? いや、そんなはずは。じゃあ眼鏡のこと? もしかして、綾波さんつて自分の裸見られたりしても気にしない——?)

先日、ケンスケが胸を見ても綾波は怒らないと語つていたことを思い出す。理由は分からないが、先輩の感性は独特なのだとして受け止めることにした。

若干腑に落ちないものを感じつつ、シンジはレイを離し、後ろを向いた。

下着を着ているのだろう、衣擦れの音を聞きつつ、落ち着かないシンジは焦つたよう

に話し始めた。

「あー、その、ごめん。本当に。リツコさんからネルフ本部のIDカードが更新されたから届けて来いって言われて。テーブルに置いとくね」

「ええ」

「その眼鏡なんだけど、綾波の？」

「違うわ。司令のよ」

「父さんの？」

驚いたシンジはレイの現状を忘れて振り向いた。

下着のみを身につけたレイがシンジを見返す。

「そう。以前、実験の失敗の時に司令が駆け寄ってくれたの。その時の物よ」

「そっか。父さん、先輩には優しいんだ。——って、ごめん！」

少しでも知りたかった父親の情報を貰い、冷静になったシンジは、下着姿のレイを認識してまた後ろを向く。

「また謝るのね。何が怖いの？」

シンジの背に、レイの問いが投げられる。心底わからない、と言った感情が見える声だった。

「先輩に嫌われるのが怖いかな。女の人の肌を勝手に見るのはダメだって怒られたこと

があるんだ」

「私に嫌われたくない。何故？」

「そりゃ、同じエヴァのパイロットだし、大怪我しても戦うつもりでいたって聞いて、尊敬してたし」

そこで少し間を置いて、違うな、とシンジは呟いた。

「そんなのは後付けかな。なんか、綾波さんって初めて会った気がしなくてさ。気になつてたんだ。ごめんね？ 一方的で」

「敬語。いらないわ。それに、謝罪もいらさない。私、あなたの事嫌いじゃないもの」

布擦れの音が途切れた。

「行くわ。起動実験の集合、1300だから」



電車に乗り、ネルフ本部までの直通エレベーターを持つ偽装ビルに入る。

受付嬢に偽装した職員に挨拶し、長い直通エレベーターにシンジとレイは乗り込んだ。
だ。

備えつけられた列車用と思われる椅子に、少し離れて2人は腰掛ける。

「起動実験、うまく行くと良いね」

エレベーターの作動音だけが響く狭い個室に、シンジの声が響く。

「成功するわ。あなた、司令の子供でしよう。お父さんの仕事が信じられないの?」

元々感情が薄いレイの瞳から、感情の色が消えた。

「信じたいよ。でも、僕は今の父さんをまるで知らないんだ。知らないのに、信じるのは

無理だよ」

「司令のエヴァをあなたが使って、使徒を倒したわ」

レイが睨みつけるようにシンジを見据えた。

「そうだね。変なこと言っでごめん。僕は、父さんを信じたいんだ」

「なら、見ていると良いわ。零号機の起動に成功して、碇司令が信じられると教えてあげ

る」

「ありがとう。先輩」

それきり無言になったエレベーターが地下へ降りる。

スピーカーからポン、と到着を知らせる音が鳴った。

『まもなく、ジオフロント東。ジオフロント東に到着いたします。皆さま、お忘れ物の無いようにお願いいたします』



「レイ、聞こえるか？」

零号機が見える室内、実験データが集積する作業室でゲンドウはレイに話しかけた。

『はい』

レイの返事にゲンドウは頷く。レイの気力も十分だと判断したゲンドウは、小さな不安を押しつぶして口を開いた。

「これより、零号機の再起動実験を行う。第一次接続開始」

ゲンドウの静かな号令が降り、技術部の面々が粛々と作業を開始する。

「主電源コンタクト」

「稼動電圧、臨界点を突破」

リツコの具体的な指示のもと、儀式のように厳かに再起動実験が進んでゆく。

「フォーマット、フェーズ2へ移行」

「パイロット、零号機と接続を開始」

「回線開きます。パルス、ハーモニクス、正常。シンクロ、問題なし。中枢神経素子に異常なし。再計算、修正無し」

技術部の面々の端末から流されるマヤが、丁寧に情報を拾い上げて読み上げる。

「チェック、2590まで、リストクリア」

マヤの報告を受け、リツコが進行を司る。2人は、神官の如く冷静に、丁寧に実験を進める。

『絶対境界線まで、あと、2.5。1.7。1.2。1.0。0.8。0.6。0.5。0.4。0.3。0.2。0.1。突破。ボーダーライン、クリア』

零号機の単眼に光が灯った。

「零号機、起動しましたー!」

マヤの宣言が広い部屋に響く。

ホッとしたように、室内の空気が緩んだ。

だが、すぐに技術部の面々は真剣な表情に戻り、レイの反応を待った。

『了解。引き続き、連動試験に入ります』

パイロットの安全も確認された。そう分かった瞬間、技術部の総員が拳を握りしめて喜ぶ。

その姿を見て、ゲンドウは少しだけ口角を上げた。

前回の実験は、パイロットを傷付ける最悪の結果に終わった。そのために、再起動実験に関わる殆どの職員が初号機のデータを徹底的に洗い、寝食を除く全ての時間を充て

て実験に臨んでいる事をゲンドウは報告で知っている。

全ては、二度とレイを傷付けるものかという技術部の意地だった。

その努力が報われたとわかり、喜びに浸る室内。

だが、手持ちの端末を耳に当てた冬月の言葉が全職員に緊張を強いる。

「未確認飛行物体が接近中だ。おそらく、第5の使徒だな」

ゲンドウの判断は早かった。

「テスト中断。総員、第一種警戒態勢。非戦闘員は即座に避難区画へ」

『了解。総員、第一種警戒態勢。繰り返し、総員、第一種警戒態勢』

冬月の、零号機を使わないのかという問いにゲンドウは首を横に振って応えた。

「まだ戦闘には耐えん。初号機を出せ」

「380秒で準備が出来ます。」

ゲンドウの言葉に、リッコが応える。室内を見渡すと、先程まで部屋の隅にいたシンジの姿が見えなかった。

「シンジ君は、もう出ました。司令の言葉に一番に反応したのは、ご子息です」

リッコの補足が入る。やはり、先日までただの中学生だった筈の子供の反応ではなかった。

だが、ゲンドウとしては問題に感じるほどでは無い。ゲンドウの目的に沿うならば、シンジがどんな秘密を隠し持っても構わない。

「司令室に移動する。戦闘スタッフは付いて来い」

サングラスを持ち上げ、ゲンドウは身を翻す。人類存続を脅かす使徒のうち、最初の試練となる使徒が来た。

ゲンドウの持つ情報も多くな、今回は特別苦戦することだろう。

（貴様に任せただ、シンジ。ユイと共に人類を守れ）

傷ついても、一度負けてでも。初号機を失うわけにはいかない。その為の判断を過たないように、ゲンドウは発令所へと急いだ。

決戦、第3新東京市（前）

ネルフ本部、発令所。

全体的に暗い室内に、大量の情報が集積してゆく。

広い空間に、日向の報告が響いた。

「無人機の攻撃、反応ありません！」

ミサイルの爆炎に包まれつつ、巨大な青い結晶が悠々と空を進む。

「無人機じゃ反応も無しか。少しでも情報が欲しいわね」

何の反応もない使徒に、ミサトはほぞを噛んだ。

「青葉君、戦自に協力要請をお願い。可能性の話になるけど、有人攻撃なら反応があるかもしれない」

「乗ってきますかね」

「こつちの持つてる使徒の情報を流しちゃつて。危険は十分説明して、下手に出れば多分乗ってくれるわ。メンツもあるでしょうしね」

険しい表情を崩さないまま、ミサトはリツコに向き直る。

「戦自に渡す情報の選別、お願いできる？」

「もう終わってるわ。マヤ、青葉君にデータ流して」

了解です、と小さくマヤが返事が上がる。

オペレーター達のタイピング音が響き、端末の画面が連続して流れ続ける。

受け取ったデータに目を通した青葉が、そのまま戦自との折衝を開始した。

無言の室内に、時折爆音だけが遠く響く。ネルフによる無人攻撃だけでなく、戦自による攻撃の音が追加された。

目まぐるしく切り替わる映像の全てに目を通し、オペレーターの3人は情報を抜き取り、洗練させてゆく。

作業を続ける青葉の端末に連絡が入った。青葉は一瞬にして目を通し、戦自によるその情報を即座にまとめて日向に送った。

青葉の手によって視認性を上げた情報を、日向の戦術眼が解析する。

「有人機からの攻撃も効果有りません！」

落胆した冬月のため息が聞こえる。

有人機からの攻撃も効果無しと分かり、ミサトは覚悟を決めた。

後ろを振り返り、ゲンドウへと視線を合わせる。

「初号機を出します。よろしいですね」

「反対する理由はない。やりたまえ」

ゲンドウの熱を持たない、簡潔な返答を聞いて、ミサトは初号機へと通信をつなげた。
「シンジ君、出撃よ。今回の使徒は何の反応も無いから、まずは遠距離からスタートです。大型兵装ビルの陰から出すから、地上に着いたら即座に走って。何でもいいいから、奴のアクシオンを引き出して下さい」

『了解です！真っ直ぐ突っ込んで良いんですか？』

「いえ、斜めに左方向にお願い。防衛ビルとエヴァ射出口があるから、まずはそこ目指して滑り込んでね」

物怖じせずに突っ込もうとするシンジを抑えて目的地を示す。

必要なのは戦果ではなく、情報収集だ。データの一つもないと作戦を立てるところではない。

「エヴァ初号機、発進準備よろし！」

「エヴァ初号機、発進！」

日向の報告を聞き、ミサトは発進の号令を出した。

（シンジ君、どうか無事で帰ってきて）

そう祈った時だった。青葉が大声で報告を上げる。

「目標内部に高エネルギー反応！」

「なんですって！」

「円周部を加速、収束して行きます！」

まさか、とリツコの悲鳴がミサトの予感を後押しする。ミサトの思考が走った。

（攻撃？なら回避——ロック解除が先か！）

ならば、時間稼ぎを優先すべきとシンジへの通信に叫んだ。

「シンジ君、全力でガード！」

続き、日向の肩を叩く。声で伝える時間が惜しい。

「初号機のロック外して！シンジ君の判断に委ねます！」

初号機が地上に出現した瞬間、目標が光った。



ミサトの防御指示を聞いたシンジは、全力で初号機へと意識を向けた。

「初号機、ATフィールド！」

初号機が地上に到着した瞬間、青い使徒が光った。シンジは確認できないことだったが、司令部のモニタを焼きかねない程の光量を伴ったそれは一瞬で初号機まで伸びた。

使徒の光線が初号機の隠れていた大型ビルに直撃する。

大型の兵装ビルが、バターに直接炎を当てられたかの様に溶ける。1秒も掛からず

ビルを溶かした光線が、初号機を襲った。

超高熱の光線が、初号機が展開したATフィールドへと落ちる。

耳障りな、ATフィールドが効果を発揮する瞬間特有の音が響き、初号機の眼前が光り輝く。

「止まれ——！」

初号機を発射台に固定していたロックが外れる。シンジは、自由になった腕を胸の前で交差させ、腰を落として攻撃を受け止めた。

（火力が高すぎる！動くよ初号機！）

腰を落とした初号機が左に体重を傾ける。一度受け流そうと足を動かし、体を左に傾けた所でそれは来た。

逃がさないとばかりに使徒が再度光る。光線は倍の太さにまでなり、圧が増えた。

初号機のフィールドが抜かれるのは一瞬だった。甲高い音が響き、初号機の前で輝いていたオレンジの波紋が碎ける。やすやすとフィールドを貫いた光線が、初号機の右肩を捉えた。

ぶちり、と何かが千切れる感覚をシンジは得た。その後、一瞬遅れて激痛が右肩を襲う。

「わああ——！！？！！？」

シンジの絶叫がプラグ内に響き渡る。右肩からの激痛は、容易くシンジの意識を真っ白に染め上げた。

膝の力が抜け、崩れ落ちそうになる。だが、うつすらと残った意識が倒れこむのを抑え、初号機に膝立ちの体勢を取らせる。

『発射台落として！全パーツを爆破しても初号機の自重で落ちてくれるから、早く！』
『自壊装置作動！初号機、降下します！』

浮ついた感覚が、浮遊感に包まれる。視界が恐ろしい速度で落ちてゆき、青い空が遠のいて四角く区切られた所で、シンジの意識は遠のいていった。



蛍光灯に照らされた明るい室内に、10人前後の男女が数々の書類を手にして歩き回っている。

その中心部、大型のテーブルに上げられた地図と情報の目の前にミサトは立っていた。

「これまで採取したデータによりますと、目標は一定距離内の外敵を自動排除するものと推測されます」

「エヴァ狙撃からこつち、使徒は一気に活性化。エリア侵入と同時に荷粒子砲で100%狙い撃ちです。EVAによる近接戦闘は、いかにシンジ君と言えど危険過ぎます」

作戦部の一部、日向も所属する作戦課のメンバーがプリントアウトされた使徒の情報をミサトに手渡す。

「A・T・フィールドはどう?」

「健在です。相転移空間を肉眼で確認できるほど、強力なものが展開されています」

「誘導火砲、爆撃などの生半可な攻撃では、泣きを見るだけです。ネルフの全火力でも足りるかどうか」

ミサトの問いに日向、青葉が順に答えた。

「開発中のものを足しても足りないでしょうね。あのシンジ君の攻撃をくらい続けている使徒が、防御の手を抜くとは思えないわ。と、すると攻守ともにほぼパーペキ…まさに空中要塞ね」

ミサトは小さく嘆息する。指揮官が弱いところを見せたくはないが、使徒の持つ、あまりの理不尽な性能を見せつけられては弱気にもなる。

「今までの使徒と関係があると思いますか?」

「間違いなくね。そうでなければ、今までの戦自の攻撃で反応してるはずよ。一撃必殺の火力だけ用意して、敵と認識したエヴァが出てくるまで何もしないで温存した。何が

何でも初号機を倒す、っていう執念を感じるわね」

それで、とミサトは日向に報告の続きを促す。

「使徒のシールドは、現在目標はわれわれの直上、第3新東京市ゼロエリアに侵攻。直径17.5mの巨大シールドがジオフロント内、NERV本部に向かい穿孔中です。敵はここ、NERV本部へ直接、攻撃を仕掛けるつもりですね」

日向が報告と共に新しいプリントを寄越した。技術部から上がってきた報告では、明朝午前0時06分54秒にNERV本部へ到達予想と記載されている。

（後10時間足らずか。初号機は右腕が根元から断裂。リツコの話じゃ、武装ギブスで腕を固定すれば機体自体は戦えると言っていた。腕を失ってでも、機能中枢を守って次に繋げてくれたシンジ君に感謝ね）

時間制限が明確になり、暗くなつた空気の室内に、技術部から時間を見つけて参加してきたマヤが報告を繋ぐ。

「零号機の再起動自体に問題はありませんが、フィードバックにまだ誤差が残っています。実戦はまだ辛いかと」

「動けるのなら作戦に参加してもらおうわ。本人もやる気十分みたいだし」

ね、とミサトが声をかけた先。忙しく動き回る作戦部の邪魔にならない部屋の隅で、レイはミサトに強い視線を送っていた。

「問題ありません。碓君とは、約束しましたから」

「約束？」

ミサトがレイに抱いていた、儂げな雰囲気がこのレイにはなかった。司令の命令に忠実な少女ではなく、自らの意思を感じさせる声でレイは答える。

「碓君は司令を信じたいと言っていました。だから、エヴァで戦って結果を出します」

レイの言葉に、ミサトは軽く目を見開いた。捉えどころがないと思っていたパイロットの、初めて見せた自発的なやる気がミサトに檄を入れた。

「ええ、そうね。シンジ君を狙いすましてやってくれた仕返しをしてやりましょう。レイ、頼んだわよ」

敵は強大だが、こちらの士気は高い。今まで華やかな戦績を残したシンジと初号機の脱落は、ネルフに大きなプレッシャーをかけた。だが、ミサトや作戦部が得た感情は恐怖ではなく、怒りだ。

使徒にとって一番の脅威がエヴァなのはわかる。非難されるべきなのは戦場に子供を連れ込んだ自分達だということも。

しかし、まず最初にシンジを、子供を狙われて怒らずにいられるほどミサト以下作戦部は玉無しではなかった。よくもシンジをやりやがったな、と作戦部全体が気炎を上げている。

レイの静かな鼓吹は作戦部の熱気に更なる火をくべる事になり、作戦課の士気は最高潮になっている。物理的にも暑くなってきた室内を見回し、ミサトはいい空気だな、と満足する。

「そのシンジ君ですが、身体に異常はありません。神経パルスが0.8上昇していますが、許容範囲内です。起きてくれると良いのですが」

日向の不安要素をミサトは笑い飛ばした。

「あら、シンジ君は起きるわよ。主役は遅れて来る。でも、絶対に遅刻しないものよ」
敵シールド到達まで、後9時間55分。

「だから、私たちに出来る事をやりましょう。シンジ君が安心して作戦に参加できるように、彼が起きるまでに全部終わらせるわよ」



鉄で囲まれた巨大な空間に、騒々しく金属を打つ音色と、叫ぶよう張り上げられた声
が木霊する。

目の前に鎮座する狂気の兵器を見て、技術課のサングラスが唸り声をあげた。

「これが戦自研のプロト自走陽電子砲か。これをエヴァ用の狙撃銃に見立てて、日本中

の電力に耐えられるように改造する。浪漫をわかつてるねえ作戦部長殿は」

「だが、技術課題は山積みだ。戦自研サンの想定を遥かに上回る過負荷に耐えられるようにするだけでも手一杯なのに、狙撃砲にするなんてよ。プラモデルじゃねえんだぞ」

だがまあ、その無茶に応えてこそロボット技術屋つてもんだと禿頭が笑う。

「A. T. フィールドをも貫くエネルギー算出量は、最低1億8千万キロワット。エネルギー兵器特化の技術開発部第三課も精鋭揃いだ、手が足りねえ。俺はこつち回るから、そつちは頼んだぜ」

「初号機専用ギブス・急造陽電子パイルバンカー。シンジの思いつきが6時間で形になるなんてよ、アイツ運がいいよなあ。俺なんて企画通るまで半年かかんのによ」

手元の端末を操作してサンガラスが禿頭に背を向けた。ネルフで開発したポジトロْنَライフルを肩に固定し、破壊された腕に対するギブスへと改修する。だが、そのギブスは超至近距離で3発だけ使用できるという制約の代わりに、その3発だけはネルフで開発できる中で最高の火力を発揮する凶悪な武器でもある。

時間的に、そろそろポジトロْنَライフルが隣のケージに格納される頃だ。サンガラスが目を向けると、丁度オレンジ色のエヴァがゆつくりとポジトロْنَライフルを下ろしている所だった。

「二分一秒が惜しいからって、嬢ちゃんまで手伝ってくれてるんだ、おつちゃん頑張らね

えとな！」

作戦開始まで残り7時間。他のどの部署よりも早く、技術部の戦争が始まった。

「シンジ！お前が目を光らせるような凄えの作ってやる。だから元気に起きてくれよ、俺たちのヒーロー！」



シンジが目を開けると、真っ白な天井が瞳に映った。

「知ってる、気がする天井だ」

見た事がある。そういえば、エヴァに乗った後は、大体この天井を見ている。

「起きたのね」

ぼんやりとした頭を声の方に向ける。そこにいたのは銀髪の少女だった。

「ああ、綾波……」

声に力が入らない。少し寝すぎたようだ。

「明日、午前0時より発動される、ヤシマ作戦のスケジュールを伝えます」

赤い瞳がこちらを捉える。

「碓・綾波の両パイロットは、本日19：30、ケイジに集合。」

20:00初号機および零号機起動、五分後に発進。同30、二子山仮設基地到着。そこで、作戦の説明があります」

言葉と共に『ヤシマ作戦』と記されたしおりを手渡された。

（意外とアナログな手段好きなんだ）

起きぬけで、少しばかり気の抜けた感想を抱いたシンジはしおりに目を通す。

戦自から陽電子砲を、日本中から電力を借り受けて、長距離からの狙撃をするらしい。

「それで」

シンジが一通りしおりに目を通すまで待つていたレイは、一息吸い、こちらに目を合わせてきた。

「あなたは どうするの?」

感情の見えづらい瞳がシンジを映す。だが、確かな熱を持った瞳に、シンジは力強く笑って答えた。

「決まってる。やろう、綾波」

少しだけレイの無表情が崩れた。

決戦、第3新東京市（後）

夜の闇の中、二体の巨人が足元のテントの灯りに照らされていた。

右腕に不恰好なギブスを取り付け、両肩に追加バッテリーを背負った初号機と、今は何も装備していない零号機だ。

その巨人の足元、仮設テントの中に人影がある。作戦開始まで4時間を切り、張り詰めた空気に包まれたシンジとレイは、プラグスーツ姿でミサトと向かい合った。

ミサトは2人が作戦要項を記したしおりを開いたところを確認し、口を開いた。

「作戦としては単純よ。シンジ君が守って、レイが狙撃する。日本最高の火力を用意したわ。人類がやれるって所、見せて上げて頂戴」

ミサトの声に合わせて、日向の指が踊る。

ミーティングルームの壁に、使徒の位置、両エヴァの配置が表示された。

「シンジ君には前回の強化版のシールドを。レイにはポジットロンスナイパーライフルを装備してもらいます。これは先程、初号機の右腕が破損し、精密射撃が行えないため。

——いえ、ここでオブラートに包んでも意味は無いわね。シンク口率に差はあっても、レイがそれを覆せるほどに射撃技術に秀でているからです。異議はないわね？

それと、今回のエヴァの射撃拳動について、データを提供してくれたドイツのパイロットが衛星通信での面会を求めています。レイ、30分後に面会だから、覚えておらう」

「はー」

「作戦は第3段まであるわ。最初に、使徒の索敵範囲外からの狙撃。作戦成功のパターンの中で、最も可能性が高いのはこれよ。レイにはプレッシャーを与えて悪いけど、何よりも重要な攻撃がこれね。タイミングはこちらで指示するけど、もし使徒が先に撃ってきたら初号機で受け止めてもらいます」

レイに向いていたミサトの視線が、シンジに向いた。

「だから、第2段階になるという事は初号機は万全でなくなっているでしょう。分の悪い戦いになる」

「それでも、策はあるんですよ」

厳しい視線を、シンジは正面から受け止めた。

ミサトはひとつ頷いてから、説明を続ける。

「狙撃と同時に、エヴァ専用輸送飛行機が戦域に侵入します。同機は初号機背面に突撃。初号機とドッキングできれば良し、ダメでもフィールドで受け止めれば、輸送機の運動エネルギーによって一瞬だけほぼ超音速移動ができる計算です」

スクリーンにU4002-01と表示された飛行機の図案が、初号機を使徒に向けて押し出す。

「事前に調べた情報では、使徒のチャージタイムは8秒。それまでに、なんとしてもたどり着いて。使徒が照準行動を行ってから、射撃するまでのタイムは平均して0.3秒ありますから、初号機の機動性があれば合わせて8.3秒の間に一撃を与えることは不可能ではないはずよ」

使徒のマーカーへと突撃した初号機マーカーは、斜めに使徒マーカーを乗り越え、鋭角に曲がり直してから再度突撃する。

「初号機は陽動です。零号機の陽電子砲の再装填に必要な時間は20秒。8秒ごとに撃たれるとすれば、2発を覚悟しなければならぬわ。

でも、この時間をシンジ君が生存する事が、人類の生きる道になります。

陽動になるかわからないけど、無人航空兵器を混ぜた全戦力を使徒に向けます。この街、軍、ネルフ。全ての戦力があなたと共に使徒に決戦を挑みます。シンジ君が思ったことは全てやって。その為に何をしても良く、何をどう使ってもシンジ君に責は及びません。勝てなければ人類滅亡よ。必要なら零号機以外の全てを犠牲にしても構いません」

おっかないな、とシンジは震えた。この20秒の為に、きつと人が乗った戦闘機も来

るだろう。それすら必要なら投げつけて爆弾代わりにしてもいいとミサトは言っていた。

「作戦の第三段階はやはり、レイの狙撃です。というよりも、これでダメなら後は泥沼よ。使徒を倒すまで、ネルフと日本の戦力が1人残らず死ぬまで戦うしかないわ」

一億総特攻じゃないけど、派手にやってやりましょうとミサトは笑った。爽やかな笑顔が、シンジの恐怖を煽る。少なくともミサトは、本気でやるつもりだとシンジは思った。

「とは言え、最初の狙撃が、確率が一番高い勝ち方よ。リツコ達技術部が総出で準備してるから、今は彼らを信じましょう。では、解散！」

ミサトの声にて、日向以下作戦課が解散する。シンジとレイに頼んだ、や、俺たちも最大限サポートするから、一緒に頑張ろう、などと1人ずつが声を掛けつつ退室していく。

最後に残ったのは、ミサトだった。

「シンジ君、レイを守ってあげて。そしてレイ、あなたも、シンジ君を助けてあげて。使徒と同じフィールドに立ってるのはあなたたち2人だけなんだから。こちらからもサポートするけど、実際に戦うあなた達の判断を優先するわ」

先程までの厳しい雰囲気消した、ミサト本来の柔らかな声だった。

その優しさを感じる声に、シンジも同居人としての温度で答える。

「任せてください。綾波と零号機は、しっかり守り抜きます」

「了解です。碓君は死なせません」

シンジの声に追隨して、レイもはつきりとした言葉で答えた。

「うん。じゃあ、一丁目にモノ見せてやりましょう。じゃあ何か食べて元気になつて！ 救護課の娘達が差し入れ買ってきてたから、遊びに行くといいわよん」

最後に茶目つ気のある物言いで、ミサトが話を締めた。

少し明るくなったミサトに、シンジは最後に質問を投げた。

「そういえば、ドイツのパイロットってどんな人なんですか？」

それは国を越えて、人類を守る仲間のこと。まだ見ぬ仲間が気になり、あわよくばレイへの通信の席に同席させてもらおうとシンジは期待する。

「あ、気になる？ 惣流・アスカ・ラングレーって女の子だね。お人形みたいにかっわい子よ。向こうの了解が得られたら、シンジ君も同席してみる？」

まさかの大当たりを引いしまった。

「いえ、ちょっと興味はありますが、遠慮しておきます。まずは使徒に集中したいです」

その名前と美人だという情報に、余りにも嫌な予感がする。

そう？と聞き返すミサトに、シンジは重ねて遠慮した。



特務機関ネルフのドイツ支部。本部へ使徒の解析支援を行なっている情報管理課のブースの一つに茶色の髪を持つ美しい少女がいた。

「ハロー？ミサト、久しぶりね。そしてファーストチルドレン、アヤナミサン？私がセカンドチルドレン、惣流・アスカ・ラングレーよ。ええと、日本語だとどうも、つて言うんだっけ？」

アスカは会話用ヘッドセットを付けた状態でモニタに向かって話しかける。

『ええ久しぶりね。そして今回はありがとう、最近のアスカのウワサは聞いているわ。ドイツ最高のガンナーになったって聞いたわよ』

「まあねえ。ま、才能ってやつよ」

さらり、と賛辞を流し、アスカは言葉を続ける。

「喋りたいことは色々あるけど、またにするわよ。時間ないんでしょ？」

一息吸い、思考を固める。

「今回伝えたいことなんだけど、二号機というか、私の癖みたいなものよ。そつちでも調

整してらるだろうけど、それでも残るクセってあるからね」

端末に用意しておいたデータを開きつつ、

「エヴァの肩は人間と違うから、少し狙撃体勢が違うのよ。関節自体は柔らかいんだけど、変な力の入り方すると、撃つ事は出来ても発砲の衝撃で肩に小さなダメージが入るわ。だから——」

アスカは自分の知り得た限りの挙動を伝えて行く。事前に設定した30分の間に、早過ぎず、悠長でもないように内容を絞ったアドバイスを続ける。

零号機パイロットのレイは、エヴァのパイロットとしてはライバルだ。しかし、今使徒の目の前にいないアスカは、小さなプライドに拘らなかつた。

これで負けたら人類滅亡だということを理解している為でもある。しかし、

（こんな小さな事にこだわってるなんて、アイツに知られる方がムカつくのよ！）

だからアスカは親身になってレイにレクチャーを続けた。

30分で伝えられるように纏めた内容を大体伝え、時計を見る。事前に練習したとおりなら、あと5分残っているはずだ。

（あと4分。まあまあね）

予定通り、完璧に自分のノルマをこなしたアスカは、自分の仕事ぶりに満足しつつ、最後に伝えるべきことのために柔らかく微笑んだ。

「そんで最後のアドバイス。初号機のパイロットを信じていいわ。戦闘データを見たけど、あの初号機は要塞かなんかだと思いなさい。アレ、立ってる限りは何があってもアンタを守るわよ」

狙撃をする以上、一番の敵はプレッシャーだ。だからアスカは、異世界で学んだロボット戦闘の鉄則を伝える。巨大ロボは、信頼あいとゆうきと勇気で戦うものだ。

「だからアンタは、安心してトリガーを引きなさい。ビビらないでやれば、きつと勝てるわ」

『わかったわ。ありがとう、二号機パイロット』

こちらが笑顔を見せたのに、何も反応しない無表情をアスカは見つめる。少しカンに障るが、切羽詰まっているのだろうとアスカは思い直した。

「アスカよ、アスカ。まあ、師匠とか先生でも良いけど？じやあ、good luck」
レイと、彼女の後ろで手を振るミサトに小さく手を振り、通信を切る。

「あたしも日本行けないかなあ」

いつ来るとも分からない使徒の襲撃に怯え、たった一人で戦うプレッシャーがアスカに弱音を吐かせた。



蛍光灯の光に照らされた双子山に、午前零時を伝える時報が響く。

作戦開始の時間だ、と日向が気合を入れた瞬間、後ろで仁王立ちしている筈のミサトが口を開いた。

「レイ。日本とネルフの全力、あなたに預けるわ。作戦スタート！第一次、接続開始！」

ミサトの号令の下、日向を含めた各オペレーターが一斉に作業を開始する。

ミサトの直属の部下になるのは日向だ。自然、最初に作業を開始するのは日向の役割になる。

「第一から、第803管区まで、送電開始！」

ミサトの号令を、具体的な指示に変換する。ミサトがネルフ本部へ転属されてきてから、一年ほど繰り返し返してきた日向の仕事だ。

「電圧上昇中、加圧域へ」

「全冷却システム、出力最大」

「温度安定、問題なし！」

「陽電子流入、順調です」

通信越しに報告が上がり、計器の表す数字が一気に増える。メーターが跳ね上がり、情報管制をしていた青葉から、無言で準備完了のハンドサインが出た。

比喩表現ではなく、文字通りの意味で日本中のエネルギーがネルフの手に渡る。

「第二次、接続！」

『全加速器、運転開始』

『全電力、二子山増設変電所へ！第三次接続、問題なし！』

全ての準備が揃う。日向は振り返り、ミサトを見て頷く。

ミサトはモニタへ投げていた視線を一瞬だけ日向に向け、わずかに頷き返した。

「最終安全装置、解除！」

「撃鉄起こせ！」

『地球自転、および、重力の誤差修正、+0.0009。電圧、発射点まで、後0.2』

国中から集められた電力というエネルギーが、暴力の塊へと変換されてゆく。平和に使われていたエネルギーが使徒への殺意に置き換わるまでは、数十秒の時間を必要とした。

「第七次最終接続、全エネルギー、ポジトロンライフルへ！」

ネルフの手によって精錬された巨大なエネルギーが、ついに零号機の手に乗せられる。

その瞬間、待ち構えていたように使徒が反応した。

「目標に高エネルギー反応！」

マヤの報告に、ミストは飛びつかんばかりに反応した。

「来ると思ってたわ。シンジ君！」

『了解！ATフィールド、展開！』

モニターの中、闇に紛れていた紫の巨人が飛び出す。左手に盾を構え、腰を据えて待ち構える初号機の姿は、ギブスで固定された右腕以外、一度敗戦した事を感じさせないほどに雄大に見えた。

「使徒の砲撃、着弾します！」

「ポジトロンライフル、発射！」

仮設司令部の、全てのモニターが白に染まる。一瞬遅れて耳が潰れそうになるほどの轟音が響き、仮設司令部が揺れる。

強すぎる光と音に意識を持っていかれそうになる中、日向は特別に用意された端末の表示を確認する。

パターン青は、消えていなかった。くそ、と悪態をついた日向は、揺れる視界の中でエンターキーを押し込む。

ネルフから戦自へ、救援要請が発信された。



芦ノ湖の上空を、集団で旋回する影がある。生き物では到底真似できない高度と速度をもつて闇を切り裂く影は、最高速度でマツハ2を超え、満載されたミサイルを自由に発射できる機械の鳥だ。

現代の空を支配する、最強の兵器の乗り手は、眼下で光る巨大な結晶を見つめていた。「隊長ー。あの化け物、ミサイル効くんですかね」

『知らん。だが、目くらましにはなる。俺たちの任務はあの化け物を倒すことではなく、ネルフの秘密兵器の援護だ。朝倉、幾らでもぶっ放していいが、それだけは忘れるなよ』通信越しに釘を刺され、朝倉は首をすくめる。結晶体から視線を外して横にずらすと、遠近感が狂った大きさの鎧武者が山陰に横たわっていた。

「アレがネルフの秘密兵器か。巨大ロボットが本当にあるって、こんなにも現実感ないんだな」

時計を見れば、午前零時になるところだった。2体いる巨人のうち、オレンジ色の方に繋がった配線が光を放ち始める。

『ネルフが作戦を開始した！着弾確認後目標が健在ならば攻撃開始だ！』

隊長機から通信が入り、カウントダウンが流れる。

3、2、1と減る数がゼロになった瞬間、眼下の巨人と結晶体の両方から眩い光が発

せられた。

二つの光がお互いに向かつて走る。一瞬にして互いの敵に到着した光は、轟音を響かせながら破壊を撒き散らす。

「やった！当たった！」

ネルフの光は、間違いなく使徒に着弾した。その証拠に目標の結晶体は、上半分の一部を大きく削り取られている。

『いや、まだまだ！作戦成功の通信が来ていない——』

『コントロールより各機！ネルフからの攻撃要請だ。全兵装使用自由、繰り返す、オールウェポンフリー全兵装使用自由！味方の射線に注意して1秒でも多く持ちこたえろ！』

隊長機からの通信を遮り、本部からの命令が下る。自衛隊としては聞きたくない、しかし訓練を積み続けた身としては一度は聞いてみたいと考えていた通信だ。事前に作戦の危険度を聞いていた朝倉は、それでも全身の血液が沸き立つ感覚に襲われた。

「行くぜ行くぜ行くぜえ！一番槍は俺たちが貰った！」

音速以下での我慢飛行は終わりだ。朝倉は機体のアフターバーナーを叩き起こす。そして機体を操作して捻るように、機体の鼻先を眼下の結晶体へ向ける。

ネルフがどうやって上層部を説き伏せたか知らないが、今だけは感謝してやる。

紫の巨人が自分を追いかけるように走って来るのを視界の端で確認しつつ、ミサイル

のトリガーに指を掛ける。

「時間稼ぎだろうが何だろうが構うか！叩き落としてやるよ！」

翼の下に吊るしたミサイルに火が付く。片翼3本ずつ搭載されたミサイルを、朝倉は1発ずつ結晶体に向けて叩き込んだ。



使徒の攻撃力は身をもって知っている。だからシンジは、その全てを受け止めきれずとは思っていないかった。

「エヴァ初号機、無事です！」

使徒の攻撃は強力だが、発射してしまえばその後の調整は利かない。ならば、盾が保つ内に零号機ごと使徒の射線から外れてしまえば凌げる。

ミサトの立てた予測を元に、作戦部と技術部が共同で編み出した作戦は、見事に功を奏した。

『こちら零号機。ライフルも無事です！』

後ろに居るレイの声が通信に乗る。守るべき戦友の安全も確認できた。

内心で安堵の息を吐き、シンジは前を向く。

『作戦は第2段階へ移行！シンジ君、アタック！』

「行くぞおお——!!？」

左手に固定された盾を投げ捨てる。身軽になったシンジは、フィールドを全方向に展開しながら突っ込んだ。

『初号機、キャリアードッキング！』

日向のアナウンスに導かれ、シンジは夜の山を跳ぶ。戦自の戦闘機を目標にし、初号機が大きくジャンプする。初号機がジャンプの頂点に達した時、エヴァを覆い隠すほど大きな飛行機が初号機を押し抱いた。

初号機はその衝撃に逆らわずに加速する。山間のため、足場の悪い地面ではなく、抵抗のない空中を初号機は音速を超える速度で進み続ける。

眼前では、使徒へ向かって全方向から光が殺到して行くところだった。

ネルフや、戦自の所有する陸上戦力の全てが使徒へ向けて自慢の兵装を叩きつけるように発射してゆく。

花火が爆発するところを間近で見ると、幻想的にすら思える光へとシンジは突撃した。

『ネルフのパイロット！着弾勧告をします。3・2・1・今です！』

ネルフを介し、戦自から一方通行で開かれた通信からアナウンスが流れる。

気の強そうな女性のアナウンスとともに、使徒へ放たれた弾が届き、使徒を白く染め上げる。

『効果認められず！ネルフの特殊兵器が到着します。誤射に気をつけ、航空戦力は火力支援を！』

シンジは、既に使徒の目の前まで来ていた。レバーを引き、初号機とキャリアーを分離させる。

超低空を飛んでいたため、着地するのは一瞬だった。足の裏に来る衝撃を、膝を曲げることで相殺する。着地の衝撃で地面にめり込んだ足を走らせ、初号機は強引に軌道修正しながら走り出した。

「ポジトロンパイル起動！」

音声入力によって、両肩に装備された追加バッテリーから右腕のギブスへ莫大な電力が流れ込む。膨大なエネルギーを孕んだそれは、右腕を固定するギブスではなく、使徒を刺し殺す陽電子の杭打ち機となって輝いた。

「昼間のお礼だ！まずは一撃！」

第2ラウンド開始だ。そのゴング代りに、シンジはまず渾身の右ストレートをぶち込んだ。



悲鳴が響き渡る。人間どころか生物らしくなく、合成された音特有の響きを持つ音が戦域を満たした。

「これはまさか、使徒の悲鳴!?？」

ミサトの横で、ポジットロンライフルの調整を受け持っていたリツコが叫ぶ。

「へえ、悲鳴をあげられるようになったんだ。これって、進歩してるのかしらね」

初めて聞く使徒の声にミサトは反応する。加虐的な笑みがミサトの顔に浮かんだ。

「使徒の外周にエネルギー反応！」

「早すぎる！」

だが、その笑顔も一瞬後には凍りつくことになる。ネルフで算出した使徒のチャージは8秒。しかし、使徒のエネルギーの高鳴りは、8秒も掛からない速射を意味した。

(まだ上があつたなんて。あくまでも狙いはエヴァって事!?)

「全軍に到達! 第2射が来るわよ！」

盛大な一撃を叩き込んだ初号機が、使徒に向き直る。

「エネルギー増大、発射まで2・1・1！」

『着弾……今!』

マヤの射撃予測に被せるように、戦自からの通信が入る。使徒の射撃に合わせ、戦自の砲撃が使徒の外周部分に着弾した。

タイミング良く叩き込まれた砲撃の衝撃か、初号機を狙った使徒の光線は、僅かに狙いをそらして山肌を焼いた。

「今の、狙ったの!?!」

自動操縦による戦闘をメインに据えるネルフでは、考えられない精度だった。職人芸のような一撃に、ミサトは背筋が震える感覚を得る。

『戦自よりネルフへ。次弾は5秒後』

「こちらネルフ。感謝します」

ミサトはこれが音声通信であることに感謝した。そうでなければ、引きつった表情を見られてしまう所だ。

そして、この砲撃が効果を示したことは大きな意味を持つ。ダメージを与える事こそ出来はしなかったが、

（シンジ君が接近していてくれるから、使徒のフィールドも弱まっているのか）

だとすればチャンスだ。勝手に使徒のフィールド強度を高く見積もっていたが、初号機が弱体化させている今ならば、作戦時間を圧縮できる。

「ポジットロンライフルのチャージは80%で構わないから、急いで!!」

日向、マヤの行動は早かった。

確認の復唱も、何の反応も行わずに端末の操作を進める。

皆、戦自が稼いでくれた一撃分の時間が蜘蛛の糸だと理解していた。

モニターに映されたレイも、ミサトの命令を聞いて狙撃態勢を整える。

『零号機は狙わせない！行くよ初号機！』

初号機が使徒に肉薄する。プログレッツブナイフを投げつけながら走り、戦自のミサイル攻撃に合わせて2発目のポジットロンパイルを叩き込んでいる。

待ち望んだりロードが完了する。リツコとマヤの2人がキーボードを同時に叩いた。

「ライフルの充電完了よ！」

「誤差修正も完了です！」

二射目の準備は揃った。

だが、これで勝てると思ったミサトの予想はまたも覆される。

「目標、シールドと分離、移動します」

「照準誤差規定値を超えました。撃てません！」



疾走する初号機と共に、シンジは使徒へ向き直った。

下面から伸びたシールドを切り離し、低速ながら移動し始めた使徒を下から睨みつける。

『シンジ君、あいつを止めて！』

ミサトの声を聞き、シンジは使徒に張り付くように接近する。初号機との意思疎通も問題ない。シンジと初号機は、同族であるレイ／零号機を守るという目的を共有できていた。

（今なら、鉄壁が使えるかもしれない）

今までの初号機は、自分と同格の存在を使徒しか知らなかった。

その為に、初号機には守ると言う概念がうまく理解できていなかった。より正確に言えば、身を守ることは理解できても、シンジの他人を守ると言う感覚を理解出来ていなかった。

だが、今は違う。零号機と言う、味方であり、上手く動くことも出来ない同族を得てから初号機の意識は変わった。

自分ではないエヴァンゲリオンに思いを巡らせ、戦う個体として、弱い個体を護ろうとしている。

それは生き物ならば自然な感情で、その感情を手に入れることを人は成長と呼ぶ。

失いたくないと言う恐怖に、身を呈して戦うことで抗う。シンジの最も強い感情に、初号機が小さく共感してくれた事をシンジは感じた。

これでラストだと、シンジは小さく呟く。

「ポジトロン・パイル・起動！」

最後の電力が右腕に流れる。内蔵するエネルギーをすべて失った両肩のバッテリーはその場に投棄され、初号機は輝く右腕一本だけを抱えて使徒へと躍り掛かった。

使徒は動きつつも、今までに比べると弱い光線を放つ。チャージを忘れ、回数を増やした射撃の前に戦自の戦闘機が墜ちる。初号機にも光線が飛んでくるが、シンジは左腕を突き出すことで盾の代わりとした。

激痛が左半身を焼く。しかし、シンジは右腕を守り通そうと、更に半身になって走った。急造の兵器のため、負荷に耐えられずに焼け始めたパイルが有るからこそ、初号機は使徒の注意を引いておける。これを失えば零号機の狙撃が露見し、彼女を危険に晒す。

だからシンジと初号機は体を蝕む痛みを無視して走った。レイを、零号機を守ると意識を同調し、痛みによって分泌されたアドレナリンに酔って意識が沸騰する。

——【鉄壁】——

それは、シンジにとって守りの要となるサイキック。一時的にサイキックによって防

御能力を増やし、ダメージを軽減する。鋼の要塞として戦ったシンジにとって、ある意味熱血すら超える意味を持つ能力。

そのサイキックと、初号機の持つATフィールドとの相性は言うに及ばず。【鉄壁】を得たシンジと初号機は、この世界において最も堅牢な守護者となる。

シンジと心を通わせた初号機のフィールド強度が、使徒の火力を上回った。

突き出した左手にオレンジ色の結界を発生させる。

「これで終わりだあー！」

左手のフィールドが使徒のフィールドと干渉する。強い手応えを持つそれを、シンジは大きく手を広げて掴んだ。

引き剥がそうと前に進む使徒を、シンジは必死の形相で押さえつける。

使徒の外周部が二度、三度と輝き、初号機の腹を短い光線で殴打する。内臓が込み上げるような不快感がシンジを襲い、嘔吐させようとシンジの腹をかき乱す。

だが、それが限界だった。内側に響くダメージがあるだけで、初号機の機能は衰えない。

「パイル・発射！」

右腕に残された最後のエネルギーが使徒を捉えた。

急造ゆえに作り込みが甘かった機関が赤熱化し、自身の熱によって融解しながらも機

能する。

叩き込んだエネルギーごと、差し込むように右腕を突き出す。右腕が砕けて行く感触に、シンジは吐き気を覚える。

だが、初号機の右腕と引き換えに放った攻撃は、使徒をその場に？ぎ止める事に成功する。

「綾波——!!」

シンジの叫びが、電波に乗る前にレイは答えた。

「発射しますー!」

戦自から借り受け、ネルフで改修し、日本中の電力を託された陽電子砲が唸りを上げる。

余りにも多な電力を流し込まれた砲身が、身を振るように振動した。

一度使用した事によって劣化した部品が異音を発し、重なった異音が悲鳴となってレイの耳に響く。

そして、陽電子砲が弾ける音と共に、光が夜の闇を切り裂いた。

砲撃となった陽電子が空気中の電子を吹き飛ばし、使徒に食らいつく。

零号機の放った光は、使徒の中心を捉えて消し飛ばし、それでも止まる事なく夜の空を駆け上がった。



地上に炎の花が咲く。それは、エヴァンゲリオンを包み込むほどに大輪の花だった。使徒が倒れた事を示す爆発。一瞬で咲き誇った炎の中に、一つの影がある。

煙を裂き、炎を踏み越えて姿を現したのは初号機だった。

表面装甲の殆どを溶かし、爛れてしまった鎧を着た巨人が人の灯りの許へ帰る。

炎の中から帰還した初号機を、零号機が出迎えた。零号機が近寄って来た所で、膝から崩れ落ちるように倒れかけた初号機を零号機が支える。

初号機のエントリープラグに、零号機からの通信ウインドウが開く。

「碓君」

務めを果たしたレイが、シンジに宣言する。

「これで、信じてくれる?」

それは、零号機の起動実験の前に交わされた約束。シンジがゲンドウを信じるために、レイは結果を出した。

「うん、信じるよ。ありがとう」

疲れ切ったシンジは、それでもレイに笑いかけた。

「ねえ、綾波。さっきの病室でも思ったんだけどさ」

ああ、これもナンパとか言われるのかなあと胸の中で嘆息し、シンジは続ける。

「綾波の笑った顔って、綺麗だと思うよ」

驚いたように笑みを消し、きよとんとした顔になるレイを見ながら、シンジは意識を失った。

戦友襲来／アスカストライク（前）

巨大な地下空間に、騒々しい作業音が跳ね返る。大量の作業音を混ぜ込んだそれは、一定のリズムを持っているために音楽のように聞こえた。

「あーあ、派手にぶっ壊れちまってまあ」

技術課の二人組の前に、巨人が横たわっている。結晶型の使徒との激戦を越え、ほとんどの装甲と右腕を取り外された初号機だ。

二つの視線が、初号機の頭部を見る。頭部の装甲だけは傷が浅いが、それでも大量の傷が付いた装甲をそのままにするわけにもいかず、全ての装甲板は交換する事になっていた。

「でも、よくシンジを守ってくれた。ありがとうよ」

脅威を打倒し、パイロットも守りきった初号機には感謝しかない。赤木リツコ率いる技術部の全職員は、目下初号機の修理と改修作業に全力を注いでいた。

幸いにも零号機にダメージは無く、使徒の強襲があつたとしても対応できる。その為に、時間的な余裕の出来た初号機には少し時間のかかる改修が施される予定だ。前腕部と頭部の装甲増加、接近戦用装備を取り付けるハードポイントの追加などの企画が同時

に進む事になってゐる。

「赤木博士！こつちです！」

禿頭の視界にリツコの姿が入る。書類を片手に持ち、軽く周囲に視線をやつていた彼女は、技術課の2人を確認して近づいて来た。

「ご苦勞様です。司令から許可をもらつて来ましたから、確認を。予算内なら内蔵型口ケットを意識した設計も認めるとの事です」

言葉と共にリツコが差し出して来た書類に禿頭が目を通す。予算はそう多く下りなかつたが、その分裁量は多めに与えるという旨が記されていた。

（ありがてえ話だ。少ない予算やり繰りすんのが得意だつて、わかつてくれてんだな）

いつまでも敬語で話す自分らの上司に改めて感謝する。この有能な上司は、どんな魔法を使つているのだから、上の許可をもぎ取るのが恐ろしく上手いのだ。特務機関とはいへお役所勤めであるはずのネルフが、エヴァなどというSF兵器を運用できているのも、この有能な技術部長が辣腕を振るつてゐる為だろう。

「さすがは博士だ。エヴァだけじゃなく、司令の扱いも上手いつてんだから、恐れ入ります。そういや、今回の計画に博士の企画は入つてませんでしたが、どうされたので？」
「扱いが上手いだなんて、そんな。司令に近寄りがたいのは分かりますが、理性的な方です。必要な事のためには努力を惜しまずに手助けしてくれます」

少し頬を染め、謙遜交じりに司令を褒めるリツコを見て禿頭が内心でため息を吐く。
（男の趣味はそんなに良くねえみたいだなあ）

禿頭の内心を知るはずもないリツコは、そのまま話を続けた。

「まだ私の企画を通すには情報が足りないんです。ATフィールドの展開を補助する新型装備を研究しているのですが、初号機だけのデータだと不安が残りますから」

「なるほど。それで今回は見送ろうと」

「ええ。実戦を越えたとはいえ、まだ零号機はフィールド実験すらしていません。ですがATフィールドの展開に成功した天才が来てくれるみたいですから、彼女たちのデータも参考にしようと思ひまして」

天才が多い職場だよなあと禿頭は感慨にふける。

話に出た、日本風の名前を持ったドイツのパイロットは禿頭も知っている。幼い頃からエヴァに関わり、常に最高の結果を出し続けるドイツの秘蔵っ子。

どんなエリートかと思いきや、半月前に出した趣味全開で火力ロマンのガトリングミサイルの企画にすら興味を示して、シミュレーションに付き合ってくれるだけの余裕もある。とはいえ、これは彼女の銃器趣味に合っただけだと読んでいるが。

（シンジと正反対みたいな戦い方のパイロットさんなんだよなあ）

シンジが愚直に前に出て、勇気と根性で勝利をもぎ取る泥臭いタイプのパイロットだ

とすると、惣流・アスカ・ラングレーは的確に距離を取り、多種多様の装備を綺麗に使いこなして戦う天才肌だ。戦闘理論が噛み合うはずもない。技術屋としては最高のパイロットだが、シンジを中心に輪が出来つつある本部の人間としては、これからのパイロット同士のやりとりに不安が募る。

どうか仲良くしてくれよ、と祈る禿頭の内心を察したのか、隣で書類を興味深そうにチラ見していたサンダラスが呟いた。

「今頃、船の上ですか。迎えに行つたシンジと喧嘩してなきや良いんですけどねえ」



大海原を渡る風を、シンジは全身で受けていた。

潮の匂いを感じさせるそれに身を任せ、目を閉じる。海を行く鳥の声が耳に響いた。

(なんか、いいなあ、こういうの)

シンジは揺れる体と耳に聞こえる音を楽しみ、安らいだ感覚を得る。

だが、その静寂を楽しめたのは一瞬だ。彼が立っている場所を思えば、一瞬だけでも海の静けさと安らぎを感じ取れたのは奇跡とも言える。それこそ、ロボット戦闘で培った技術を使ってまで感じ取つた一瞬だった。

シンジは今、国連所属の空母の上に居た。

「おーいシンジい、凄いのうこのでつかい船！海釣りできんかのうー！」

「感激だよ碇！まさかこんな経験ができるなんて！マジありがとうー！」

二号機とそのパイロットの出迎えの為に海へ出ると、ミサトから伝えられたのは2日前。この場にトウジとケンスケが居るのは、丁度休日にあたった日程を確認したミサトが軽く言い放ったお誘いが原因だ。

「2人とも、英語わかんないのに暴れるなよ！通訳して謝るの僕なんだからね！」

朝イチでヘリに乗り込んだシンジは、せっかくの静寂を打ち消した声に少し苛つきながら返事をする。せっかくの平和なのに、と内心毒を吐くシンジに、余裕が無いのには理由があった。

惣流・アスカ・ラングレーと呼ばれる少女。名前からして不吉さを感じて居たが、見目麗しく、天才肌で、プライドが高いとの修飾が付けば間違えようが無い。

問題は、そのアスカがどんなアスカか、だ。

シンジと出会ったことが無いアスカなら良い。喝采ものだとすら思う。遠い世界にいるアスカの無事を祈りながら、この世界のアスカと新しく友情を築いていけばいい。カンニングのような行為だが、良くも悪くもクセの強い性格は知っている。多分、そんなに苦労はないだろう。

不味い^{マズ}なのは、今から会うアスカがシンジを知っている場合だ。

(正直、最悪としか言いようがない)

一度は会いたいと願ったが、それは一度二度の話だ。継続してまた戦友として戦うなど考えたくもない。なにせ

(僕の片思いを知ってるアスカに、ミサトさんと一緒に住んでることを知られたらからかわれるに決まってるじゃないか——！)

異世界で最もシンジに近かったアスカは、シンジの事を知りすぎている。好みの食べ物から音楽の趣味、戦闘における呼吸だけではない。

一年間を共にした2人は、生活のちよつとした仕草が示す感情から、お互い異性の趣味(驚くべきことに、両方とも年上趣味だった為にこの話は禁句となった)まで知っているのだ。

当時、シンジは先代パンチャーパイロットである兄貴分の恋人へ横恋慕していた。決して叶わないとは知っていたが、シンジの心が最も弱っていた時に寄り添ってくれた女性への思いは、それでも捨てきれなかったのだ。

アスカ自身も元の世界に思うところがあるらしく、当時はこの話に触れることは無かったのだが。

(アスカはカンがいい。ミサトさんがあの人に似ていることなんて、一目で気がつく。

もう祈るしかないよ——！）」

シンジの悪い予感によく当たる。それで命を拾ったこともある為に、自分の感覚には絶対の信頼を置いている。

だが、シンジはその絶対の信頼が崩れることを心から祈った。結論から言うと、シンジの祈りはまったくの無駄となる。



「アスカ、葛城達が着いたみたいだぞ」

控えめのノックの後、小さく扉を開いた男性、加持リョウジの声が響く。

年齢的には子供である自分の事を、一人の女性として扱ってくれる加持にアスカは明るく返事をした。

「はい。準備はできていますよ加持さん。行きましょ行きましょ」

笑顔は明るく、人懐っこく。黄色のワンピースに身を包んだアスカは加持に渾身の笑顔を見せつけながら、シンジをどう煙に巻くかを考えていた。

（最初は思いつきり他人の振りをすれば大丈夫かしら。流石のシンジだって、露骨にや

れば気を回すでしょ)

あれでシンジは気遣いが出来る人間だ。それが出来るようになるまで、遠慮なく蹴り飛ばし続けたので当然といえは当然だが、それでも一定の信頼はある。

まあ大丈夫でしょうと一人考えていると、ミサト達が居るはずの甲板が近づいてきた。

「わるいアスカ、ちょっと俺忘れモン取り行つてくるわ。後で合流しような」

もう少しで甲板に着くというところで、加持が別れを切り出してきた。少し疑問に思いつつも、アスカはそれを受け入れて一人で甲板に向かう。

カーキ色の輸送ヘリは甲板に到着しており、アスカの目は長身の女性と、それに引率された同年代の男子達を確認する。

(なんか知らないのまで交じってるんだけど。何アレ?)

気弱な少年の皮をかぶった元戦友は分かる。エヴァ初号機のパイロットをしているシンジが、わざわざ守護している都市を離れた理由は分からないが、丁寧に出迎えに来てくれたことには嬉しさがある。

(太平洋艦隊の旗艦にジャージで乗り込んでくるバカに、明らかにオタクの二人組み。エヴァ関係者だとは思えないから、シンジの取り巻きかしら?)

まあ、気にする必要は無いだろうと無視を決め込む。まずはシンジだ。

「ハロー、ミサト。こうやって会うのは久しぶりね。元気してた？」

「まあね、元気よ、元気。アスカも背、伸びたんじゃない？この前の作戦は助かったわ。心強い味方が来てくれて、本当にうれしい」

軽く挨拶し、シンジを含めた3人を見渡す。チルドレンの情報は分厚いセキュリティに守られているので、今のアスカはシンジの姿を知らないことになっている。

「で、どれが噂の最終兵器さん？」

「彼よ。何、アスカもシンジ君に興味津々ね？」

ミサトがシンジの肩に手を置く。

「エヴァ初号機パイロット、碓シンジです。よろしく」

そう挨拶し、手を差し出してきたシンジの手を握る。力強い手は、相変わらずのようだ。

「エヴァンゲリオン式号機パイロット、惣流・アスカ・ラングレーよ。本部の守り、ご苦労様。私が出来たからにはもう安心していいわ。促成栽培のパイロットじゃなく、しっかりと訓練をつんだあたしが使徒を倒してあげるから」

少し威圧的に挨拶する。シンジ以外に初対面じゃないと知られると説明できないし、ドイツのエリートがシンジをそう簡単に認めるのもおかしい話だ。昔の自分はどう考えていたかを思い出しながら、アスカはドイツのエリートを演じた。

「僕も精一杯がんばるよ。でもエヴァの運用は難しいから、分からないところがあつたら教えてくれると嬉しいな」

あからさまにホツとした雰囲気でこちらを持ち上げるシンジに、アスカは違和感を覚える。腹芸が苦手なシンジにしてはうまい返しだが、こう、流れるように自分を持ち上げてくる理由が分からない。

（まさかコイツ、私のことあつちとは別人だと思ってるわけ？）

確かに、そうなるように誘導したのはアスカ自身だ。だが、ミサト達だけでなく、この戦友までアスカの猫かぶりに気付かないのは何のつもりだ。

（なるほどなるほど？じゃあ無敵のシンジ様は、中二の女の子ぐらい簡単に手玉に取れると思っているわけね）

シンジの考えは分かった。そして、これは丁寧に締め上げる必要があるわね、とアスカは内心でシンジの処刑を決める。具体的には、ミサトとよく似たあの人の封印を解いてもいいだろうと協定違反の最終兵器に思いを馳せる。

「ええ。もちろん良いわ。これから艦長のところに挨拶に行くんでしよう？連れて行ってあげるから感謝しなさい」

にこやかに笑いながら、握手した手を懐かしい手順で握りなおす。中指と薬指だけを二回握る、独特の合図。

本来はお互いの健闘をたたえる合図を受けて、目の前のシンジは一瞬にして真っ青になる。

「さあ行きましょ？あなたの話も聞かせてほしいわ。時間は、結構あるみたいだしね？」
シンジの顔がおかしくて、風に乗って広がったスカートを左手で押さえたアスカはもう一度シンジに笑いかけた。

さあ、なんで青い顔を白くしているのか、たっぷり聞かせてもらおうとしよう。



艦隊旗艦・オーバー・ザ・レインボウのブリッジにて、ネルフと国連の仲の悪さを表すようにミサトと艦長が丁々発止のやり取りをする。

一通りの伝達を終え、ミサトがブリッジを去る。ミサトと邪魔な二人と別れるタイミングを見計らっていたアスカは、ブリッジの扉が閉まった瞬間にシンジの手を取って駆け出した。

ごめん、と一言ミサトに謝りを入れてそのままシンジの手を引くアスカを、シンジは戦慄と共に眺める。

（終わった。何が終わるのかは分からないけど、生き残るんだ僕——！）

精神はもはや降伏しているとはいえ、シンジもパイロットとして体は作つてある。手を引きながら、かなりの速度で走るアスカにシンジは身体的には余裕を持つて付いていった。

アスカの疾走はすぐに終わり、狭い個室にシンジは連れ込まれる。

短期とはいえ滞在する彼女に割り当てられた部屋のように、部屋の隅にはアスカの私物と思われるポストンバッグや明るい色彩の服が散乱している。

何も考えずに視線を回したシンジは、女性物の下着が視界に入った気がした瞬間に目を逸らした。

「さて、バカシンジ。私が誰か分かるわよね？」

逸らした視線の先に、断頭台のような質問を投げってくる美少女が居る。嫌な見慣れ方をしたその少女の顔を、シンジは視界に入れる。

「まさか、本当にアスカとまた会えるなんて。久しぶりだね——ツツ！」

腹に一撃が入る。覚悟をしていたが、重い一撃を食らったシンジは、脂汗をにじませてアスカに笑いかけた。

「その、なんで突然僕は殴られてるんでしょうか……？」

「アラ、わかんない？ おつかしいわねえ。碇シンジともあろう人が、戦友の顔を見忘れた拳句になんでその戦友が怒ってるかもわからないんだ？」

無駄に綺麗なアスカの笑顔を見て、シンジの顔が引きつる。アスカは明け透けに感情を伝えてくるタイプで、怒っているときは素直に怒ってくるのが普通だ。

それを、わざわざ笑うなんて面倒な手順を踏んでいるという事がシンジの恐怖を煽る。

（まずい。最高のキレかただ。なんで怒ってるかは分からないけど、これは鉄壁でも耐えられない奴——！）

「あんたが！私のことを忘れたみたいな反応するからでしょ！次やつたら二度と許さないから覚悟しなさい！」

腹に二度目の衝撃が来る。感情に任せた一撃ではなく、足腰をふんだんに使った一撃がシンジを襲う。

（痛ったー！）

体が、くの字に折れ曲がる。自然と頭を下げることになったシンジは、そのままアスカに謝る事にした。

「ごめん。その、アスカが僕を知ってるアスカなのか、分からなかったんだ。忘れたわけじゃない」

殴られたからではなく、謝罪の証として頭を下げる。元々初対面を装ったアスカが怒るのは少し理不尽な気がしたシンジだが、少しだけ震えている足を見て納得する。

こういうときに悪者になるのが男の器だと、誰かが教えてくれたな、とシンジは思い返した。

「もういいわよ。一発殴ったからこれでチャラにしてあげる。で、なんでエヴァなんかに乗ってるのよ。アンタ、ロボットなんか関係ないって昔言わなかったっけ？」

「僕も初めは驚いたんだよ。最初の黒いヤツが襲ってきた日に呼び出されててさ。行き先も知らされずに連れてこられて初めてネルフを知ったくらいなんだ」

顔を上げると、懐かしいアスカの顔に戻っていた。勝気で、自信にあふれたアスカがシンジの前に居た。

「それって、初号機が初起動した日よね？」

「そうなの？」

「公式発表ならね。って、アンタまた唐突に機体に出会って戦ったの!」

驚いた、というよりも信じられないものを見る目で見られた。

「まあ、それはもう良いわ。アンタを同じ人間だと思おうと頭痛くなってくるし。本当に何なのよこの人間要塞。人の努力を何だと思ってるわけ？」

段々とセルフで怒りのボルテージを上げていくアスカが導火線に火のついた火薬庫に見える。爆発したときに巻き込まれないよう、シンジは一步下がった。

「なるほどね。だから最初はパンチャーと同じ動きだったわけか。何も知らない基地な

んで、アンタにとっちゃ守るべき弱者だもんね」

そこでアスカは息を吐いた。もろもろの感情を乗せたそれを空中に散らし、アスカはシンジを見る。

「じゃあお互いの情報交換は後にするとして。シンジ、アンタこれ見ておきなさい。私の戦闘データの映像詰めてあるから、絶対にすぐ見ること。それ見ておけば、間違つて私のことを知ってる風吹かせても、言い訳できるわ」

「了解。アスカは、僕のデータ見なくて良いの？」

「私は大丈夫よ。その、使徒に関わるから初号機のデータは見れたし。あの動きを見ればアンタだつて分かったから、結構見返したし」

少し顔を赤らめたアスカがそっぽを向いた。

「ほら、じゃあ食堂に戻るわよ！加持さんを待たせてるから、さっさと帰んのもシンジ！」

「誰だよ加持さんって！アスカの保護者の人？」

「うるっさいわねえ、すぐ会えるわよ！アンタなんかより、ずつとかつこいい人なの！アスカが顔を赤くして叫んだ瞬間、それは来た。

突き上げるような衝撃と共に、遠くに爆音が響く。

「水中衝撃波!……爆発も近かった」

「もしかして」

「私はエヴァのどこに行くわ！シンジはミサトに連絡をお願い！」

「わかった！」

アスカがバッグを開き、プラグスーツを持ち出す。気風よく脱ぎだしたアスカを尻目に、シンジは部屋を飛び出した。

嫌な感覚がシンジとアスカを襲う。敵を認めないまま、2人は確信していた。

使徒が来たのだ。

戦友襲来／アスカストライク（後）

船の通路は狭い。海に浮かび、戦闘能力を保持する戦闘船舶は尚のことだ。

セカンドインパクトによって資源を失う前に建造された、オーパーツとも言えるオーバー・ザ・レインボーもその例にもれない。

自然、戦闘の気配を感じてにわかに慌ただしくなった船内は体格の良い男達によってすぐさま混雑し始めた。

それでも熟練の連携によって流れ続ける人の流れに乗って、シンジは男性としては小柄な体を走らせる。

（使徒が相手なら、ネルフは国家所属の全組織に優先して対処する特権を持っている。でも、太平洋艦隊程の大組織が相手だ。恐らく、ミスアさんはハードな交渉でかかりきりになる）

今、この場にはミスアの右腕である日向がいない。エヴァンゲリオンの運用をするのに、パイロットをサポートできる手が足りていなかった。

だからシンジは走る。大局的な視点をもって戦場を把握するミスアは、アスカの戦闘思考の速度についていけない。エヴァを知り、適切な指示が出せる存在はシンジしかい

ないのだ。一刻も早く、パイロットの意思と指揮官の意識を繋げなければと、シンジは飛び込むようにブリッジまで走った。

「ネルフです。水中の敵に対しての情報の開示をお願いします。ネルフ側からの情報はこちらに—」

「戦闘中だ！見学者の相手をしている場合は——」

シンジの走る先では、もうミサトと艦長の話は始まっていた。帽子を目深に被った艦長が、書類を手にしたミサトと息を切らせて走って来たシンジを見る。

本来守るべき子供の姿を目にした為か、ミサトに対して怒鳴った艦長が数秒間動きを止めた。その数秒で本来の冷静さと忍耐力を取り戻した艦長は安心させるようにシンジに微笑むと、ミサトへと向き直る。

「——いや、失礼した。情報が欲しい。君たちの入室を許可しよう」

ありがとうございませう、と声を張りミサトが入室する。幾多の戦いでシンジを支え続ける颯爽とした姿だった。

その後ろ姿を見つつ、シンジも真似をして入室する。シンジの視界で手が振られた。後ろ手にVサインを出したミサトを見てシンジは安心する。どうやらこれで正解らしい。

「水中を動く敵性体は、我々を超える速度で動いている。まるで曲芸だ」

「現行の兵器ではあり得ませんね。ですが使徒であるなら納得できます」

ミサトが、二度目に現れた使徒の写真を持ち出す。

「この使徒は、これだけの巨体で浮遊能力を持っています。使徒は個体の形態差が大きく、共通点はほぼありませんが、必ず何かしらの形で物理法則を超えます。水中での高機動もそれかと」

ミサトの提言を聞き、艦長は顎に手をやり、考え込む。

「シンジ君？」

はい、と答えるシンジを見ずにミサトが問う。

「アスカはどこに？」

「プラグスーツに着替えて待機しています。士気は十分です」

アスカらしいわ、と苦笑する声が聞こえた。シンジも内心で頷く。いつ、どんな敵が来ても強気で動けるのがアスカの強みだ。意識で前に出て仲間を引っ張り、背中を守って安心を与える。アスカは、そんな勝利の女神だった。

「艦長殿。ネルフの権限によつて、パイロットの二号機までの移動に協力を要請いたします。使徒を倒すには二号機を起動させる他ありません」

「やむをえんか。ヘリを出す。誰か彼女に連絡をつけろ！」

ピピッ、とミサトの胸から電子音が鳴った。鳴り出した端末を耳に当て、ミサトは――

つ頷く。

「ご心配なく。ウチの者から連絡がありました。あとは発進許可を頂ければ飛べます」
シンジの目が甲板で動き出すへりを捉えた。真つ赤な装いに身を包んだアスカを男性がエスコートしている。あれがアスカの言っていた加持さんかと、シンジは当たりをつけた。

アスカがへりに乗り込み、艦長の横にいる男性が親指を立てる。

艦長の張りのあるGOサインと共にアスカを乗せたへりが空に舞った。



ネルフ本部・食堂。明るく照らされた室内の片隅で、銀髪の少女が食事をとっていた。その向かいに座った女性、伊吹マヤが眼前の少女を盗み見る。

相変わらず無表情に野菜のサラダを食べ続けるレイは、人形じみた無機質さを持つていた。

その硬質の雰囲気当てられ、居心地の悪さを感じたマヤは、意を決してレイに話しかける。

「さつき、太平洋艦隊が使徒と接触したって報告が来たわ。零号機は待機命令が出てる

から、レイはこのままでいて」

「わかりました」

言葉少なくレイが答えた。最後の一欠片を口に運び、今までと変わらない調子で食事を終える。

その落ち着いた様子を見ながら、マヤは不安を口にした。

「シンジ君、大丈夫かな」

「大丈夫です」

口に出し、あ、と後悔した瞬間に返事が来た。マヤはあまりに早く返された返答と、それを成したのが目の前の少女であることに驚く。

「あちらには惣流さんがいます」

惣流さん？とマヤは脳内で検索をかける。今日来日するはずの、エヴァ式号機パイロットの少女がヒットした。そして同時に、マヤの中に新しい驚きが生まれる。

初号機パイロットのシンジとは少し距離が縮まったと感じていたが、ドイツのパイロットとまで交友を広げていたとは思わなかった。

「仲、良いの？」

幸い、この食堂はネルフの中心部に位置している為に発令所までも遠くない。非常呼集だけに気をつけてマヤはレイとの会話を続行した。

司令以外には仲のいい所を見せなかったレイと話せるチャンスだ。マヤは、自分の好奇心に素直になることにした。

「ヤシマ作戦の時に通信で連絡を。その後、定期的に会話しています」

「そうなんだ！ねえ、アスカちゃんって、どんな子なの？」

「戦っているときの碇くんと似ています。感情が大きくて、自信家です。でも、よく気にかけて来ます」

いい子なんだね、とマヤは相槌を打った。どうやらパイロット同士は仲良くやれているらしい。感情が薄いと思つて居たが、それは勘違いだったようだ。分かりづらいが、しっかりとレイがアスカに親しみを持っているのを感じる。きつと、レイの感情を引き出せるようないい子が友達になったんだな、とマヤは小さく感動した。

（青春だなあ）

視線が優しくなっていくのが自分でも分かった。ヤシマ作戦から一ヶ月。新しい友人を得た年頃の少女が変わるには、十分な時間だ。

視線の先、感慨深げに見てしまったこちらを伺うようにレイが小首を傾げる。

「どうしましたか？」

「あ、気にしないで。なんでもないから」

慌てて誤魔化したマヤは、そのまま最初の質問を、形を変えて問いかけた。まだ使徒

と戦ったことがないアスカが心配ではないのかと。

「葛城一尉と碓君が行つてると聞きました。なら、大丈夫です」

レイが小さく息を吸う。無機物めいた表情に、うつすらと感情が浮かんだ。

「碓君と惣流さんは良く似ています。葛城一尉と、惣流さんと碓君は何故か、倒れたところが想像出来ません」

笑みと呼ぶには薄い表情だが無表情ではない。形容しがたいほど薄く笑みを浮かべて、レイは続けた。

そのレイの言葉に、ふとマヤは思い出していた。それは戦闘記録を確認していた日向の言葉で、

「初号機は、敵を前に膝を屈したことが一度もないんだ。もちろん、彼の戦闘訓練でそんな内容は一つもありはしない。なのに彼が膝をつきもしないのは、プライドだけじゃない何かを感じるよ。彼は、他人の期待を一身に背負うことを理解してしまってる」

シンジの孤独さを語るものだった。だからマヤは心の中で誰かに助けを求め。

（誰か、シンジ君を助けてあげてください）

たった一人で人類を背負う少年と、一緒の場所に立って欲しいと。



「システム、オールグリーン。シンク口開始します！」

狭いエントリープラグ内に、少女の澆刺とした声が響く。

式号機の体動をフィードバックし、小さく手応えを返してくるコントロールレバーを握りながらアスカは唇を舐めた。

(シンジの奴に遅れを取ったけど、これで実戦経験者って事で並べるか。さあて、無様な姿は見せらんないわよアスカ。しつかりやんなさい)

『OTR (オーバー・ザ・レインボー) よりエヴァ式号機へ。目標は水中を高速で移動中、こちらで測量したデータをリアルタイムで送ります。確認どうぞ』

スピーカーからシンジの声が響く。

「サンキュー、碇クン。確認したわ。……グルグルと回って様子見かしらね」

『シンジで良いよ。指揮官の意見では式号機を警戒してると。そろそろ仕掛けてくるから注意して。射撃の可能性もある』

シンジの話聞きながらアスカは式号機を立ち上げた。エヴァのサイズからすると、空母のサイズでさえボートに等しい。ひっくり返らないように姿勢に気を使い、足元にATフィールドを展開して踏みしめる。海上で戦う為に考えて来た付け焼き刃程度の発想だが、やらないよりもマシだろう。

『目標が進路変更！OTRへ向かってくる！』

「行かせるかあ！」

アスカの咆哮をトリガーとして、式号機が自身の発生させたフィールドを蹴りつけた。

最新技術の料を集めた、赤い巨人が空を切って飛び出す。

「エヴァ式号機、発進！」

雲一つ存在しない空を赤い巨人が飛ぶ。アスカのイメージを受け取った式号機は、へりすら超える速度を纏ってオーバー・ザ・レインボーへ急いだ。

『OTRから式号機へ！海中の使徒に対して機雷の敷設をしている。水面下に足を入れないように注意して！』

「了解！」

式号機の視界を得たアスカは、水中で連続する爆発を見た。水面が盛り上がり、大きく揺れる護衛艦隊を視界の端に確認し、飛び越えるようにアスカは走る。

「兵装準備はどうなってるの!?？」

『OTR甲板にあるだけ展開してる！バズーカには時間差で爆破出来る弾頭を詰めてあるから、上手く使ってくれ！』

「気が利くじゃない！じゃあエヴァ式号機、着艦します！」

一瞬にして近づくオーバーザレインボーの甲板に、アスカは式号機を滑り込ませた。足元のフィールドを緩衝材代わりに使い、甲板に広がった武器を海に落とさないように着艦する。

少し距離をとった水中で、また爆発が起こった。間を空けずにシンジから報告が入る。

『使徒急接近。真正面からくるよ！』

「ちよつと待ちささないよ！」

一瞬の余裕さえ与えずに接近してくる使徒へ悪態をつくアスカ。だが言葉とは裏腹に、彼女は冷静に装備を選択して銃口を使徒の潜む方角に向けた。

右手にバズーカを、左手にライフルを構えた式号機が片膝をついて静止する。

「ほら出て来なさいよ！ たつぷりと叩き込んであげるわ！」

自分と、通信で繋がる味方を鼓舞する様にアスカは猛り、そして通信に乗せないように小さく呟いた。

「さあて、あんだだけカッコつけてレイに教えたんだもの。失敗できないわよ、アスカ」



オーバー・ザ・レインボー船内は異様な緊張感に包まれていた。

お互いに予想することが出来る人類同士の戦闘ではない為に、艦橋にいるスタッフは一瞬の時間でさえも気を緩めることができない。

その中でも、唯一使徒に有効打を与えることが出来る戦力である式号機のサポートを行なっているシンジ達のストレスは、艦長やミサトと同じく、想像を絶するものになっていた。

現在シンジは、オーバー・ザ・レインボーの通信スタッフ数人の助けを借りてアスカへの情報支援を続けている。シンジ一人では専門的な装置を使いこなすことはできず、太平洋艦隊スタッフでは初めての対使徒戦闘ゆえに適切な判断を下せない。その為に組まれた即席のチームだが、その連携は悪い物では無かった。ミサトの権限によってシンジの戦歴を限定公開したためにシンジも戦士として認められた事。前回の光線使徒戦での戦自の戦闘技術を目の当たりにしたミサトが、旧来の戦闘組織への敬意を忘れない対応に徹した為に、艦内は厳しくも淀みのない空気が醸成されていた。

（これで最低限のサポート体制はできた。太平洋艦隊全てがアスカの支援に回れば、海上の不利だって覆せるはず……！）

シンジの眼前、モニターには海中を移動する使徒が立てた巨大な波が映されていた。分割された画面のもう片方には使徒の予想進路が書き込まれている。

シンジの右手に座り、キーボードを叩いていたスタツフが右手を握り、親指を立てる。画面内に「EVA02 LINK OK」の表記が踊った。

「OTRより式号機へ！使徒予想進路を送った。接触カウントダウン、4、3、2、1！」
ゼロ、とシンジが声を上げた瞬間、海面が大きく盛り上がった。

白く、奇怪な魚類の姿が空中に踊る。だが、シンジがその姿を確認できたのはそこま
でだった。

『ぶつとべええ！』

アスカの咆哮と共に式号機が射撃を開始した。的確に使徒先端を捉えた砲弾が連続して爆発する。白煙の中、使徒の発する不思議な怪音が木霊した。

だが、そこで気を緩めるアスカではなかった。一瞬にして弾切れになった両手の装備を投げ捨て、肩にマウントされたプログレッシブ・ナイフを手取る。

シンジの目の前で赤い巨人が白煙の中に突っ込んだ。

「アスカ！無理な追撃はしないで！」

「いかん、全艦、砲撃中止！我らが太平洋艦隊が友軍誤射など、冗談ではない！」

シンジの後ろでミサトが悲鳴の様な指令を送り、艦隊指令の慌てた命令が続いた。

『そこか——！！』

白煙の中で大きく影が動いた。一つになっていた影はその動きによって二つに分か

れ、片方は海へ逃れ、もう片方はオーバー・ザ・レインボーの甲板へとトンボを切つて着艦する。

片膝をつき、反対の片腕を使つて衝撃を和らげながら着艦した式号機は、緑に光る瞳で海を睨みつけていた。

「アスカ、状況を報告して。大丈夫なの!?？」

『大丈夫よミサト。それより、コアつてやつを見つけたわよ!』

「…ホントに!?? 大手柄よ、アスカ!」

叱責する様なミサトの声色が、アスカの返答で一氣に裏返つた。

『切りかかった時にあのサカナ、こつちを食いちぎろうと口開いてね。一瞬だけど、大口あけた奥に赤くて丸いのが見えたわ。それつて、コアの特徴でしょう?』

同時に通信を聞いていたシンジは、驚きながらも納得するような、不思議な感覚を得る。

（さすがアスカ。やっぱり凄いや）

エリート呼び声に恥じぬ、アスカの隙のない戦いに安心したシンジ。アスカとミサトが情報を共有している間、アスカの戦いに奮起しなおしたシンジは、スタッフと共に海中の使徒を追いかける。

（わかつていたけど、動きが速い。国連軍の魚雷がまるで当たらないなんて）

アスカと式号機の鮮烈な動きに目を奪われがちだが、国連軍も対潜ミサイルや魚雷を駆使して使徒を追い立てていた。だが、国連軍の魚雷どころか対潜ミサイルすらも使徒に追隨できずに推力を失ってゆく。

だがそれは、無駄ではない。ダメージにはならないが、時間は稼げた。その時間を無駄にしないために、シンジは急いで口を開く。

「OTRより式号機へ。次に使徒が来るまで、推測で30秒はある。リロードを提案するよ」

『式号機了解。とりあえずもう一当てして、どう倒すか考えましょ』

ガラス一枚を隔てた先で轟音を立てながら式号機が装備を整える。その手つきは丁寧なものだったが、その大きすぎる体躯に合わせた装備が鳴らす金属音は、人の耳には大きすぎる。

耳の痛みに顔をしかめたシンジの視線の先で、準備を整えた式号機が立ち上った。



様々な音が乱雑に鳴るブリッジでも、よく通るように声を張ってミサトは口を開いた。

「ねえアスカ。あなた、射撃の腕はどれくらい自信ある？」

『…何言いたいのかわからないけど、少なくともネルフに、私より腕のいいやつは居ないわよ。ミサトも含めてね』

流石の自信ね。と内心で苦笑してミサトはアスカに提案する。針の穴を通すような無茶な作戦だが、試す価値くらいは有るとミサトは自らの考えを披露する。

「じゃあ、バズーカの連射で使徒の口の下つて狙えるかしら。使徒が最低限でも既存生物と構造を共通しているのなら、口を開くための筋肉が有るはずなの。そこに無理やり刺激が入れば」

『ヒザ叩いて跳ねるやつ你真似？ミサトの考えることは相変わらず訳わかんないわね。それで、口を開かせてからはどうすんのよ。下から攻撃は出来るだろうけど、それで開かせても狙えないじゃない』

アスカの疑問を受けて、ミサトはにこりと微笑んだ。最前線で戦っているというのに、アスカの頭の回転はまるで落ちて居ない。

今も的確にアスカをサポートし続けるシンジといい、使徒と睨み合いながらも頭を回転させ続けるアスカといい、エヴァに関わる子供達は天才としか思えない程の才能で我々大人に応えてくれていた。

「大丈夫よ。アスカがフィールドを中和してくれば、選択肢は山ほどある。ここには、

式号機以上の火力を持った心強い友軍がこんなに居るのよ？」

『使徒撃破の手柄をみすみす譲れつて？』

ミサトの言葉で、アスカは一瞬で作戦を理解した。元々それだけで通じると思ってたから、ミサトもそう答えたのだが。レーダーの先で動き回る使徒を睨みながら、ミサトは少しだけ語気を強めて話す。

「それが一番確実だと思うから、提案してるわ」

命令と言うこともできる。だがドイツが誇る天才少女には、命令するよりもいい提案の仕方があるのだ。

モニターの先で、アスカが大きいため息を吐いた。

『嫌よ。……って言いたいけどね。それで被害が増えたら寝覚めが悪いし、乗ってあげるわよ。でも結局は私の手柄だからね！そこそこ、しっかり報告しなさいよ！』

なんともアスカらしい高飛車な了解を受けたミサトは、体ごと艦長に向き直る。

「と、提案させていたくださいね？ どうでしょう？ 太平洋艦隊の砲撃手の方に、使徒の口腔内を狙い撃てる方はいらっしやいますか？」

「そちらが使徒専門の特殊組織だということとは理解しているが、我が艦隊の兵を見くびらないで欲しい。貴軍が成功したのならば、狙える位置にいる全ての艦が目標を吹き飛ばすだろう」

「では、よろしくお願いします」

「任せたまえ。しかし、随分と柔軟な判断をするのだな。まさか我々に華を持たせるとは思わなかったよ」

目深に被った帽子の奥から、艦長の訝しげな視線が向けられる。

疑われるのも無理はないな、と思うミスアの脳裏には、先の使徒戦で零号機を助けた神業のような砲撃がチラついていた。

「以前、共闘した組織に素晴らしい練度を見せつけられたもので。我々の使命は使徒殲滅で間違いありませんが、その目的はあくまでも人類存続です。ならば、目的のために手段を選ぶような真似をできようはずがありません」

勿論、ネルフとしては単独で撃破したい。しかし、そのために各方面に軋轢を作って自分の首を締めていては本末転倒なのだ。

ただでさえ秘密主義のために敵を作りやすい以上、不必要に恨みを買って自分に向く銃口を増やす事はない。

こちらの真意を探るような艦隊司令の瞳は、数秒もしない内に柔らかい光へと変わった。

「貴軍の援護に感謝する。太平洋艦隊の誇りにかけ、必ずや君たちの期待に応えよう」

司令の答えを受け、ミスアはマイクに息を吹き込んだ。

「では、作戦スタート！アスカ、思いつきやりなさい！」

前回の作戦に続いて二度目の共闘だが、今回は所属する国家まで違う。

ネルフと太平洋艦隊。信条や守るべき隣人さえ違う二つの組織だが、同じ方向を向く事は出来る。

子供達のために組織の面子まで曲げてくれた艦長を、ミサトはそう信じていることができていた。

晴天のガールフレンド／波乱の転校生

ネルフ本部司令室。

式号機が日本に到着し、加持リョウジが持つてきた戦闘データが映写される。

この部屋にいるのは加持を含めて3人。ネルフの最高権力者二人組のうち、スクリーンに目をやった冬月がため息混じりに口を開いた。

「結局、太平洋艦隊の手柄扱いになったな」

「問題ない。言ってしまうえば、我々の使命は使徒殲滅だけだ。式号機が戦果を残し、ネルフの存在感を示しただけで十分だろう」

不満げに口を歪める冬月とは対照的に、ゲンドウは満足げに頷きながら返答した。

「式号機が使徒のフィールドを無効化した事が人類の勝因なのは明らかだ。それだけでエヴァの存在を無視できる勢力はいなくなる。ただ、問題なのは……」

悩むそぶりを見せるゲンドウの言葉を、食い気味で加持が継いだ。

「使徒のサンプルが見つからなかった事ですか。しかしカギ爪の使徒も爆発後にはカケラも残らなかったと聞いていますか」

「確かにその通りだ。だが、使徒の最後が不自然に見える」

ゲンドウが手元のコンソールを操作する。

式号機の射撃が使徒の顎門を開いた場面がモニターに表示された。

「式号機によってファイルドを無効化された使徒は、もはやコアを守る盾を持っていなかった。ならば太平洋艦隊の砲撃で決着がつくことは不自然では無い」

ゲンドウの言葉に合わせ、映像が動く。

艦隊が全力を発揮した砲撃は、雨あられと使徒に降り注ぎ、使徒の断末魔の悲鳴が響いた。

着弾、そして爆発。

編集された爆音は、見た目に反して着弾したことだけを伝えるような間の抜けた音だった。

「だが……からだ」

口腔内に艦砲射撃の直撃を受けた使徒は悲鳴をあげながら海の中へと沈んでゆき、しばらく時間を置いてから爆発する。

「今までの使徒は、コアに致命的なダメージが入った瞬間、何かしらの反応があった。

生き残りをかけて、もしくはこちらの戦力を道連れにしようと死力を尽くしていた。そのどれもが我々にとって危険な、致命的になり得る対応だ」

ゲンドウの言葉に加持は唾を飲んだ。

（待ってくれ。それじゃあ、まさか）

加持の思いも虚しく、ゲンドウは重々しく宣言した。

「今回、その最後の対応がなかったことが気がかりだ。最悪の場合、我々は一時的に難を逃れた状態だろう」

エヴァが出撃し、太平洋艦隊と共闘して得た勝利。それが小競り合いの勝利だとゲンドウは言い切る。

その言葉は、勝利を得たにしてはあまりに硬い声として室内に響いた。



「ドイツから引越して来た、惣流・アスカ・ラングレーです。よろしくお願いします」
第二中学2年1組の黒板に、流麗なゲルマン文字が並ぶ。

自分の名前を書ききったアスカは黒板の前で胸を張り、丁寧ながら自信が滲み出る態度で自己紹介を行っていた。

（こういうの、ホントにうまいよなあ。なんでそんなことできるんだろ）

その見事な挨拶を初対面の顔で見つつ、シンジは心の中で愚痴を吐いた。

それは愚痴と言うよりも自分に対する批判として続く。

（というよりも僕が苦手なだけなんだ。いろんな人に助けてもらったから僕は今の僕になっただけ、僕が自分でできたことなんて、戦うことしかなかったんだから）

「元氣な自己紹介をありがとうございます。みなさん、惣流さんと仲良くしてくださいね」

シンジが昔から恒例の自己嫌悪に陥る中、アスカの隣でにこやかに笑っていた担任の教師が合いの手を入れる。

「それにしても、惣流さんは日本語がお上手ですね。日本にいた経験があたりで？」

「日本は初めてですが、友人の綾波さんと碇くんに教えてもらいました。二人とも大切な友人なので一緒のクラスになれて嬉しいですよ」

担任の質問に答えたアスカの視線の先、シンジとレイの方向にクラス中の視線が集まった。

昔よりは慣れたとはいえ、今でも人目を集めることが得意ではないシンジは身を竦ませる。

「慣れてないことあると思いますが、仲良くしてくださいね！」

にこやかに笑うアスカを見ながら、シンジの意識は過去に向かった。

（なんか、最初に会った時より人の話聞いてくれるようになったな……）

最初に会った時はいったったか。シンジの記憶が過去に飛ぶ。

（というより、最初に話したのっていつだったっけ？）

アスカが過去の戦いに途中から参加した事は覚えていてるものの、詳しい時期がぼんやりとして思い出せない。

巨大な敵が襲来し、「あの人」がそれを退けた上に戦線離脱してしまった事件。シンジが正式に巨大ロボットのパイロットになったのはそんな時期だった。

それから幾らかの時間が過ぎ、シンジが名実ともに人類守護の要塞となった時期のどこかでアスカは来たとシンジは思い返す。

（正直に言えば、必死過ぎて戦い続けた記憶はあつても細かくなんか覚えてないんだ。アスカはしつかり覚えているのかな？）

そこまで考えたところで、シンジの意識が現実に戻した。

いくつかの質問と説明を終えた教師が、アスカを席に案内する。

「では、席は碓君の隣にお願いします。わからない事があれば、私だけではなく彼や委員長、長木さんに聞くといいでしょう」

「ありがとうございます」

ふわりと優しく笑ったアスカは、真っ直ぐにシンジの下まで歩いた。

愛想を振り向いていたアスカはそのままの笑顔でシンジに向け、

「悪いんだけど、昼休みは二人で食べましょ？ ほら、一緒に住むんだから決めることは

たくさんあるし」

とりあえずとばかりに教室に爆弾を投げ込んだ。



クラス中から発生したとてつも無く物騒な視線。それがシンジジに集まっていくのを横目で見つつ、アスカは先ほどまで軽く話していた二人組を思い出した。

同時に、アスカに続いて教室に入ってきていた少年少女が名乗りをあげる。

「霧島マナです！ よろしくお願いします！ 本日、私霧島マナは、碓くんとみんなの為に午前6時に起きてこの制服を着て参りました！ 似合うかな？」

「ムサシ・リー・ストラスバーグです。父がアメリカ人だったのでこの名字ですが、今は日本人です。よろしくお願いします」

マナに対して似合うとの男子の歓声や、武蔵に対しても歓迎する女子の声を聞きつつ、アスカは表面上笑いながら思考の海に沈む。

（霧島マナ、ムサシ・リー・ストラスバーグ。二人して明らかに訓練されてる動きしてるんだけど、それを隠す様子もなし。私達をエヴァに乗れるだけの運の悪い民間人と思っ
ているのか、こっちに何か知らせたいのか。わっかんないわね）

ちやうど同時に転校してくる仲間がいることはアスカとしても嬉しいのだが、その二人の思惑が読めず、しかし気づかないフリをするわけにもいかなければ困惑するしかない。

だからこそシンジに爆弾を放り込んで様子見しようと思ったのだが。

(私の投げた爆弾に乗ったのか初めからシンジ狙いなのか、私の自己紹介の後にソレをやった度胸だけは認めてあげるわ)

「惣流さん、転校生同士お隣だつて！ よろしくね！」

突然の声に意識を浮上させると、いつの間に自己紹介を終えたのか、マナがアスカの横に座っていた。

「惣流さんつて、碇くんと二人暮らしなの？ 何、もしかしてすごい関係？」

「まあ、隠せるようなもんじゃないから言っちゃうけど。私もシンジと同じよ。それで、通じるでしょ？」

わお、とマナが呟いた小声はアスカにも届いた。機密になっているはずのこちらの情報を掴んでいる時点でクロと判断したアスカは、マナとムサシの名前を要警戒リストに突っ込む。

「シンジも最近こっちにきたばっかりだし、私たち4人、仲良くしましょう？」

シンジとレイだけでも面白いのに転校初日から楽しませてくれるじゃない、と。

アスカはこれからの新生活に心を踊らせ始めた。



「アスカ達はうまくやれてるかしら？」

ぼつり、とつい口に出てしまったミサトの声が12時となって混雑し始めた食堂の雑音に混ざる。

誰に聞かせようとしたわけでもないが、それは対面に座っていたリツコにとっては会話のタネに聞こえたらしい。切れ長の瞳がミサトを捉えた。

「防衛庁から送られてきた子達？ 日本政府側の焦りが透けて見えるわね」

まあねえ、と気のない返事を返しつつ、ミサトは言葉が続けた。

「どうにかして情報欲しいってのはわかるけどさ、子供使うのは無いわよねえ」

（人類一丸となって、が無理ってのはわかるのよ。でも、それは子供達とは関係の無いことだわ）

心の内でため息を押し殺し、ミサトは子供達の保護者としての顔になる。

「防衛庁から来た子達の身元は、あちらさんから来てるわ。防衛庁で建造されている試作兵器の関係者。14歳の子供を前線に送った私達が言えた義理じゃ無いけど、あっち

も相当よね」

ミサトはここで声のトーンを落として続けた。

「リツコの所にはもうちよい詳しいトコ、来てんじゃないの?」

軽く探りを入れた視線の先、金髪を少し揺らせたリツコの答えは素っ気ないものだった。

「残念だけどね、この前の技術交換はポジトロンスナイパーライフルを中心としたものよ。私の方には何も来てないわね」

でも、と続けたリツコは視線を動かし、ミサトの横に座った男性を見た。

「何だか面白そうな話じゃないか。俺も混ぜてくれよ」

水色のワイシャツを着崩した男性、加持リョウジだった。



(厄介なのがきたわね)

懐かしいといえは懐かしい顔だ。学生時代から色々であった記憶が一瞬でフラッシュバックし、自分ですら理解できない感情が腹部を押さえつける。

久しぶり、という前置きを置いて、加持は続ける。

「海を越えてアスカについて来てみれば、ずいぶん面倒な事になってるじゃないか。そこら辺、俺も嘯ませて欲しいな」

爽やかな笑顔と共に、出歯亀根性丸出しのセリフが吐かれた。

ゲエ、とミサトは思い切り顔をしかめるが、加持は笑顔のまま続ける。

「それでもアスカの保護観察者でね。こっちで集めた話もあるし、ちよつと聞くだけ聞いてっくれよ」

(よくもまあぬけぬけと)

作戦課長をメインにしながらも、子供達の護衛を受け持つミサトは諜報部にも多少のツテがある。そのミサトから見ても、現在の加持は正体不明の男だった。(国連軍、ネルフの両方に同時在籍している一般職員で、主な仕事は両組織の仲介役。普通に考えればスパイとかになるんだけど、どっちが優先なんだかね)

「アンタ、日本に来てまだ一週間でしょ？ ずいぶん噂好きになったじゃない」
「ま、そう言うなつて。これでもちゃんと調べてきたんだぜ？」

そこで加持は少し区切り、世間話にしては真剣味を帯びた表情で続けた。

「葛城が持つてきた情報、それ自体も一個のカモフラージュになつてる。日本政府が進めているエヴァへの対抗プロジェクトは2つあって、その片方が防衛庁が民間と共同開発したジェット計画。もう一つが、戦自が進めているトライデント計画だ」

「對抗するのは穏やかじゃないわね」

「実際穏やかじゃないのさ。両方ともエヴァと同サイズの巨大兵器で、実戦投入は数年後にしても、機体の建造自体は済んでいると聞く。ネルフとしては味方が増えて嬉しいんだか、人類同士の競争が面倒なんだか、微妙なところだな」

加持はそこで言葉を切って、皮肉げに口元を歪めた。微妙だとは言いつつ、本心では面倒事扱いなんだろうな、と推測したミスアトは、少し話すことにした。

「作戦部としては諸手を挙げて歓迎するわよ。政治の分野は司令に任せて私達は使徒殲滅を至上命題にする。人間らしく、分担作業でいきましょう」

「ちよつと、上司に丸投げする気？」

リツコの指摘に、ミスアトは笑顔で答える。

「あつたりまえじゃない。人類滅亡するかどうかの瀬戸際なのよ？ 全員がベストを尽くさないでどうすんのよ」

政治があるのはわかる。表面上は仲良くしてはいるが、ネルフが日本と言う国から睨まれていた状態だと言うことも当然わかってはいる。だがそれは自分の専門ではないのだと、作戦部長として気楽に言い切ることにした。

「だから加持、そつちは任せたからね。アンタが変な動きをしてもちよつとくらいなら気づかないであげる。その代わり、半端なことしたら許さないわよ」

おっかなくなつたな、小さく呟かれた加持の言葉を聞き流し、ミサトは脳裏に戦自から来た子供達に思いを馳せる。資料に写っていた子供たちの表情は張り詰めたながらも達成感のあるものではなく、緊張感の影に怯えを隠した表情だった。

(最近はある程度順調だったけど、使徒戦に余裕なんて無いって、想像つかないもんかしらね)

その資料からききな臭さを感じたミサトは、一丁追加で働くことを決意する。

その為にはまず腹ごしらえだ。財布を確認し、ミサトは追加のカレーを頼みに行くことにした。

晴天のガールフレンド／友達になりたい

晴天のガールフレンド／友達になろう

突然の話だが。

綾波レイから見れば他人は怪物だった。

だから今まで話しかけてきたクラスメイトがなぜ自分を囲んでくるのかも分からな
いし、大人達が何かにつけて自分に注意を向けてくる事についても、恐怖を感じるこ
と
しかない。

だがそれにも例外はある。一人は碓ゲンドウで、今までの自分に方向を与えてくれた
人物だ。

そして、その例外が突然二人増えたことに、レイは戸惑いを感じていた。

(碓シンジと惣流・アスカ・ラングレー。碓指令とあの二人が怖くないのは何故?)

碓ゲンドウの子供だからシンジが怖くないのは、理屈としては通っているとレイは思
う。だが、そこに何故アスカまで入ってくるのかレイには想像がつかなかった。

(同じエヴァのパイロットだから?それとも、碓君と似ているから?)

理由としてはそんなところだろうかと考えても、どちらも後付けのように感じられ

る。

その疑問が頭から離れないせいだろうか。アスカが転校してきてから、レイは気がつけばアスカの事を視線で追うようになっていた。

「で、なんでアンタはバカシンジの横に座ってるのよ」

「んー、なんでだろ？ねえ、シンジ君はわかるかな？」

視線の先、アスカは同時に転校してきた霧島マナを問い詰めている。だが、マナはヒョイと首をすくめるだけでシンジに流した。

「ぼ、僕がわかる訳ないよ！と言うか霧島さん、近いからその…」

「シンジは何であるなにモテるんじや。ワシらもなんか、ああいうの欲しくないかケンスケ」

「トウジにソレ言われるのすげえムカつくんだけど何だろうこれ。メンバーだけ見れば華やかなのに敗北感が凄い」

レイの対面に座るシンジは、マナに擦り寄られて真っ赤になり、その横で黒いジャージとメガネの二人組が菓子パンを頬張りながらボソボソと何かを話している。

そして、彷徨っていたレイの視線はシンジにすり寄っていたマナの隣、ムサシと自己紹介した少年に固定された。

「おいマナ、碇君に迷惑かけるな。お前の距離感はやっとおかしいと自覚しろって、何

度も言っているだろ」

ムサシはマナを引っ張って張ってシンジから離そうとしているが、レイにはあまり本気ではないように見えた。

(霧島さんが碇君にくつつくのは嫌なのに、諦めてるのね)

レイにとつても、よく分からないマナがシンジを独占しているのは嫌な気分させられる。

赤木博士からもらったお弁当をぱくつきながら、レイはムサシを無言で応援する。

しかしソレは、傍目からは少々きつめの視線となつてムサシに突き刺さった。

「綾波さん？俺、なんかしたかな？」

「ええー？ムサシ、もう綾波さんに何かしたの？信じらんないんだけどー」

「何もやってねえよー！」

鋭くレイの視線に気付いたムサシは、なぜか冷や汗を流しながらもレイに対応し、マナが即座に茶化す。

手慣れた感覚で場の空気を和やかにしようとする二人の手腕は、レイから見れば憧れてしまう如才のなさに映った。

「別に。ただ、不思議なだけ」

「？」

「あなた達は仲良くなりたいたいと言うけれど、辛いことを我慢してみたい。なぜ辛いのに笑えるの？」

レイの言葉に、二人の表情が一瞬止まる。レイは、泣き出したくなるような感情を二人から感じるが、それも一瞬で何かに塗り潰される。

「それは」

動揺を隠しきれないマナが、その場しのぎの言葉を紡ごうとする。

しかし、レイの言葉をアスカが止めた。

「ストップ。言いたいことはわかるけど、それ以上はこんな所でする話じゃなくなるわ」

そこで一旦言葉を切ったアスカは、今度はマナの方に視線を向けた。

「ウチのセンパイはいつもこんな感じなのよ。気にしないことね」

「惣流さんは、私たちの事怪しいとは思わないの？」

「思うわよ。転校早々にそのパツとしないのに粉かけてる時点で私の中では何かあるのは確定してる。でも、それと敵視するかは別の話なの。碇クンだって何も言っていないじゃない」

レイとしても不思議だった部分に話が向く。確かにシンジは明確に人を拒絶する人間ではないが、状況に流される事もない。そのシンジがマナの思うままに流されているのは、レイにとって意外で、なおさらに機嫌を損ねる原因だった。

「ま、これからクラスメイトとして長いことやってくんだし、一回くらいなら巻き込まれてあげるわよ。貸しだけどね」

アスカは言いたいことを言って満足したのか、手に持った菓子パンを口に放り込む。

なぜか転校生に優しいアスカとシンジを不思議に思いながらレイがリッコ印のネオオムレッツに箸を突き刺すと同時、ネルフの通信機が振動した。

（緊急事態。戦闘準備開始。使徒の形態は…）

「二足歩行の巨大移動物体が芦ノ湖で確認された。トウジとケンスケは校舎の中に戻って。あそこが一番シエルターに近いから。レイ、アスカ、いくよ！」

レイが確認し終わる前にシンジが立ちあがり、指示を出していく。

父親譲りなのか、妙に断定的に語りながらネルフに連絡を取る姿は、ゲンドウの後ろ姿によく似ている。そこで一旦言葉を切ったシンジは、マナとムサシに向き直った。

「二人も、できれば安全なところに。僕たちの事は追わない方がいいよ」

「つたく、転校早々にずいぶんイベントを積み込んでくれるじゃない。そんなに撃ち抜かれたいのならやってやるわよ！」

シンジにしては少し冷たい声を遮るように、アスカの咆哮が快晴の空に響いた。



『で、何にもなかったってどういう事よ!』

「いいじゃんか。使徒じゃないなら、僕らだけで戦わなくても良いんだし」

エントリープラグの中、シンジは不機嫌さを隠しもしないアスカの声を聞き流しつつ笑った。

『アンタ馬鹿? エヴァが必要な場面で、エヴァが動かなくてどうすんのよ! それでなくともエヴァは動くだけでお金かかるんだし、なんでも良いから結果出さないと私達が苦しくなるのよ?』

「その、ごめん。でもそんなにネルフって苦しいの?」

(そんなにきつい言い方しなくて良いじゃないか)

恐ろしい剣幕で言い返すアスカに副音声で愚痴を漏らしつつ、シンジはネルフの懐事情に話をすり替えた。

『苦しいかと言われると違うけど。でも人類の危機なのにお金の話が関わってくるのはマズいのよ。余裕があるって事でもあるけど、私達の味方じゃない人たちがいるって事だもの』

「霧島さん達のこと?」

『何よ。シンジの割に勘が働いたじゃない』

「いやどつちかって言うとなスカがあんなにわかりやすく警戒するから気になっただけなんだけど」

（アスカって怪しい相手でも表面上は仲良くしてから情報抜き取ろうとするから、本気で威嚇するなんて久しぶりに見たし）

「なんかあの子は気に入らないのよね。理屈じゃないから気にしないで良いわよ。どーせ、アンタが気にしたって意味ない事だし」

シンジの指摘に、アスカはカメラから顔を逸らした。

「またそうやって隠してさ、そこまで警戒しなくても良いじゃないか!」

「うるっさいわね! 私だってわかんないのよ! でも!」

朝からシンジに対して突っかかり続けるアスカに、シンジは声を荒げる。だが、アスカの返答はさらに切羽詰ったものだった。

『二人とも興奮しないの。一旦休憩にしましょう? ちよつと水際で遊んでくると良いわ』

ミサトの声が通信に乗り、その後ろで響く作戦部の掛け声をマイクが拾った。

「初号機、式号機電源供給停止」リフト立ち上げ準備。開始まで90秒」武装トラスク用意、チルドレンの回収初め」あ、これアスカちゃんとシンジ君に差し入れお願いします。頼まれてたクッキーだって言えば」

通信がにわかに騒がしくなり、シンジはアスカに声をかけるタイミングを失う。

言い過ぎたな、と反省してもアスカはもうマイクを落として降機準備に入っており、シンジもそれに従うことにした。

(なんで今日はこんなにペースが乱されるんだろう)

割と直情的になってきたシンジも、自分のコントロールがうまくいってないとは感じていた。なぜか、霧島マナという少女に出会ってからはシンジも、アスカも「らしく」なくなっている。

それを自覚しているために、シンジの意識はまた霧島マナに向かっていった。



「民間製エヴァの完成披露会ですか…?」

「そ。海に行く時ははレイにお留守番してもらったし、今度はシンちゃんにお留守番をお願いして、女子会がわりのパーティに行くわよー」

「なにそれ。どう考えても私たちが針の筵むしろになるやつじゃない。

いやーよ。なんでそんな罰ゲームみたいなどころに行かなきゃならないのよ」

少し頭を冷やしてきます、と言いつつ残してシンジが散歩に出かけた後。

エヴァの足元でミサトとアスカ、レイの三人が仮テントの中でクツキーをつまんでい

た。

「私は構いません。でも、なぜ？」

「面白くなりそうだから、じゃダメ？」

そこでミサトはレイに対してウインクを決めるが、すぐに真面目な表情になった。

「本当はね、あなたたちを連れて行きたくはないのよ。針のムシロに座るのは大人の仕事だもの。でも、今回は来てくれると助かるの」

「何がよ。加持さんからチョット聞いたわ。エヴァとはまるで関係なさそうな無人口ポットなんでしょ？」

「良く知ってるじゃない。でもね、だからこそエヴァのパイロットに見て欲しいのよ」

◆◆
だって、とミサトは前置きして続けた。

「あなた達二人は、エヴァと共闘し、実際に成果をあげた通常兵器による使徒戦を世界で最も知っている二人だもの」

◆◆
あちやあ、という顔をしたアスカ。

それを見たミサトは、こっちはピンときたみたいね、と判断する。

「今までネルフは、A Tフィールドに対して通常兵器は効果なし、と判断していたわ。だって位相空間すら操作する相手に、普通の大砲が効くわけない。そんな事は科学素人の私ですら理解できるもの。そりゃあそうなる、つてもものよ」

しかし、現実は少し違うのではないかと思える材料がある。

「でも、戦自と共闘した時も、太平洋艦隊と共闘した時も。なんならシンジ君が二体目に倒した使徒ですら通常兵器に反応を示しているの」

日本中のエネルギーを集めた攻撃は再現性に乏しく、そう簡単に用意出来はしない。だが、戦艦の砲撃レベルとなれば用意できないわけではないのだ。

「もちろん、その戦闘の全てにおいてエヴァが大きな働きをしていた。どの距離であろうとも、使徒のフィールドに少しでも干渉しないと効果がないのは理解してるのよ。でも、これからどんな敵が来るのか分からない以上、最大限の準備をしなければ人類を守るなんて言えない」

熱のこもったミサトの言葉を、諦めたようにアスカが引き継ぐ。

「だから新兵器をパイロット自身に確認させる、か。確かに私達が見れば何かしら意味のある意見が出ると思うけど」

そこで半眼となったアスカがミサトに問う。

「でもそれって、ネルフからしたらタダで独占情報を漏らすようなものよね。いいの？」



日本とヨーロッパを結ぶエアライン上、冬月コウゾウは通路を挟んで反対の席に座るゲンドウへと聞こえるように嘆息した。

「まさか、披露式典へチルドレン達を行かせるとは。どんな心変わりだ？」

今までネルフは、他組織への関係を最低限のものとしていた。

それはエヴァという特殊兵装を秘匿するためでもあるが、何よりもチルドレン達を守るためという意味合いが強い。

守る上で、その存在を相手に悟らせないことが一番効果的だと、ネルフ上層部の意識は統一されていた。

「隠し切ることもそろそろ出来ない時期になってきた。何より、アレは俺たちの計画の助けになる」

「ジェットアローンがか？ 約半年間も動く事に努力を認めるが、私には出来損ないの機械人形に見えるぞ」

冬月は諜報部の仕入れてきた情報をそらんじる。

実際に、遠隔操作と長期間稼働は見事なものだが、今までのエヴァの働きを見ればそ

れもどこか見当外れのように感じられた。

「まあ戦闘兵器としては使えないだろう。戦力は適切なタイミングで適切に効果を発揮してこそだ。使徒が1ヶ月も生存しているのならば、人類はとつくに滅びる」

「ならば、なぜあれを欲しがる。死海文書を信じれば、これからはあのような玩具が出張る戦闘ではなくなるぞ」

冬月の視線がゲンドウを向いた瞬間。ゲンドウは軽く笑った。

「あれは人類が一から作った原初の巨人だ。老人達への皮肉としては十分働く」

「ふん。分からんな」

ゲンドウの言葉を、冬月は一蹴した。

しかし、ネルフの副司令として長年ゲンドウの相棒を務めてきた男は続ける。

「だが、まあいいだろう。戦略自衛隊への工作も進んでいる。これなら全て間に合うだろうからな」

今回の戦略自衛隊からの少年兵転校騒ぎ。実働の葛城や加持からすれば戦自からのアクションに見えるだろうが、実際は逆だ。

彼らの計画の情報を入手した時点で、ネルフは計画の妨害を諦めた。ジェットアローンとは違い、曲がりなりにも軍が作り上げた戦闘兵器は、現時点での完成度が高すぎたのだ。

だからネルフは、というよりもゲンドウと冬月は手を変えた。

完成しつつあるハードウェアである機体よりも、ソフトウェアに対応するパイロットに対して工作を仕掛けた。

「戦自パイロットがお前の息子と年が同じだったのには、唸る事しか出なかったな。客観的に自分たちの所行を見せつけられて、最悪の気分だったよ」

「よりによって、両親揃って子供に背負わせる十字架を用意した我々に言うか」

「当たり前だ、と冬月は思う。この手にかかる教え子達には、十分に反省してもらおう必要がある。」

「お前にだから言うんだ。人類の存続を憂うのはわかるがな、お前達夫婦は手段を選ばなすぎる」

だから、と冬月は言いつけた。

「なんとしても生き残れ。そして生き残らせろ。俺たち罪人には、贖罪が必要なのだから」



旧東京と呼ばれる埋立地。もはや人が住むことの無い大都会に巨大な格納施設があ

る。

ジェットアローン。そう呼ばれる巨人が鎮座する格納庫で、華々しい披露宴が催されていた。

「お集まりの皆様。本日は……」

壇上で挨拶をする開発主任の声を聞き流し、ドレスに身を包んだアスカは目の前の料理に手を伸ばす。

平均して10人前後で集まっている周りの卓に比べ、たった四人で1卓を囲むネルフのテーブル。

その上の料理は、量的には少し寂しいものの、女性4人と考えれば十分な量の料理とドリンクが用意されていた。

他の卓と比べれば異例ともいえる女性100%のテーブルには男性の好むような脂と塩が使われた料理は少なく、女性に配慮したメニューが並んでいる。

それもこれも、直前になってパイロットたる子供達の参加の連絡が来たためだ。

政治的な思惑を持っている大人たちとは違い、パイロットたる子供たちには迂遠な意思表示は通じない。

むしろ背後関係を知らない分、ストレートに嫌われてしまう恐れがある。

科学共同体としてもそれは避けたい事態だった。

ケーキをはじめとした洋菓子からノンアルコールのドリンクの種類も豊富に用意されている。

そのうちのひとつであるチョコレートケーキにフォークを突き刺しながらアスカは思う。

「挨拶が長いのは、どこの国も一緒ね」

「ま、付き合いがあるのは仕方ないわねえ。でも、そろそろ始まるわよ」

硬い表情でソーセージを摘むミサトの視線の先、開発責任者である時田シロウがジェットアローンの解説を終える。

「では、説明は以上とさせていただきます。何かご質問の方、ございませんか」

最初に時田の声に反応したのは、リツコだった。

「では質問よろしいですか」

「おお、赤木博士。どうぞ」

アスカは、リツコが一拍を置いた呼気を聞いた。

「無人操縦とのことですが、戦闘での活動は可能なのでしょうか」

「なるほど。ご質問ありがとうございます。現状、人力に近い速度での稼働に成功しております。現状開発中の装備を使用すれば、十分な活動ができると信じております」

「動力機関としてリアクターを内蔵とありますが、戦闘による破損の危険性はないので

しようか」

「最大限の防衛手段と強制停止手段を用意しております。5分も動かない決戦兵器よりは、安定性があると考えます」

「なるほど。ありがとうございます」

聞くべきことだけを聞き、あつさりと頷いたりツコを見たアスカは、少しだけリツコの表情が変わったと気づいた。

「では、ジェットアローンは日本を守れますか？」

（嫌な聞き方するわねー）

ジェットアローンは頑健な装甲と長期間運用できる内燃機関を持ち、しかもその制御は無人類型。

つまりオペレーターを引き継いでいけば人的疲労すら無視できるために、制限時間としてはほぼ無限に動ける。

ケーブルを抜かれれば数分しか動けないエヴァの対抗としては、非常に魅力的な機体だ。

ただ、現実的に使えるかと言うと問題もある。

「現在、ネルフは総力を上げて人類守護のために戦っておりますが、その全ては数日以内の短期決戦となっております。これは、我々の特殊兵器が時間的制限に縛られているこ

とも原因の一つですが」

実際に戦場に参加した研究者として、リッコは断言した。

「敵味方の破壊力が大きすぎる事が最たる要因です。短期決戦を仕掛け、即時殲滅を目標としなければ、日本が先に倒れるでしょう」

一ヶ月も戦つて、ジェットアローンが生き残つたとしても。

毎日を暮らす人達はその間に長い緊急事態に耐えられないのだ。

それは、守れると言えるのだろうか。



「それは…」

答えに窮した時田を真つ直ぐに見た後、リッコはアスカへと視線を送った。

（ネルフの技術屋としては仕事を果たしたわ。だから、ここからは戦闘班によるサービスタイムね）

元々、リッコとしてはジェットアローンに敵意はなく、持っている感情はその逆ですらある。

敬意だ。

(エヴァに対抗するために資金援助を受けたとはいえ、基礎研究や基幹技術、建造に至るまでを全て国産企業での成果物。しかも危険であろう戦場に向かわせることを考えて遠隔操作システムまで実用段階に仕上げてきた。どれだけの才能と努力があつたのか、考えるだけで頭が下がるわ)

だが、ネルフの権益を守るためには未だ研究段階の、いわば実験機でいてもらわなければ困る。

これで完成だと自信をつけられて、まかり間違つて出しやばられては迷惑なのだ。

だから釘を刺す意味で、まずは牽制をさせてもらつた。だが、これで重化学工業共同体との関係悪化は、今後の使徒戦への課題になりかねない。

そこで、アスカには少し真面目に褒めてもらおう事になつていた。

(エヴァ式号機は遠距離での射撃戦の経験値が多いわ。それは、実戦採用型のエヴァとして事前に各種兵装への適性を練られたことも原因だけど。

パイロットのアスカ自身が銃器オタクなのもウエイトとしては大きいよね)

本人が自覚しているのかいないのかは微妙なところだが、ネルフの技術関係者の中では割と有名な話だ。

大体何の銃器であろうととりあえずは撃つてみる実践主義者にして、あの技術課渾身の浪漫兵器にすらシミュレーション上での射撃訓練映像と、詳細なレポートを送りつけ

る無類の銃オタ。それが装備開発班が持っている彼女のイメージだった。

だから、ジェットアローンが戦闘に出た時、どんな結果になるのかを一番正確にイメージできる彼女が今回必要になる。

リツコの視線の先、ただ可愛らしいだけの少女を演じながら、アスカは問いかけた。

「J Aが使徒との戦闘を行う場合、役割は何でしょうか？」



「役割とは？」

アスカの抽象的な問いに、時田は何を聞かれているのかと問い返す。

時田の自信が一つの見落としを作っている証左だ。

(食いついたわね)

可憐な少女を演じつつ、アスカは腹の中で笑った。

機体を作る側には分からない、戦闘班が有する発想がジェットアローンには足りない。ネルフからのサポートとしては、そのあたりを出しておけば十分だろうと計算をしつつ、アスカは続けた。

「実際に使徒と戦闘を行った身として言わせていただきます。私達エヴァの役割とは、前衛です。エヴァ同士での連携の上で、後衛を務める事もあったようですが、それでも私達は人類の一番前で叩かれるのが仕事だと考えています」

「なるほど。あなたのような少女にそのような仕事を任せる事に、大人として申し訳なく思います」

「お気遣いありがとうございます。ですが、必要な事です」

時田の言葉は、大人の総意なのだろうな、とアスカは知っている。

保護者を買ってくれている加持はもちろん、母国ドイツのネルフの職員も、本部の職員達も、そこをずっと気にしていた。

「正直に言ってしまうと、使徒の恐ろしさは巨体と火力です。我々ネルフと、他組織の方の違いはその使徒に対抗できる防御力を持つているかどうかです」

ATフィールドの有無も、結局は防御力勝負の一要素でしかない。ポジトロン・スナイパーライフルの存在がそれを証明している。山一つ分の質量があれば使徒の攻撃は防げるし、日本の総力があれば攻撃力も足りる。問題は、その両方を持つて動く事が現実的ではないという所だ。

だが、そのどちらも最低限しか持つていないジェットアローンは戦えるとアスカは判断した。

「その点、ジェットアローンのスペックならば使徒と交戦できるラインにいると思います。なので、これは戦友となる可能性のあるエヴァ側からの期待です。

ジェットアローンの搭載兵器、もしくはは携行兵器が遠距離戦を中心とするならば私達の前に出ます。格闘戦を視野に入れていいるのならば援護するためのフォーメーションを組めばいい。だから、ジェットアローンの得意なことを教えてください」

（さあ、こんだけ言ったら気付くんじやない？ジェットアローンはエヴァの代わりに単体で使徒を倒す兵器なんかじゃないって事に）

エヴァへの対抗心を見せていた強烈なイメージのせいで、時田達は一つ思い違いをしていた。

初号機の初戦闘の折、シンジは恐ろしいまでの根性で使徒と戦った。

まだネルフを知らないシンジが決死の覚悟で使徒と戦った姿はネルフで映像として保存されており、その映像はある程度の関係組織にも出回っている。

もちろんパイロットとの通信内容やエヴァのステータスは編集され、隠された上での報告となったわけだが、ここで一つネルフの誤算があった。

本人達はあまりの必死さ故に気付く事がなかったが、この映像は恐ろしく動画映えするのだ。

夜の街にサーチライトで照らされる巨大な機体。

特撮もかくやという格闘戦。

挙句、敵はビームを撃つ上に自爆まで行い、炎に包まれながらも初号機は仁王立ちして耐え切っている。

男達が夢にまで見た最強のロボットの姿がそこにあつた。

故に、時田達は目指してしまったのだ。

人類を守る最高の守護者、鋼の勇者を。

ジャパニメーションを見て育ち、巨大ロボットを建造すらした天才達は止まれなかつた。

その情熱は作業を加速させ、当初予定されていたスペックを軽く凌駕するほどにジェットアローンは洗練された。

だが、元々ジェットアローンに期待されていた役割は、単騎による使徒殲滅ではない。戦略自衛隊を始めとする戦闘組織との共闘を考えられていたはずだ。

故に、ジェットアローン本体は完成していても、ジェットアローンプロジェクトとしては未完成。リッコが目指していた話の着陸点はそこだった。

「ジェットアローンは陸上を歩く兵器ではありませんが、頑健さで言えば最新の戦艦と同程度のものを持っています。また、リミッターによって制限されてはおりますが、理論上高速での移動も可能です」

「ならば、私達にとつては頼れるバックアップで、他組織の方に取つてはまさに守護神と
なれる前衛ですね」

「そうなれるよう、一層の努力が必要だと思つております。ジェットアローンの戦闘用
パッケージの完成をお待ちください」

通じた。

ネルフはジェットアローンが未完成であることを指摘し、戦場への参加を防いだ。化
学共同体はネルフからの指摘を受け止めて戦闘用パッケージを製作する事で、いくら
ネルフとのパイプができる。しかもその提言をしたのがネルフ側のパイロットとなれ
ば、パイロットの所感を伝える為にネルフと共同体の間で情報の融通が利くようになる
だろう。

そこまで考えを回してから、アスカは思考を打ち切った。

(とりあえず、私の仕事はお終いかな)

そうアスカの意識が一息入れた瞬間。時田の後ろに1人の男が駆け込んできた。

男は血相を変えた表情で時田に説明し、報告を受けた時田がマイクを握り直す。

「それでは、この辺りで質問の方を閉じさせていただきます。皆様、この度は披露宴に足を運
んでいただき、ありがとうございます」

少し急ぎ気味にアナウンスを行うと、時田は能面のような表情で会場を後にした。

その姿を横目で確認したリツコが、誰に言うわけでも無く呟く。

「人類の為に。一体、どれだけの人がその言葉に踊らされて。そして地獄に落ちていくのかしらね」

耳ざとくりツコの言葉を聞きつけたミサトが、その意味を問いたただそうと口を開く。

だが、ミサトがその声を発する前に館内放送に警告音が乗った。

『事故発生。事故発生。皆様、速やかに避難シェルターへ移動するよう、お願いいたします。繰り返しします。事故発生、事故発生——』

警告音と同時に、館内に揺れが走る。それは規則的、かつ断続的に響くもので、エヴァの足元にいた経験のあるミサトやリツコにとって馴染み深いものだった。

ミサトの表情が変わる。ミサトの顔が友人に声をかけようとした女性のものから、巨大兵器を一手に担う指揮官の硬質なものに変化するまで、一瞬のタイムラグも存在しなかった。

「行きましよう。人類の危機になるのなら、エヴァはその場になきやいけないわ」
ミサトの声にレイとアスカは無言で頷き、全員が同時に駆け出した。

晴天のガールフレンド／J Aアタック

第3新東京市の一角から、空挺降下戦装備を身に付けた式号機と零号機が巨大な翼に抱かれて飛び立つ。

箱根山中腹から伸びたカタパルトに乗り、夕焼けの第三新東京市の空へ向けて射出された巨体は、第3新東京市の上空を一回りしてから旧東京へ進路を向けた。

『作戦を確認します。現在、使徒迎撃試作機ジェットアローンがコントロール不能となり北上中。このままでは、旧東京北部の市街地を直撃します。なので、エヴァ零号機、式号機により進路を強制的に変更。進路を東へと転進させ、旧品川を超えて東京湾に沈めます』

キャリアー内部からの通信電波にミサトの声が乗った。

画像付きで送られてきたデータを読み込みつつ、式号機の中で式号機の反応を確認したアスカは、ヘッドセットのスイッチをオンにして反応を返す。

「式号機了解。ジェットアローンの予想進路からすると、オオモリ辺りで行けそうだけど、シナガワまでは様子見すればいいの？」

『式号機の加速力なら接敵はできるけど、それじゃ踏ん張りが足りない可能性があるの。』

カタログデータでは、ジェットアロンのパワーはエヴァを超えたものよ。大森だとエヴァで押す距離が長くなりすぎます。零号機と協力して、少しでも短い距離で海に沈めた方がベターね』

「トキタさんは凄いいものを作ったのね。エヴァが手こずるパワーの兵器を、なんで民間企業の人が作れるのよ」

『そこはリツコも手放しで褒めていたわ。バックに何がいたとしても、あれを建造した彼らは間違いなく天才だって』

その声を聞いて、アスカは一つの納得を得た。

（天才たちが作り上げた、鋼の巨大ロボットね。なんか親近感あると思ったら、人類の夢を形にした天才ってところが似てるのか）

ドイツ支部然り、ネルフ本部然り、情熱を持った科学者、それも人型ロボットに夢を見た元少年達は似たもの同士なのだろうとアスカは思う。

立場が違うために競争し、お互いにライバル心を剥き出しにしている大人達。

そして彼らに生み出されたエヴァとジェットアロンは今是对立して、さらに言えば、メルトダウンの危険性がある為に、ジェットアロンはエヴァの手で海に沈めることになる。

今の人間の情勢を反映したような悲しい現実を目の当たりにしたアスカは、しかし希

望を持ってコクピットに座っていた。

「で、沈めたジェットアローンのコントロールを取り戻して、大人しくするんだっけ」
『ええ。陸専用で製造されたジェットアローンは、海中の動作はできないようになってるわ。そこで大人しくなればよし。』

大人しくならなくても、無理な稼働を続けければ関節部から自壊して結局は動作を止めるとのことよ。

『そうだったらシンジくんと初号機に出てもらって、海から引つ張りあげれば一件落着ね』

今回の作戦には、オブザーバーとして時田が参加している。

披露宴での鞘当てを演じた2人は、しかし組織の中での役割を認識していた為にそれを引きずることも無く。

周りからすれば意外なことに仲良く科学者からの意見を交わしていた。

その、いつそ和やかとすら言える理性的な会話に勤しんでいた時田からアスカへと通信が入った。

『パイロット、聞こえますか。こちら化学共同体の時田です。』

現在ジェットアローンは想定の上、3倍速にて移動しています。これは戦闘時の数値に近く、この速度での長時間行動は未だテストでも行われておりません。

つまり、今のジェットアローンは何もしなくても勝手に疲労している状態です。被害を減らそうと努力してもらえない事は我々としても大変ありがたいと思えますが」

そこで時田は一度言葉を区切り、一挙動入れた。

カメラがない為にアスカが見ることはなかったが、時田はマイクの前で大きく頭を下げた。

『それ以上に、可能な限り安全な作戦をお願いします。我々は、ジェットアローンが子供に手を上げる事が、あなた方が危険に晒されることが、何よりも恐ろしい』

そう、時田は声を震わせる事なく言い切った。時田はこれから危険に身を投じる子供達に、無用な心労をかけまいと意地を張る。

だが、人類を背負うことを運命づけられた少女達は、そんな彼だからこそ思いやることを選んだ。

「わかったわ。疲れてへばったところを後ろから押して、休ませてあげればいいのね。なんだ、簡単じゃない」

『零号機了解。ジェットアローンの推定トルクから、式号機と同時に当たれば危険は少ないと考えます。大人しくさせますから、見ていてください』

アスカの軽口にレイも続いた。それは軽口と言うには事務的ではあるが、彼女のキャラを考えれば相当勇気を出して言ったのだろう。

『みんな良い感じにリラックスできてるじゃない。じゃあ、お寝ぼけさんをもう一回寝かし付けにいきましょう。レイ、アスカ、準備はいい?』

話しているうちに、式号機と零号機は品川上空まで到着していた。

エントリープラグ内に映された品川近隣は、半分以上が水没していたが、廃墟となつた大小様々なビルが水面から生え出すようにその姿を晒している。

赤い夕陽に照らされ、美しく輝く水面が2人の疾走するコースとなる。

『零号機準備完了』

『式号機準備完了!いつでもいけるわ!』

レイとアスカは、ほぼ同時に声を上げる。その声に満足したミサトは、大きく息を吸い込んだ。

『エヴァンゲリオン、ミッシヨンスタート!零号機、式号機、投下!』

浮遊感と共に、式号機のカメラが急速に迫りくる街並みを捉える。

戦闘用に改造された高精度カメラが動き、品川全域を一度写した後、その視点が一点を拡大した。

ジェットアローンが、品川の街を走る。道路を踏み砕き、途中にある廃墟と化したビルを体当たりで砕きながら、鋼の巨体が夕焼けの街を進んでいく。

「さあ、良い子で待ってなさい!アンタはおうちに帰んのよ!」

その姿を追い、2機のエヴァが疾走を開始した。



作戦が始まった時点でやる事が無くなる。そんな使徒戦に於いてはまずありえない状況でヒマになったミスサトは、今度は半眼になってリツコを見やった。

「で、これはどこまでシナリオなのかしらね」

「あら、なんの話かしら」

「ええ。と思うつきませんな」

素知らぬ顔でとぼける人物が2人いる。

その事実脳が追い付いた瞬間、ミスサトは目を見開いた。

「最初からグルだったの!?」

「グルとは人聞きの悪い。ただ、私が赤木博士にお願いした次第ですよ」

暴走するジェットアローンをモニターで見つめる時田は、自嘲気味に言葉を紡いだ。

「我々は科学者です。人類の発展のために知識を広げ、誰かの為になると信じて新しいものを作る。そして、その運用はえてして我々の希望を裏切るものです」

「人類が今まで作ってきた爆弾なんて、大体そう言うものよね」

ミサトの入れた相槌に、大きく頷いた時田。

「ジェットアローンの武装がないと披露宴では言いましたが、実は武装化自体は可能なのです。戦自の要請によって、既にジェットアローンには戦自と規格を共通した各種ハードポイント（武装コネクター）が用意されています。そして、戦自の装備といえはその本領は使徒迎撃ではなく」

そこで一息の溜めを入れ、時田は懺悔するようにその答えを呟いた。

「対人戦闘。今のジェットアローンは、どんな国の軍隊でも止められない虐殺兵器にしかねないのですよ」

「だから時田さんは我々ネルフを頼った。ジェットアローンと同格のサイズを誇り、実戦経験まであるエヴァならばジェットアローンを止めることができるから」

一息を入れて説明を追加するリツコへ、そう言うわけですと時田は答える。

「まあこれで私も進退窮まったわけですが、まあ仕方ありませんな」

やれやれ、と軽く肩をすくめる時田は、しかし後悔は見られなかった。

この切迫した世界情勢の中で国家を裏切った人間が、どんな人生を送るのかを想像できないわけではない。

しかし、自分の人生と仲間たちとの夢、二つを天秤にかけ、夢を守ることを選んだ科学者は全てを諦めたように呟く。

「あとは頼みましたよ、ネルフの皆さん」

万感の思いを込めた言葉が指揮所に響く。しかし、残念ながらその願いの受け取り手はそこにおらず、頼まれた側のネルフは笑みを浮かべてキツパリと断った。

チラリとリツコに視線を送り、彼女がしっかりと頷いたところを確認してミスアトは答える。

「清々しく言ってる所悪いけどね、ウチの偉い人のことだからなんか悪巧みをしてると思うわよ。ネルフに関わったら、そう簡単に足抜けできないと覚悟しなさい」

だから、とミスアトはモニターを見据えて言う。

「まずは見ておくといいわ。これから、長い付き合いになるんだから」



廃墟となった夕焼けの街を、三体の巨人が疾走する。

ユニークな走法で先行する首無し巨人と、陸上選手もかくやという美しい姿勢で追走する赤と青の巨人。

巨人にとつて浅瀬となっている旧東京の湾岸部。かつては人が居住区としていたことを示す崩壊したビル群は、しかし疾走に伴って巻き起越したソニックブームにて2度

目の滅びを迎えることとなる。

そのソニックブームの先端を駆けるアスカは大きく腕を振り、

「くらええ——!!?」

大振りの張り手をもってジェットアロンの肩を叩いた。

それは下からの掬い上げのアツパー気味の角度となり、元々重心が高い所にあるジェットアロンの姿勢を大きく崩すことに成功する。

「レイー！」

『今……ッ!』

浮き足だつジェットアローンに間髪入れず突撃する零号機。

レイは、細かい動作に未だ慣れない不利を力任せの体当たりでまかした。

ジェットアローンが揺らぐ。

『お願い、曲がって!』

レイの祈りに似た叫び。その言葉と共に零号機が動く。

ジェットアローン側に寄せていた重心を戻し、深く沈める。

大地を踏みしめるように体勢を変えた零号機は、そのままジェットアローンの細い腰を担ぎ上げるようにして投げ飛ばした。

エヴァの体格からすれば約二歩分ではない投げ。パワーに劣る零号機からすれば

精いっぱいその投げは、しかし自動制御のジェットアローンでは対応できない時間を作り出した。

「とどめえー！」

その一瞬の間に、アスカと式号機が更に攻撃を差し込んだ。

「アンタは、あつちで寝てなさい！」

裂帛の氣勢と共に、上段の回し蹴りを式号機が放つ。

徹底的にジェットアローンの体勢を崩すことを目的とした連撃。

その締めとして放たれた式号機のカカトが美しい弧を描き、ジェットアローンの顔を粉砕した。

『やったー！ジェットアローンのAIは強力な攻撃を受けることで回避モードに移行するわー！』

無線にリツコの歓喜が乗る。その言葉が持つ意味を、アスカの脳が高速で言語化する。

（モード変更に伴って、機体情報の再収集と処理に数秒間がかかる！ジェットアローンが近距離戦闘に対応できないこの弱点をつけば）

「レイ！引く張るわよー！」

『了解！』

人類最高の出力を誇るエヴァンゲリオンが、最高速度に至るのには十分な加速を得ることができると。

「だりやあ——！！！！」

ジェットアローンの特徴でもある長く伸びた二本の腕。その片方ずつを抱え込んだ二機のエヴァンゲリオンが、品川の街を吹き飛ばしながら進んでいく。



事態を把握するために品川近辺の映像と模式図が広がる指揮所。

温度が上がった指揮所を見渡しながら、ミサトは満足を得る。

今回の作戦のために急遽仮設された指揮所に十分な面積はなく、派遣作戦室のメンバーが肩を寄せ合うようにして自身が管理するモニターとデバイスを操作していた。

そこには日向や青葉といった作戦部、情報部の中核の顔がなく、少しばかり違和感を覚えるものであったが

(私とリツコという指揮がいないうネルフ本部の守りを任せられる人って、なかなかいいのよねえ)

ミサトの言葉の通り、それは仕方のないことだ。現在の作戦は使徒との戦いではな

く、本部が使徒の奇襲を受ける可能性がゼロではないことを意味する。

万が一の備えとしてシンジ及び初号機の待機は必要であり、同じくそのサポート要員として要塞都市を運用するオペレーターを欠く訳にはいかなかった。

ミサトが安心して後を任せられる人材というと、やはり彼らしかない。

(みんな、いい具合に慣れてきたわね)

作戦の情報呼びかけでもって共有し、小気味良く動くオペレーターの双腕が戦場を演出する。幾度の実戦を越えた彼らは、全体の空気を共有する術を手に入れていた。

その彼らだが、シンジが来る前は冷静で、冷たい雰囲気を纏ったエリート達だった。

若くして国連の秘密組織に入るほどの俊英たち。彼らには彼らの苦難と努力があり、それは彼らが自分を守るための壁となる。

人に頼らなければならない人材はネルフにはおらず、必要な仕事は適切に配分される組織。

組織としては理想的な環境にあつたネルフは、それゆえに職員同士の関わり合いの少ない組織でもあつた。

(あの時は、なんか無味乾燥としてたわねえ)

組織が正常に回っていたのは、ひとえに彼らの能力の高さ故であり、そして問題にならないが故にさらに上を目指すための熱は生まれない。

そんな人間関係の希薄なネルフの中でも、作戦室は特に奇異に見える部署だったとミサトは過去を振り返る。

使徒の襲来は確実と予想される為に必要性は認められつつも、肝心の使徒がどのようなのか予想がつかないために具体的な結果を出すことのできない部署。

優秀な人材をあつちこつちから引っこ抜いた今の作戦室のメンバーでなければ、とつくの昔に腐るような所だった。

腐ることだけはなかったが、ゆつくりと士気を下げてゆく作戦室。その彼らが身を寄せ合って、ただ必死になって声を上げるのはいつになつてからか。

シンジが来て、年端もいかない子供が困難に体当たりでぶつかってゆく姿を見た時か。

そんな子供が、使徒の攻撃の前に倒れた姿を見た時か。

いずれにしろ、彼らに火が点いたのは使徒が来たときではなく、シンジが来た時だったのだけは確かだ。

その波紋はいつしか当たり前のものとしてネルフ全体の熱となり、その熱が隣にいる枯れた研究者にも届くことをミサトは願う。

(大人が諦めるなんてね、子供がいるところだけではしちゃんないのよ)

結局、ミサトが時田の話を一蹴した理由はそこだ。これから人類の未来を楽しむはず

の少年少女が、大人の代わりに人類を背負ってしまったている。

その上で自分勝手に自身の人生を決める自由など、もはやネルフや、それに関わった大人たちに残されているはずはない。

だからミサトは、この男に人の熱というものを見せてやりたかった。

熱をもって人類の為に戦えるその心意気こそが今の作戦部。そしてその意地は、この男に再び熱をともし事ができると信じてミサトは思考を回す。

「エヴァンゲリオン、亜音速に到達しました！」

指揮所の中に、作戦部の声が響く。

そのオペレーターにウインクを送ったミサトは、指揮所全体に指示を放った。

「キャリアー再突入！アンカーボルト射出タイミングは作戦部各員に任せます。ジェットアローンに直撃させようとしなくていいわ。あの子たちがキャッチさえできれば無理にでも結ぶんだから、大体のところまで撃っちゃいなさい！」

「了解！」

「東京湾まで残り1000mです！エヴァ各機、活動限界まで50秒！」

日向の報告に続き、青葉の報告が入る。ここが勝負だと確信を得たミサトは、追加で皆を煽った。

「聞いたわね皆！人類の夢の踏ん張りどころよ！」

「おおー！」

ミサトの煽りに作戦室がノツた。男女の区別なく揃ったその声が、指揮所の内部に反響する。

「20秒後にアンカーを届けるわ！二人とも、頼んだわよ！」

ミサトの視線の先、三体の巨人がスツ転んだ。



プラグ内の映像が乱れる。いや、実際には乱れたように映った。

エヴァに搭載されたカメラは、一瞬にして転倒するエヴァの視覚を正確にモニターに映していた。

ただそれを、人間は認識することができない。

だが、チルドレン達だけは別だった。エヴァに神経接続されたアスカとレイはエヴァの認識能力を一時的に手に入れ、その情報を人間サイズにダウンサイズした上で集中処理させることができる。

だから、誰もが転倒したと思った中で、2人だけは引つ張っていたジェットアローンの腕を前に放り出し。

「アンカー寄越して！早く！」

倒壊した家屋をすり潰すように足裏にあて、転倒の動きを無理矢理に制御する。2機のエヴァは体を大きく丸めて蹲り。

『アンカー発射！』

踏ん張った。

ミサトの指示と共にキャリアーからワイヤー付きのアンカーが発射され、エヴァ2機の予想進路上に到達する。

アスカとレイは一瞬の停滞の後でアンカーを手にし、お互いへとパスした。

アンカーは先の転倒によって腕を前に出したジェットアロンの脇近くを通り、ワイヤーを胴体部分に巻き付ける。

そのままアンカーをキャッチしたアスカは、躊躇なくその先端をジェットアロンの背中に突き刺す。

「どおりやああ——！！」

アスカが吼えた。

アスカ自身への気付けとして発せられたその声は、通信に乗って全ての仲間への鼓舞となる。

『零号機！がんばって！』

『キャリアーフルスロットルにて点火！最後には落ちてもいいから全部使っちゃいなさい！』

突き刺した勢いのまま式号機がジェットアローンの背中を押し、腰を落とした零号機が最後の体当たりを仕掛ける。

体勢を崩したジェットアローンはもはや成すすべもなく二機のエヴァとキャリアーに押し出され、

『「行けえ——！！」』

白い巨体がゆつくりと傾き、戻ろうと身をよじりながら東京湾に沈んだ。

その姿を確認した少女が、そして司令官として戦場をコントロールした女が叫ぶ。

『よっしやあー！』

仮設司令部に歓声が舞い上がった。